

## 1920年代ロシア農村の社会政治的構造 (2・完) ——村ソヴェトと農民共同体——

奥 田 央

### 六 大衆活動

#### 1. 部会の不成功

ソ連政権は、村ソヴェトに地域的な権力としての実体を付与するために、村ソヴェトに付属して部会<sup>1)</sup>、<sup>セクツィヤ</sup>委員会を設置した。部会とは、村ソヴェトの課題を具体的に遂行する各種部門別の常設委員会(農業部会、文化啓蒙部会、税・財政部会、保健部会、環境整備部会、商業・協同組合部会等)であり、ここには村ソヴェト員ばかりでなく一般の農民も参加するものとされた。最後の、一般の農民が農村建設を担い、ひいては国家建設に参加することが、「大衆活動」が意味する主要な内容であった。部会は、村ソヴェトが担当すべき文化・社会・経済部門の全体性という理念を表現し、地域社会を建設、変革する農民大衆が直接に政治に参加する、というロシア革命の理念をも強く維持、表明している。それは、より現実的には、政治社会的にアクティブな農民(アクチーフ)をソヴェトに引きつけ、つくりだすという課題を担っていた。

もともと非党員大衆のイニシアチヴを基礎に国家建設を構想する部会のアイディアは、都市の経験から来たものであった。革命当初から、モスクワ、レニングラード、キーエフ、ニジニ・ノヴゴロドなどの都市のソヴェトは、福祉、教育、保健、住宅問題など、人々の生活の基本をなす経済的、文化的発展の問題に多数の労働者が参加していた。これと同様にして、農村において、村ソヴェトが、土地整理、農業改良の問題、学校、病院の組織、道路の建設など

を担当することが考えられた。<sup>2)</sup>

おそらくこのとき、農村に以前から存在する農民共同体との関連について考え抜かれてはいなかった。部会の設置がはじまったのは、1924年10月の村ソヴェト規則以来のことであるが、そのときにも「必要な場合には」と慎重な限定が付せられていた。公式の解説者は、部会はこのとき「かなり遠慮がちに」導入されたと表現した。<sup>3)</sup> 1925年にも、専門論文は、それが「本質的には都市と工場集落のソヴェトにおいてだけ発生した」ものであり、「農村にとってこの問題は新しい」と、不安を表明していた。<sup>4)</sup>

しかし、1927年3月21日付で部会規則<sup>5)</sup>が公式に採択される頃までには、部会は、わずか2年余で後戻りのできない既成事実となっていた。部会規則はその設置を義務的なものと見なしており、それは郷(地区)等の決定によってのみ廃止することができた。

部会の歴史がきわめて浅いことに注目しなければならない。党組織やソヴェトの上部機関による多くの調査資料は、部会が実際には村ソヴェトに設置されなかったこと、たとえ設置されていた場合にも、その大半は、指示にしたがって組織したと村ソヴェトが上部機関に報告しただけで、そのあとは会議がもたれることもない形式的な「書類上の」存在であったことを示している。これらの調査結果、事実を語った記事は、1920年代の新聞、雑誌、アルヒーフ資料に文字通り満載されている。村ソヴェトの部会だけではなく、郷(地区)の部会さえ活動が無内容であることは「くりかえすことも、聞

くことも、書くこともうんざりする」と、全ロシア中央執行委員会の機関誌が1930年初頭に洩らしたとだけ記しておこう。<sup>6)</sup> 1928年にチュグノーフは「ソヴェトの部会の完璧な無活動」にさえ言及した。<sup>7)</sup>

しかし、部会の数、参加者数に関する無数の数字が存在するのはなぜか。或る地域について、部会がないという発言と、具体的な数字をあげた発言が同じ会議で一度に起こるといふ珍事があった。<sup>8)</sup> 1926年のスターリングラード県での次の一例はそれへの回答となっている。郷執行委員会は郷内の部会について資料を上部へ提出する義務を負っていた。同県の或る郷では「N村ソヴェト書記が郷執行委員会で『部会の活動はどんな状態か』と問われると、書記は、部会とは何か、知りもしない。ところが1週間後に、彼は自分の村ソヴェトの部会の活動について報告を送ってよこすのである」。<sup>9)</sup>

部会によるソヴェトの理念の実現という計画が暗礁に乗り上げていることは、その指導機関自身が知っていた。1928年5月に全ロシア中央執行委員会が開催した地方執行委員会組織部長会議に提出された資料は、全体として、部会が、農村の勤労大衆全体を国家統治に参加させるという課題を果たしていないことを物語っていた。<sup>10)</sup>

全ロシア中央執行委員会の同会議は1月～3月の村ソヴェト部会の大量点検（このときはとくに「コンクール」と称された）の総括でもあった。同会議に集約された地方の資料を一部引こう。北カフカース地方執行委員会は、農民大衆の参加の問題について次のように記した。それは「われわれのもっている資料では非常にひどい。大多数の場合、部会はただ村ソヴェトのメンバーからだけ構成されている。地元では、非ソヴェト員は部会の活動に全く引き入れられていないか、非常にわずかな数でしか引き入れられていない」。<sup>11)</sup> 村ソヴェト員の参加にも固有の形式的な特質が支配していたことはまもなく論及しよう。

この会議に先立って、ひとつの論文が、部会

の活動が全国において一般的に弱体である明白な証拠として、「委員会〔部会〕が一年間にわたって会議を一度しか（組織会議しか）開かなかったという無数の事実」をあげた。<sup>12)</sup> 興味深いことにその詳しい数字も残されている。それを算術平均すると、たしかに、1927/28年度の前半にひとつの部会が平均1回強の会議しかもたなかった事実がえられる。<sup>13)</sup> いいかえれば、部会を組織したという1度目の会議のあと、2度目の会議は開かれないか、開いても人が集まらなかったという状況が浮かび上がるのである。

実体が何もないというこの数字は、しかし、全国の平均である。地方レベルの事実も付け加えよう。全ロシア中央執行委員会の同会議向けの北カフカース地方の資料は、年間を通してほとんど会議をもたない部会の状態をあらわす数字を詳細に紹介したあと、「耐え難い数字である！」と結んだ。<sup>14)</sup>

組織会議における部会の組織の仕方については、1926年にロシア共和国労農監督人民委員部がウラル州の2管区（クルガン、ペルミ）の7つの村ソヴェトを調査した結果が、全国の村ソヴェトの部会に共通する特徴をいいあらわしている。「部会は、調査されたすべての村ソヴェトに組織されている。部会の名称とそのメンバー、すなわち『各部会への村ソヴェト員の配分』が、選挙後すぐの会議で村ソヴェトの決定によって確定された。村ソヴェトの大半において、一件はこれでおしまいである」。<sup>15)</sup> 村ソヴェトの議長か書記は、上から指示されたとおり、部会を形式的に多数つくり、それぞれに村ソヴェト員を機械的に貼り付け、村ソヴェトの決定としたのである。決定の後、指名された当の本人が全く事情も知らないという多くの事実が語られた。

1928年に、チュグノーフは、村ソヴェト員の、このような形式的な参加でさえ実際には不十分で、イヴァノヴォ・ヴォズネセンスク県のデータでは、彼らの4分の1にも満たない部分（22%）しか部会メンバーとして記載されて

いない、と明らかにした<sup>16)</sup>(前記1927年3月の部会規則は、各村ソヴェト員は最小限ひとつの部会に参加することを義務づけていた)。

前節において論じたように、村ソヴェトの統合によって、多くの村が村ソヴェトの影響から離脱した。多村型村ソヴェトにおいては、何キロも離れた村から、村ソヴェトのある村の部会に農民が定期的に来ることは実際にはありえないことであった。部会が存在しても、そのメンバーはいくつもの村に形式的に分散して割り当てられていた。部会の会議もなく、メンバーは部会の存在すら知らされていなかった。<sup>17)</sup>

それに対する措置は当然にしてとられていた。村ソヴェトのない遠い村に、村ソヴェト代表のもとに支部会(поселенная секция; подсекция)を組織するというのがそれである。その必要性は、地方では早くから指摘され、その試みもなされた。しかし直後からそれはフィクションであると批判を受けた。<sup>18)</sup>1929年5月の第14回全ロシア・ソヴェト大会は、決議でその必要性を明文化した。<sup>19)</sup>それは、実体のない部会の上に、死んだ組織を「二階」として積み上げることを意味したにすぎなかった。<sup>20)</sup>1928年のヴォルガ中流では、村ソヴェトのない村が1万あるにもかかわらず、支部会がつくられた村ソヴェトは(支部会の成否を問わずに)わずか20程度であった。<sup>21)</sup>

## 2. 不成功の原因

部会が不成功であった原因は次の点に求められる。第1に、議長以外の村ソヴェト員が名目的である限り、部会が存在しうる可能性はなかった。<sup>22)</sup>また、村ソヴェトに選出されたものは、読み書きの能力が低く、部会がもつ高邁な理念について理解しているものもいなかった。1928年5月の前述の全ロシア中央執行委員会の会議でブリャンスク県の代表はつぎのように発言した。

農村で誰が大衆活動を実行できるのか。選出されたものは読み書きも中途半端で、どんな大衆活動ができるのか。彼らは、大衆

活動ができないだけでなく、彼らがいる組織の本質を頭に入れておくことさえできないのである。<sup>23)</sup>

なお、部会の労働は、自治や「社会奉仕活動」という思想と結びついており、すべて無報酬であった。それは1927年3月の部会規則にも明記されていた。したがって農民のなかには、部会の労働を、村ソヴェトの労働と同様、「労役義務」と見なす風潮があった。そのため村ソヴェト員自身が部会の無報酬の活動を忌避した。<sup>24)</sup>

第2に、前述のように部会のアイディアは都市出自であった。1928年5月の全ロシア会議では、ロシア共和国労農監督人民委員部のヴィニコフが、「農村の活動においては、農村の具体的な条件を考慮せずに、都市でのソヴェト建設の方法がしばしば機械的に適用されている」と指摘した。<sup>25)</sup>ところが農村には、地方自治の主体としての農民共同体が存在していた。部会が何らかの具体的な活動をはじめようとしても、その瞬間に、農民共同体の機能と重複し、衝突した。些細な問題でもスホードが召集されたという事実象徴されるスホードの機能の広汎さは、村ソヴェト(部会)の活動に対する根本的な障害となっていた。

同じ場所で、ヴィニコフは、部会はそのため農民に人気がなく、農村では「臨時委員会」(временные комиссии)が浸透していると述べた。この「臨時委員会」とは、上からキャンペーンが村ソヴェトに下りてきたとき、それに対応して一時的に設置される委員会のことである。たとえば、村ソヴェトは、10月革命祝賀キャンペーンを遂行するのに、そのために祝賀委員会をつくり、それを(存在するはずの)文化啓蒙部会に課すことをしなかった。<sup>26)</sup>後者に実体なかったからである。これは、1928年の当時、上部機関から派遣された全権が村ソヴェトを席卷したときにつくられた臨時の組織と、部会を無視した点で、あるいは部会にとってかわった点で、基本的には同じものである。

1925年のタンボフ県では、共同体と部会と

の関係についての貴重な証言が残されている。県執行委員会メンバーのゲ・ペ・ペレカリスキー（Г. П. Перекальский）は、ボリソグレプスク郡ピチャエヴォ郷で部会に関する会議に参加したときの、次のような出来事を記録した。会議で農民はこういった。「共同体から選出されたのではない人間が部会に入っている、と共同体にいわれるのは具合が悪い。だからミール（スホード）がわれわれをここへ派遣してくれたのであればよかったのだが」。<sup>27)</sup> 彼らは、部会が取り扱う分野はミールのものであり、ミールの権威を抜きにして部会の活動はありえないと危惧していた。いうまでもなく、(村ソヴェトではなく)スホードが実際に部会のメンバーを選出していたケースはまれではなかった(後述 51 頁)。<sup>28)</sup>

第3に、1926-27年に労農監督人民委員部が実施した全国調査の結果は、「部会の決定は実際的な意義をもっていない」と結論づけた。なぜならば、様々な社会経済部門を担当する部会が作業に取りかかるには財源が要求されたが、村ソヴェトは部会の活動を支える資金的な能力をもっていなかったからである。<sup>29)</sup> 村ソヴェトが郷から下ろされる資金は議長と書記の給料とその他(暖房費(薪)など)だけであり、それだけでは、農村の多様な需要に応えるいかなる社会的、経済的機能をも果たすことはなかった。

村ソヴェトが具体的な活動を開始するには、共同体の自己課税に依拠せざるをえなかった。それは、これまでも見た村ソヴェトの土地団体への依存と従属の原因であった。ソ連の政策担当者は、自己課税によって多額の資金をもつ農民共同体との対比で、村ソヴェトが独立した村予算をもつことが最重要課題であると熟知していた。

本稿に必要な限りで、村予算について簡単にふれておこう。それは、部会とほぼ同じ頃に導入が開始された(1925/26年度にロシア共和国の全村ソヴェトの1%)。村予算は1927/28年度にロシア共和国の6%の村ソヴェトに導入されていた。1928年後半からその導入は計画的

に促進され、1929/30年度には一挙に35%にまで高まった。<sup>30)</sup> しかし村予算は、当初の実験的な試みは別として、その多くは「書類上の」存在であった。

村予算の収入項目には税収入が高い比率を占めていた。顕著な例をあげれば、1927年のヴラジーミル県では、各郷に村予算をもつ村ソヴェトがひとつずつあり(それは村予算導入の「計画的」を窺わせる)、全部で17存在した。そのうち15の村予算の収入はすべて排他的に農業税からえられていた。<sup>31)</sup> 税からの収入は上部機関の采配に依存するものであり、独立の予算とはいいがたかった。また、その支出においても、村予算の支出に占める給与の割合は、1927/28年度に全支出の75%であり、個々の地方ではそれは80%に達した。<sup>32)</sup> いいかえれば、郷から村ソヴェト員の給与とその他のわずかな費目(暖房費や照明費など)だけが送られ、より財政的能力をもつ郷でだけ、教師、農業専門家、医師への給与が送られていたという旧態と、事実上何ら異ならなかった。

そのような村予算は郷予算の一部の形式的な移しかえという性格をもっていた。その収支表は、ふつう、州、管区の命令で地区執行委員会のなかで作成された。それを村ソヴェトが受け入れた段階で、後者は村予算へ移行したと見なされた。<sup>33)</sup>

当時の概説書は、「これまで地方では、大多数の場合、村予算は下からではなく、住民自身のイニシアチヴによってではなく、地方、管区の執行委員会の命令によって導入された」と、あからさまに書いた。「まるで割当のように、これこれの村予算をつくらなければならないという指示が地区か郷にやってくる。それだけである」。「しばしば村予算の作成に住民は全く参加せず、村ソヴェトでさえそれを作成するのではなく、作成は地区の中心地か、いっそうひどい場合は、管区(郡)の中心地でおこなわれている」。<sup>34)</sup> まもなく全面的集団化の先頭に立つウラルのイルビート管区エラーニ地区には、17中2つの村ソヴェトに「独立の」の村予算が

あった。1929年1月9日、エラーニ地区執行委員会は、一つの村ソヴェトに「独立の」予算をつくるよう指示を出した。「本状により、1928/29年度の収入と支出の部を送付する。そこに示された指示に厳格に導かれながら執行すること」。その収入の総額の93.5%は地区が農業税からの控除を村ソヴェトに与えたものであった。<sup>35)</sup>「村予算とは収支表(приходно-расходные сметы)にすぎない」と頻繁に語られたが、それは郷(地区)が村予算を作成し、郷の意思にしたがって村ソヴェトが予算を執行している状況、すなわち村ソヴェトが「予算権」をもっていないことを意味していた。

村予算の創出が、郷予算の分散化、弱体化を引きおこさないためには、村予算の独立の収入源、すなわち税によらない、地域のそれ——土地の賃貸、バザールからの収入、小企業、天然資源など——が必要であった。しかし収益性の高い対象は、土地団体、あるいは郷によって管理されていた。<sup>36)</sup>それを村ソヴェトに移すことは郷と土地団体双方の利益と対立した(なお、後者の収入を村ソヴェトに移すことは、すでに土地団体の廃止の問題であった)。

この現実が発生する問題に対して、法律もまた適切に対処していなかった。1922年の土地法典も、1926年1月5日に農業人民委員部が承認した土地団体定款も、土地に対する団体の排他的な権利を擁護する立場から、共同の土地からえられる収入は土地団体に帰属するものと規定していた。ところがそれとは別に、1925年には、ロシア政府は、明らかに村予算創出を展望して、7月23日付で、空閑地の賃貸によってえられる収入を村予算や郷予算に与えることが「許される」とする注を土地法典第28条に追加した。このようにして、その段階で、土地団体、村ソヴェト、郷執行委員会のそれぞれが権利を主張できる状態にあった。<sup>37)</sup>

村予算を担う村ソヴェトの側での困難もきわめて深刻であった。すでにわれわれが論じたように、議長と書記しかいない村ソヴェト、しかも低い識字率や高い流動性という問題をもつ村

ソヴェトはそれを処理する能力をもっていなかった。1927-28年の労農監督人民委員部の調査資料によれば、「(郷より上の)非常に多くの執行委員会」自体が、村ソヴェトにはその準備がないという理由で、村予算の導入に否定的な態度をとっていた。<sup>38)</sup>とくに財務人民委員部は、収入源の確実でない村ソヴェトに村予算を広汎に導入することに対して強く否定的であった。<sup>39)</sup>村予算導入において注目を集めていたヴォルガ下流に関する分析は、郷どころか、村ソヴェト自身がそれを拒否しているとして、次のように異例の率直さをもって告白した。「村ソヴェトは、村予算の廃絶を歓迎するだけであろう。そして村予算からできるだけ早く逃れるために、全力でその廃絶に協力するだろう」と。<sup>40)</sup>こうして、1929年末には、村予算の導入によって村ソヴェトの活動には何の変化ももたらさなかったという最も悲観的な報告があらわれた。<sup>41)</sup>

部会の不成功の原因について語るとき、総括的に注目しなければならないのは、部会そのものが農民共同体の存在と重なり合っていたことである。この点で、レズーノフが次のように書いたことは示唆的である。「村スホードは1923~25年に大発展を遂げ、それが排他的な活動力をもっていたために、…部会はまさに発展することができず、活動すべき対象がなかった。なぜならば、スホードがすべてに従事していたからである」。<sup>42)</sup>1923~25年には部会は存在しなかった。本節で論じたのは1925年以降の時期についてである。それが不成功であったことは、1920年代全体における農民共同体の「排他的な活動力」を物語っており、後者の廃絶は1920年代末の現実のなかで提起されることになる。

### 3. 部会とアクチーフ

知りえた限りで、部会に対する反意を公式の席上もっとも強く表明したのは、1925年1月のソヴェト建設会議における発言者(ヴラヂーミルスキー)であった。<sup>43)</sup>彼は、毎週、(ウク

ライナ) 人民委員会議でおこなわれた重要な報告から非常に多くを得た、と述べた。その上で、現在、委員会や部会に大きな意義が与えられているが、それは誤っている、と主張した。それは、「書類上存在する」「純粋に官僚主義的な機関」であるが、そうであればまだましなケースである。最悪の場合には、赤軍を勤め上げた人物が、村ソヴェト議長として農村に来て、指示に規定されている委員会をつくりだし、村ソヴェト員全員をそこへ貼りつけた。いくら委員会が活動しても、活発化の成果を得ることはできないのであって、スホードを利用する形態を見出さなければならない、と彼は主張した。これは、後述するゲラーシモフの主張(52頁)と重なっている。

さらに彼は、ウクライナの村ソヴェトはロシアより発達しており、村ソヴェトに議長しかいないロシアとは異なる、と述べた。<sup>44)</sup> 彼の部会についての発言はウクライナに関するものであり、こうして、ロシアの事情はいつそう悪いという主張にもなりえた。

部会、委員会の無内容さに幻滅した人々からその廃絶についての提案が出た。しかし、部会は、中央機関の指示にもとづいて存在しており、地域のイニシアチヴでそれを廃絶することは不可能であるという率直な意見も出された。<sup>45)</sup> 本質的にいえば、部会は、末端の大衆的な地域の権力機関というソヴェトの先行的な理念にもとづいて、内容のない村ソヴェトに実体をあたえようと苦慮してつくりあげられた、多くは空虚な構築物であった。

とはいえ、設置された部会が実際に活動しているという報告はたしかにあった。それを追跡することは、興味深い一面を明らかにしてくれる。そのうち税部会のように、本来の村ソヴェトの業務を担当している部会が機能し活動していたことは理解しやすい。トヴェーリ県の1郷を詳細に研究したポリシャコーフは、村ソヴェトの部会については、珍しく、公式的に、通り一遍に扱っているにすぎない。彼は、税部会がもっとも活動的であるとわずかに指摘して

おり、他の部会については言及していない。<sup>46)</sup>

しかし税部会以外にも、部会が活動しているという報告がある。それは、部会が土地団体(共同体)の延長であるか、村ソヴェトと無縁のところにあるかのいずれかであった。

たとえば、土地(あるいは農業)部会は前者のケースである。1926-27年の労農監督人民委員部の全国調査結果は、その意義の大きさに注目している。それは、オリョール県の村ソヴェトを例に、他のどの部会も組織会議以上に何も活動しないなかで、土地部会は「もっとも生命力がある」と着目し、その「精力的な活動」は、トヴェーリ県でも、ウラル州でも、北カフカーズでも確認できると指摘した。<sup>47)</sup>

そのうち、ウラル州の2管区の調査結果は、次のように総括した。農業部会は、農民の申請によって個々の農家間での土地の割替(割引・割増)、宅地の分割、フートルへの分離、学校の土地の分離などを審議し、決定を採択していた。そこには、土地団体代表が参加していた。調査報告は「ここでは村ソヴェトと土地団体の権限の混同が大々的にあらわれている」と重要な指摘を残した。<sup>48)</sup> 北カフカーズについては、1928年5月の全ロシア中央執行委員会の公式会議において、同地方代表(ヤノフスカヤ)は、部会、村ソヴェトの総会、スホードを分析した結果、農業(土地)部会は土地団体の問題を審議しており、「土地団体の補助機関になっている」、「若干の場合には、土地団体はソヴェトの農業部会をみずからに従属させた」と報告した。<sup>49)</sup>

当時、土地に関する多くの係争は郷土地委員会で解決されるものと規定されていたが、ふつう農民はその大半を直接に共同体内部で解決していた。このため土地部会という制度が与えられると、彼らはそれを係争解決の一種の司法的機関として利用した。当時の専門研究は、部会のこの方向を「土地団体の独立性の清算」と規定した<sup>50)</sup> が、これは、同じ事柄を逆転して評価した例であり、村ソヴェトに関する事実関係の評価にありがちな現象である。共同体が機能

している状況を、村ソヴェトが機能している状況だと把握したために、共同体の終焉がはじまったと把握したのである。

全体として、土地部会の発展は共同体的機能が部分的に隆起したケースとして評価できるであろう。

しかし土地部会が重要な役割を演じている例は少数である。トゥーラ県アレクシン地区の1村ソヴェト(地域ソヴェト)では、他の様々な部会は全く活動していなかったが(このような部会のメンバーは、無報酬では働かない、「することがない」、と理由を語った)、税部会と、部分的に土地部会だけが活動していた。<sup>51)</sup> 労農監督人民委員部が着目した北カフカーズでも、1928年前半の「コンクール」(前述46頁を参照)のための資料は、「北カフカーズの多くの村ソヴェトには、年間1度も会議をもったことのない部会がある」として、部会の不首尾を強調し、土地部会だけをわずかな例外として扱っている。「スターロ・ヂェレヴェンスキー村ソヴェトのすべての部会のうち、1926年10月1日から1927年5月4日までに土地部会は4回会議をもち、その他の部会は1度ももたなかった」等々。<sup>52)</sup>

1924-25年の村ソヴェトの分析結果によれば、それ以外に、部会に似た常設あるいは臨時の委員会(衛生、消防、学校、多圃制への移行、採草地・森林の分割)がモスクワ県をはじめ全国各地に見られた。これは、村ソヴェトと無縁の組織であった。「このすべての委員会はスホードのイニシアチヴで生まれ」、村ソヴェトの外で活動していた。<sup>53)</sup> 村ソヴェトは農村でどのような新しい発案が生まれているか、しばしば知りもしなかったのである。

このようにして、部会とアクチーフという問題が共同体の「改良」についての議論と関連することが理解できる<sup>54)</sup>(この問題は「むすび」の章においてふたたび論じられる)。モスクワ県ズヴェニゴロド郡ヤグニンスカヤ郷は、首都モスクワの強い影響下にあつて、協同組合の活動も農業の改良も著しく進んだ先進地帯であ

り、ここでは、農民アクチーフの活動が顕著であった。しかしここでもスホードは強固で、村ソヴェトをみずからの決定の、たんなる執行者にしていて、農民アクチーフは、村ソヴェトが決定を出す、「誰がそのような決議を出す権限を与えたか」と村ソヴェトに対して否定的に振る舞っていた。<sup>55)</sup>

1927-28年の労農監督人民委員部の調査もまた、「経営の改良された方法への移行、農具貸所、種かけ場、種子精選所、その他の設備の建設においてイニシアチヴは土地団体から来ている」と確認した。<sup>56)</sup> この状況は、集団化前夜にいたってもかわらなかった。1929年8月~9月にレニングラード州の様々な地区、管区で調査された村ソヴェトでは、全般的に部会は発展していなかったが、それが活動しているところでは、部会(農業、福祉、文化)が、村ソヴェト付属で組織されるのではなく、土地団体によって選出されているケースが認められた。<sup>57)</sup>

村ソヴェトは、第1に代表性が狭隘で(「これまで村ソヴェトにいるのは議長と書記であり、それは、以前、村長と書記が働いていたのと同様である」<sup>58)</sup>、第2に、社会的・経済的な分野での機能をほとんどもっていなかったこと(諸種の措置を実行できるだけの物質的基礎をもたなかった)を原因として、1920年代に期待されていた新たな展開へ農民の活力を引きつけることができなかった。このことは1920年代後半にはいたるところで指摘があらわれた。<sup>59)</sup>

立法もまた、土地団体の独立した経済的、社会的イニシアチヴを促進する立場に立っていたが、この点に関して村ソヴェトには冷ややかであった。1922年の土地法典45条は、複数の農民共同体は、農業生産の個々の過程を共同化するためにでも、あるいは「特定の農業の課題を共同して達成する」ためにでも「連合する」(объединяться в союзы обществ)ことができると、何の留保条件もなく、規定していた。<sup>60)</sup> 他方、村ソヴェトはこのような権利をもっていな

かった。そればかりでなく、農業人民委員部は、1926年8月17日付で、村ソヴェトは土地団体に活動に介入する権利もないと解説していた。<sup>61)</sup> 両者の関係を分析していた当局者は、それに不安を表明していた。たとえば1926-27年に村ソヴェトの全国調査をおこなったロシア共和国労農監督人民委員部の担当部局は、「〔土地団体の〕この権利は、ソヴェト機関のシステムと深刻な競合関係に入りうる、政治的に好ましくないグループのための土壌となりうる」と指摘した。<sup>62)</sup>

農民アクチーフが役割を演じるべき村ソヴェト部会が成功を収められないことには、土地団体と村ソヴェトとの、この法的な権利状態の相違も原因していた。ロシア共和国労農監督人民委員部による1928年のタンボフ県の調査結果は、次のように断定した。

土地団体は連合する権利をもっており、したがってこの権利を土地団体のアクチーフも持っている。したがって農民同盟の萌芽的な状態からいっそう広汎で強力な組織へと転化する可能性も持っている。…その結果、農村における土地団体の権威は非常にしばしば村ソヴェトよりも高く、農村の活動的な部分はソヴェトの活動よりも土地団体の活動により関心をもって参加している。これが、村ソヴェトの部会に活動能力がないことの根本的な原因である。<sup>63)</sup>

実際、1920年代に農民の間で農民同盟への要求が高まるなかで、「いっそう広汎な組織」があらわれることがあった。農民同盟への要求がオ・ゲ・ペ・ウの報告書のなかで、「反ソ的扇動」という独立の節で取り扱われるようになる1927年秋以前<sup>64)</sup>には、オ・ゲ・ペ・ウは、農民の連合への運動をたんなる要注意の対象として記録していた。それによれば、1924年12月24日、サマーラ県プガチョフ郡バラコーヴォ郷セリスキー・ホジャーイン村の農民ザレーゾフ(B. Ф. Зарезов)は、同郷の自分の村を含む5つの村(うちひとつはアルテリ)からの代表、すなわち土地団体代表を召集して会議

を開き、全村での多圃制への移行の方法、播種用種子の獲得方法、その際の特典の受け方、そして農民同盟をいかに組織するかについて同県土地局で口頭で説明を受けたと報告した。この日の会議で、多圃制導入を目的として郷に農民同盟を設立すること、それを実行するために、各村からの1名の代表者からなる技術委員会を設置することが決定され、12月28日にはそれが設置された。<sup>65)</sup>

この動きは孤立したものではなく、同様の動きはプガチョフ市の小さな集まりにも観察された。<sup>66)</sup> 農民党と同様、農民同盟もたんなる要求にとどまったと一般に考えられているが、このようにして県土地局が農民同盟への運動を承認することがあったことを確認しておこう。全村での多圃制への移行とは、共同体の改良(スホードでの決定にもとづく共同体メンバーの多数者による強制)の典型的な形態であった。さらに、この文書自体はもうひとつの問題を開示している。この動きの全体を通して、村ソヴェトはいかなる役割をも果たしていなかったのである。

しかし、このように経営志向の強い下からの集団的動きでなくとも、そのきわめて萌芽的な形態であれば、農民はたやすく思いついた。農民の活動性が村ソヴェトではなく、スホードに出現していることに着目して、そこに農村の下からの発展の起点を求める意見があらわれた。著者ゲラーシモフは、リャザン県ザライスク郡では各村ソヴェトに3,4つある部会がほとんど(95%)活動していないと指摘した。次いで彼は、農業機械の購買や多圃制への移行などの社会的必要について話し合いに集まり、スホードでその提案を通しての農民アクチヴィストの団を「部会」と呼ぶことはできないか、発展させるべきは「村ソヴェトの委員会ではなく」、各村落のこのようなグループを母体とした「村の委員会」ではないか、と提案した。なお、ゲラーシモフがこの提案をしたとき、残すべきそのような部会は、農民が容易に集まることのできる一村型の村ソヴェトにおいてだけで

あり、その以外の、郡で大多数を占める多村型村ソヴェトでは、すべての部会(支部会)を廃止するべきであると主張したことは、前述(47頁)との関連で重要である。<sup>67)</sup>

この小さな提案は大きな反響を引きおこした。それは、村ソヴェトの部会を、農民の「ダンスのお遊戯」(хороводы)と「井戸端会議」(беседы на завалинке)に転化させるものであると揶揄、非難された。現存する部会が不首尾であるからといって、「地域のアクチーフ」を基礎にして部会をつくりなおすこと、「疑似部会」(суррогат секций)をつくりだすことは、「多かれ少なかれわれわれに敵対的な」アクチーフに依拠することであり、「絶対的に受け入れられない」と断定が加えられた。<sup>68)</sup>\* この反論は、村ソヴェトのスホードによる「吸収」<sup>69)</sup>という危機感と特徴づけることができる。

\*なお、村ソヴェトに批判的でないものが「アクチーフ」として登録されていたケースが多くあったことは興味深い。<sup>70)</sup> アクチーフの定義について1928年には多くの議論があるが、立ち入らない。これらの議論の根底には、ソヴェト機関が非党員の農民アクチーフを掌握していないという現状があった。

同様の討議は、レニングラード州の管区組織部長会議(1927年12月以前と見られる)にも存在した。ここでは、プスコフ管区とヴェリーキエ・ルーキ管区の代表が、部会のメンバーをスホードから補充する方法について、「好ましからぬ分子」が入り込む危険があると警告し、補充は、地区執行委員会、村ソヴェト、地域のインテリゲンツィヤからおこなうべきだと要求した。しかし、この州会議は、これらの管区の意見を斥けた。州会議は、スホードや、コムソモール、労働組合などの社会組織から農民アクチーフを選抜し、農村の「開化的な勢力」を広汎に利用するよう指示を出した。<sup>71)</sup>

1927年の末まで、スホードを基礎とする農民の自発的な運動に対する評価がまだ両義的であったとすれば、調達危機にともなう政治社会

の大きな変化とともに、それは否定的な方向へ強く傾くことになる。1928年5月の全ロシア会議において、キシリョーフの副報告者プロコフィエフは、イヴァノヴォ・ヴォズネセンスク県キネシマ郡の会議が「大衆活動を部会からスホードに移す」という決議を採択したことに注意を促した。彼によれば、それは「ソヴェトの大衆活動に対する許し難い態度」の実例であった。<sup>72)</sup>

1928年初頭からの強権的なキャンペーン(穀物調達、自己課税など)による政治的緊張が、この問題に対する党の態度に大きく影響したことを物語る文書をわれわれはもっている。

1928年1月-2月、まさに穀物調達キャンペーン下のタンボフ農村の情勢を分析したボリソグレプスク郡委員会と県委員会——ここには労農監督人民委員部の代表も入っていた——は、ここにおいて重要な役割を果たした。県委員会の決議は、アクチーフは、「2つのアクチーフのグループ」、すなわちひとつは、ソヴェトと党細胞の周辺に組織されたアクチーフ、もうひとつは、「土地団体の周辺に自然発生的に組織されたアクチーフ」からなっているという認識を打ちだした。後者はさらに、「反ソ分子」と、体制側に引きつけうる分子に分かれた。<sup>73)</sup>

この「2つのアクチーフのグループ」というタンボフ県委員会の決定は、1928年のソ連政府の機関誌でもくりかえして引用されており、大きな関心を集めたものと見られる。<sup>74)</sup>

労農監督人民委員部の文書によれば、これまですべての人々が、農村にはソヴェトと党細胞の周辺に「ひとつのアクチーフしか存在しない」と考えてきたが、それは誤りであった。文書は、もうひとつ存在していた「土地団体のアクチーフが穀物調達の時期につくられたのか、それともそれ以前なのか」と問題を立てた。「1925年以降農村では深刻な経済的困難をもたなかった」が、農民の一部が土地団体の周辺に結集する(объединялась)過程は、「[穀物調達キャンペーンで]階級闘争が尖鋭化するまで、目立たない形で進行していた」。彼らは、土地

問題、訴訟、村の必要の解決、審議のなかで成長してきた。その先頭には、農民訴願者、諸種の土地団体代表、素人の（すなわち共同体農民の）土地測量員（доморошенные землемеры）がいる。<sup>75)</sup>

ここに示されているように、共同体的なアクチーフは穀物調達危機のなかで形成されたのではなく、以前に存在していたものが顕在化し、権力者によってそれとして認識されたのである。「2つのアクチーフのグループ」という認識視角は、それ以前から、1920年代中頃の農村への関心の強まりとともに、地方では提起されていた。たとえば、1926年のスターリングラード県の党機関誌には、次のような共同体農民の定式化を見出すことができる。「村ソヴェトと協同組合にはアクチーフがいる。それは向こうの(их)、つまりソヴェト権力のアクチーフであり、土地団体にいるアクチーフは、それはもう本物のわれわれの(наш)、農民のアクチーフである」。<sup>76)</sup>

詳細な資料は見いだせなかったが、イヴァノヴォ・ヴォズネセンスク県の農村でも同様のことが出現していた。土地団体の周辺にはそのアクチーフ、「土地団体代表、農民訴願者、素人の土地測量員など」がいた。総じて、「土地団体の事柄に従事し、権威をもっている著しいグループがいる。彼らはソヴェトには敵対的ではないが、しばしばソヴェトとともににはおらず、それから離れている」。<sup>77)</sup>

ロシア共和国人民委員部副議長リュスクーロフもまた、農村で「2つのグループのアクチーフ」という事態に直面した重要人物である。彼は、ロシア農村の専門家ではないが、1928年秋、冬の選挙キャンペーンのために北カフカーズの農村を広く（13管区、16村<sup>スタニーツァ</sup>）視察し、研究した。本稿でも利用した、『イズヴェスチヤ』紙に連載された彼の村ソヴェトに関する大論文は、その貴重な分析結果である。<sup>78)</sup> 彼は、北カフカーズは豊かな地方で、村ソヴェトは大きく、強力であると知っていたが、研究の結果は「嘆かわしい」ものであった。1929年3月、共

産主義アカデミー・ソヴェト建設研究所での村ソヴェトに関する討論においてリュスクーロフは次のように発言した。村ソヴェト員の給料は、他の地方より恵まれているにもかかわらず、「村ソヴェト員の文化的水準そのものは、農民アクチーフの水準からさえ著しく遅れている。集会では、農民大衆がきわめて活発であることをわれわれは見た。この大衆に対峙しているのが村ソヴェトとその議長であり、彼は、しばしばあまりに教養不足で(малоразвитой)、農民が提起する焦眉の問題を説明することができない」。<sup>79)</sup>

これらの主張はすべて、「2つのアクチーフのグループ」が相対しているという認識に立っている。しかしそこに共通しているのは、(リュスクーロフの主張に明らかなように)実際には、土地団体を結集の場としたグループが著しく強力で農民の信頼を勝ちとっており、村ソヴェトや党細胞の周辺に集まっているアクチーフはきわめて弱体だということである。農村の社会的、経済的に活発な部分は村ソヴェトではなく、土地団体の方に引きつけられていた。<sup>80)</sup>

ところで後者の、共同体的なアクチーフとは何か。タンポフ県の調査資料は、その実態を髣髴とさせる文章を残した。ポリシェヴィキが農村の深部に見いだした「アクチヴィスト」は、とくに「農民の擁護、相互扶助、地域の訴訟の事柄」において著しい役割を演じていた。

これらのアクチヴィストは、[刑法]第107条を適用された製粉業者を擁護しなかった。ところが、貧農と中農がライ麦を碾く場所がないということに対しては、その通りだといって擁護したのである。彼らは、クラークの搾油業者も擁護しなかった。ところが、ヒマワリから油をとれないために、貧農と中農に、マースレニツァ〔カトリックの謝肉祭にあたる〕にクレープ用の油がなくなった、ということには涙を流したのである。このアクチーフは、国家権力が貧農に滞納金や過去の負債の支払

いを強制すると、ふつう進んでこの貧農を擁護する。ところが、土地団体の決議にも貧農の利益に反するものがあるという事実をあげると、沈黙するか、論拠に反論するのである。彼らは、クラーク層による貧農の搾取\*には沈黙し、それは貧農に善行(благоденствие)を施しているのだとあって、権力からほんの少しでも貧農に圧力があると、倍の熱意をもって貧農を擁護し、しばしばこの貧農に援助してやるのである。<sup>81)</sup>

\*たとえば、富裕な農民が、種子も馬もない貧農に、春にそれを貸し付け、他方、後者の一部の土地を無償で借り、同時にそこでの労働を要求するという関係を想定すればわかりやすい。これをポリシェヴィキは「搾取」と理解した。<sup>82)</sup>

見られるように、ここには特別な「アクチーフ」はない。彼らは、貧農の富裕農への依存、習俗的な相互扶助、農村の最低限の再生産の保障という関係、一言にすれば、村の社会的、経済的一体性、連帯性をつくりだしてきた伝統的な関係の担い手である。調査は、このような「アクチーフ」を、キャンペーンをめぐる対抗の最も奥深いところに見出した。穀物調達キャンペーンにおいて、われわれは、「クラーク・富裕農が『貧農の擁護者』として登場している」<sup>83)</sup> という報道を非常に多くもっているが、上の調査はその実態を明らかにしているといえよう。

「彼らが、穀物調達キャンペーンの時期には、しばしば土地団体の全権を受けて、様々な陳情をもって農民訴願者として県や中央に出発するのである」。穀物調達キャンペーンのもので調査が到達した農村認識は、次の点に要約できた。「各土地団体はみずからのアクチヴィストのグループをもっており、彼らが、<sup>コレクチーフ</sup>集団として農民同盟の機能を著しく果たし、明らかにその萌芽となっている」。<sup>84)</sup> なお、ここでの「農民同盟」は、本稿に登場する他の農民同盟(原語は同じ)が農民の横の連帯を意味するのとは異なって、農民共同体自体の連帯的な機能に着目して用いられている。

われわれが何度も言及してきた5月の全ロシア中央執行委員会の会議において、タンボフ県の代表(イヴァノーフ)は、「土地団体とは、本質的にいえば、現存するソヴェト体制への様々な『陳情』と乱訴が発生してくる震源地である」と発言した。<sup>85)</sup> 農民共同体に対するこの印象的な特徴づけは、1928年初頭の穀物調達キャンペーン下の同県の調査結果から直接に導かれたものである。

以上検討した、現地に近い複数の調査では、共同体を基盤とするアクチーフについて、権力に敵対的な部分と、恭順ではないが敵対的でもない部分に区分する認識が残されていた。しかし、まもなく、共同体の代表機関を一括して敵対的なグループとして、したがって共同体そのものを敵対的な団体として認識する把握の方向が著しく強まった。1928年5月の全ロシア中央執行委員会全ロシア会議におけるヴラヂーミル県の代表の発言は、その点で注目し得る。彼はこう述べた。——記憶が私を裏切っていないければ、ソヴェト建設会議の或る席で、キセリョーフは「多くの土地団体は反動的である。そこでは、しばしばわれわれに敵対的な分子が指導している」と認めた。その通りである。第15回党大会は、土地団体から選挙権を剥奪者(クラーク)を排除することを決定した。村ソヴェトへの土地団体の従属という党の指令を国家の立法とすることを急がなければならない、と。<sup>86)</sup>\*

\*これが、1928年12月の「土地利用と土地整理の一般規定」(全連邦土地法)である。<sup>87)</sup>

相互扶助的な、自己防衛的な要因を備えた共同体を「反動的」とし、最終的には、みずからに敵対的な団体として把握することになった権力者の認識は、ポリシェヴィキの「貧農崇拜」(後述75-76頁)ゆえに発生した農民大衆からの孤立感に由来する「農民恐怖症」、「中農恐怖症」<sup>88)</sup>に通じるものがある。

1928年から集団化までのわずかなあいだ、農民共同体に対する党の政策は、1927年12月の第15回党大会におけるモロトフの報告の主

旨、すなわち共同体を村ソヴェトへ従属させる必要があるとの認識にしたがって理解されていた。したがって1928年の段階ではまだ農民共同体の廃絶という問題は公式には提起されていなかった。しかし、調達危機下のタンポフ農村の調査は、従属という課題につづいて、ただちにその死滅の展望を描く課題を提起していた。

労農監督人民委員部の報告の要求項目には、選挙権被剥奪者(クラーク)の土地団体加入の権利を奪うことや所得源泉を削減するなどの措置の他に、「恒常的に活動する選出制機関をつくる権利を土地団体から奪うこと」が含まれていた。<sup>89)</sup> これは、前述(本稿(1), 9頁)の通り、土地法典第50条の注を削除する要求であり、土地団体代表を農民共同体から奪うこと、共同体から団体としての力を奪うことにほかならない。土地法典のこの小さな注はかくも重大な意義をもっていたのである。

さらに、部会に関する新しい提案も含まれていた。部会を、村ソヴェトの管轄下にある土地団体の数に分割して小部会とし、そこへ、もっとも活動的な部分、しかも「土地団体のなかの、権力に忠実な部分のアクチーフを取り込み(вобрать)」、彼らがこれまでの共同体の機能を代わりに果たすという提案である。それは、土地団体の資金を村ソヴェトに移すことをも促すであろうと期待していた。<sup>90)</sup> 部会が発展すれば農民共同体が死滅するという論理である。

処方箋に効果は期待できないとはいえ、ここでは1928年初頭というきわめて早い時期に共同体の死滅が論じられていた。しかも、その際に、農村のもっとも深い部分での農民の濃密な関係が都市への抵抗の最後の拠り所となっているという認識に報告が到達していることが注目される。しかし「クラーク清算」はまだ未来のことであり、権力に「忠実でない」部分をどう処理するのかについて、文書は何も語っていなかった。

## 七 党と村ソヴェト：村ソヴェト選挙

### 1. 農村コムニスト

われわれは、本稿で、村ソヴェトの基本形から叙述をはじめるとする方法を採用した。本節でも顧みることになるが、それが、1920年代における農民共同体と村ソヴェトとの関係の底辺となったからである。この基本形が、第1に、村ソヴェトの統合によって新しい展開を遂げ、第2には、共産党という、共同体史に対して外的な、しかし村社会の支配を要求する要因の強い作用を受けた。第1の問題は第五章で詳しく論じた。しかしこれまでの議論では、後者の、共産党と村ソヴェトとの関係は、必要と見なされた場合は別として、意図的に度外視してきた。この関係を考慮に入れることによって、1920年代の村ソヴェトの歴史像は、さらに現実的となり複雑となり、動的となるのである。

1920年代中頃の全国平均で、農村の数十の居住地に1つの党細胞があり、後者は10人以上のコムニスト(党員および候補)から構成されていた。やや詳しくいえば、1925年1月に、ひとつの農村党細胞は、平均して7名の党員と4名の候補(計11名)からなった<sup>91)</sup>。しかし、1細胞が対応する居住地の数は、地域によって巨大な差があり、1924年6月の資料では、120を超えるトヴェーリ、プスコフの両県から、90以上のスモレンスク県、40~60のモスクワ、レニングラード、リャザン県、20~40のトゥーラ県、中央黒土諸県、サマール県となっており、サラートフ県やウリヤノフスク県は10前後と著しく少ない。<sup>92)</sup> この相違が、村落自体の規模の大きさに相当程度依存していることは容易に想像される。

郷の中心の村には、まず間違いなく党細胞が存在した。それに対して、郷村に位置しない農村細胞の場合、1924年秋の調査では、細胞のコムニスト全員が同じ一つの村に暮らしているというケースはまれで、ふつう3つ、4つの村に(十キロ以上も)遠く離れて暮らし、相互に

連絡しあうこともなく、まれに召集される集会で出会う5,6人の党員が細胞であるというのがふつうであった。<sup>93)</sup>したがって郷村以外の細胞の、組織としての意義は著しく小さかったといえよう。

ロシア農村全体について党細胞と村ソヴェトとの数的関係をあげるならば、1924年には党細胞は1万5000、村ソヴェトは7万6000を数え、1925年再選挙当時には、それぞれ1万4000、4万5000であった。<sup>94)</sup> コムニストが村に集中せず、各村に分散した形態の細胞を除けば、農村の党細胞はもっと少なくなるであろう。

共産党権力が直接に影響を及ぼしえた地域においては、村ソヴェトと共同体との関係は、選挙によって強い変形を蒙った。農民による伝統的な議長選出の方法は、負担の平等という共同体的な慣行を基礎としていたため、それは本質的には「選挙」とはいいがたかった(本稿(1), 14頁)。一方、党にとっては、みずからの候補者を立てることによって、農民の慣行、伝統に対抗しうる要因を導入することが必要であった。選挙に最初に固執したのは、農民ではなくポリシェヴィキであった。それは選挙が、農民社会に切り込む彼らの手段のひとつだったからである。

選挙は郷執行委員会(およびその上位の郡執行委員会)の指導のものでおこなわれたが、郷執行委員会はコムニストが支配的であり、実際のイニシアチヴを握っていたのは党、具体的には党細胞であった。このため党組織の分散的な特質は、いくつかの問題を引きおこした。

第1に、主要なコムニストがマジョリティーをとることが選挙の目的であり、コムニストが権力と結びついている限り、まもなく考察するように、農村は農民的な価値を守るためにコムニストには明確な距離をおいたが、かつてからその経歴を見知っているコムニストの候補に対しては決して一様には反対しなかった。しかし、多数の村ソヴェト選挙において、その村に居住しない、農民が見たこともない「他所

者」が候補として登場することには、最大の敵意をもって迎えた。

しかし第2に、選挙に際して党の勢力が及ばなかった農村も数多くあった。選挙が党は他所者を選挙における農民に対する圧力が最高に達したのは1924年選挙であったが、その結果は、村ソヴェト員の12%をコムニストとコムソモール員が占めたことであった(後出第2表)。村ソヴェト議長では26.2%に達した。<sup>95)</sup>さらに、これ以外に多くの党のシンパや、党に事実上従属している人々が存在していることも無視してはならない。しかしそれでも、非党員農民議長が4分の3もの大きさを占める村ソヴェトのなかには、党の意思が直接に反映されない多数の(数字でそれを示すことはできないとはいえ)村ソヴェトが存在していたことを示している。

1924年秋、ニジニ・ノヴゴロド県の農村を公式訪問していたオシプ・チェルノーフ(詳細は後述71頁を参照)は、ときに通りすがりの人間として農民と会話をした。或る村で立ち寄った農家で、村にコムニストがいるか、と尋ねると、党員がいないので無事に暮らしている、他の村のみんなから羨ましがられる、という答えが返ってきた。理由を聞こうとすると、農夫は口をつぐみ、妻に目配せをした。チェルノーフの見解では、「このような幸せ者は、鄙びた郡や村ではまだ非常に多い」、「地方ではこのような状況はごくふつうである」。<sup>96)</sup>

この指摘は、1924年選挙前夜のコムニストに対する共同体農民の一般的な像を提示しているが、それ自体は、その影響の届いていない農村についての珍しい報告である。同じことを、村ソヴェトの上部組織が把握していたやはり珍しい指摘を紹介しよう。ウリヤノフスク県アルダートフ郡執行委員会は、内務人民委員部宛に、1925年再選挙キャンペーンの情勢を次のように報告した。「細胞のあるところで、農民はなぜかどくに激怒しており、クラーク的部分がもっとも影響力をもっている。細胞がないところでは、農民はずっと静かである。これは理

解できる。細胞は、これまで大衆の目では、行政機関以外の何ものでもなかったからである」。<sup>97)</sup>

本稿が村ソヴェトの基本形の叙述からはじまったのは、それが、党支配を受けていない状況の村ソヴェトをまず考察しようとしたからである。この基本形は1920年代の底流でもあった。村ソヴェト議長に占めるコミニストの割合は、1920年代中頃、後半に2割前後であり、1929年には急激に増加したが、それでも非黨員農民が7割を占めた。<sup>98)</sup> この問題は「むすび」の章でも立ち返ることになる。

## 2. 任命制

戦時共産主義の時期には、村の指導を手中に集中した活動家の狭いカードルが形成された。前線のためにすべての力を動員することが最優先された時期に生まれたのが、党細胞やソヴェトの上部機関が必要と認めた人物を選挙で地方ソヴェトに通す任命制(назначенство)である。

この方法は、1920年代の平和建設の時期にもつづけられていた。それはたんなる惰性ではなく、その方法を持続させる条件が存在していた。当時、たしかに穀物供出の方法は割当徴発から現物税へかわったとはいえ、1921-22年は飢饉の年であり、その深い傷跡は1923年にも残っていた。経済の全般的な崩壊のもとで、農民にとって税負担は依然として重く、以前と同様の、強制徴発的な方法がつづいていた。食糧税は重くのしかかって徴発より過酷な地方も多く、それ以外にも数多くの現物の賦課(薪、荷馬車運輸、燃料など)、さらに諸種の貨幣新税も加わった。1923年7月まで、かつての穀物徴発の担当機関である食糧人民委員部が存在し、同様の方法で食糧税を徴収していたことはその象徴である。不供出者に対する家宅搜索、押収、逮捕という恣意的な行為に公然と従事したのがコミニストであった。<sup>99)</sup> 1924年には、ヴォルガ地方、中央黒土地帯をはじめ、多くの地方を大旱魃が襲い、ふたたび飢餓の様相が出現した。

権力と農民の接点に当たる村ソヴェトの選挙はこのような情勢を反映していた。農村ソヴェト選挙は、下からの代議員の選出ではなく上からの支配の手段としての役割を担っていた。1920年代初頭には、地方の党会議や郷の党細胞は、村ソヴェト選挙において「誰よりもまずコミニストを通すこと」、選挙を「共産党の代表者の指導の下に」おくこと、「堅固なプロレタリア的指導に従属させること」を課題として設定した。<sup>100)</sup> 1923年4月の第12回党大会決議は、党からのソヴェト機関の「独立」を強める企てを強く非難した。同決議は、同時に、党機関との党組織とソヴェト組織の「正しい分業」が必要であると認めた<sup>101)</sup> が、後者の概念が飾り以上の意味をもたなかったことはまもなく明らかとなる。

選挙キャンペーンがはじまると、郡や郷(地区)のレベルに選挙委員会が設置され、党委員会、執行委員会から選挙の全権が村に派遣された。彼は、村ソヴェト員を集めて、村選挙委員会をつくることになっていた。1922年と1924年の選挙訓令で、郷選挙委員会から任命された議長と、村ソヴェト員2名から村選挙委員会をつくると規定されているのがこれである。村選挙委員会が選挙権被剥奪者のリストをつくり、次いで、候補者のリストを作成、公表する。選挙集会を召集して、リストを提案し、それが挙手、多数決で採択されるという手続きとなる。<sup>102)</sup>

しかし村選挙委員会が設置されないことが稀ではなく、郷選挙委員会にすべての仕事を課する県・郡の委員会が多くあった。<sup>103)</sup> 1924年選挙に関する全国46郷の調査資料は、「キャンペーンに対して地元は形式的に関わり、必要な関心を向けなかった」と結論を下し、選挙委員会には、選挙の意義を理解しない「偶然的な人々」がしばしば割り当てられたと指摘した。調査資料は、村選挙委員会ばかりか、郷選挙委員会さえつくられなかった多くの地方があったと認めた。この場合には、全権が任命されただけであった。<sup>104)</sup>

それだけではなく、郷選挙委員会は、好ましくない構成をもつ村ソヴェトが選出された場合には、その選挙を無効にすることがあった。あるいは、選出されたリストのなかから都合の悪い人物を除外して、そこへ自分の候補者を差しこんだ。<sup>105)</sup>

1920年代の任命制とは、具体的には、選挙に通す候補者が記載されたリストを、事前に、選挙人(農民)の意思とは無関係に選挙委員会や全権が作成し、それをあらゆる方法を使って、一括して、しかも選挙人による追加も許さずに通すということであった。

### 3. 秘密投票と公開投票

当時、秘密投票が欠如していたことを最初に論じておかなければならない。ここには革命の影響があった。ポリシェヴィキは、革命前には、みずからの候補を通すための選挙の4原則(普通、平等、直接、秘密)の一つとして秘密投票を要求したが、プロレタリア独裁のもとでは、反革命の企てを公衆の目前で暴くために公開投票を支持した。大衆が真理を体現していることが前提されているからである。一方、農村での集会(スホード)では、伝統的に出席者の挙手によって、「目測で」<sup>ナグラーズ</sup>採決がおこなわれてきた。こうして1920年代の農村では、公開投票という点で農民民主主義とプロレタリア独裁は奇妙な共存関係に入っていた。

チュグノーフは、この問題について、力関係が確定的でない場合には、公開投票が為政者に利益をあたえるという保証はなく、状況に応じて、秘密、公開のどちらをも採用する必要があると主張し、みずから為政者側のひとりであることを明らかにした。しかし彼は、原則的には、秘密投票が、採決の自由を保障する制度であると含みをもたせた。<sup>106)</sup>

農民の側で秘密投票の要求があらわれたのは事実である。それは凝視的な監視の対象とされたために、その例は逐一あげられている。<sup>107)</sup> 1927年のモスクワ県については、実施の直前に阻止された複数件の記録がある。<sup>108)</sup>

内務人民委員部による1925年再選挙の村ソヴェト別の調査は、採決はどこでも従来通り秘密投票ではなく公開であったことを示している。ブリャンスク県セフスク郡執行委員会は、内務人民委員部向けの回答のなかで、選挙人自身が立てた村ソヴェトの候補者が公開投票で選出されたことは「完璧な民主主義(полная демократия)が遵守された」ことを意味する、と括弧をつけずに記した。<sup>109)</sup> それは、公開投票による選挙が当時のロシアにおいてもっとも馴染み深いものであったことを示唆している。逆に、郷執行委員会議長の選出において実際に秘密投票がおこなわれた(タンポフ県モルドヴォ郷)のは、皮肉にも、投票結果に不正を加えるためであった。<sup>110)</sup>

しかし意外なことには、中央紙がその要求をとりあげて何度かそれを審議して見せたことがあった。党中央委員会の機関紙『貧農』が1924年7月、9月に3度にわたって、農民の意見を掲載し、ともに編集部長い反論の注記をくわえた。さらに選挙がはじまった10月には、このなかの具体的な事例をとりあげて、無署名論文がふたたび非難するという異例の取り扱いとなった。2人の農民は、大多数の村人が反対している軽蔑すべき人物を、「全権とやら」が「彼は必要だ!」と無条件に押しつけた、と訴えた。公開投票では、それに反対する勇気をもつことができない、というのが彼らの主張であった。

編集部の立場は、公開投票を恐れるもの、秘密投票を望むものは、勤労者の敵を選挙で通そうとするものだけであるという公式のそれであった。編集部は、この件について現地の執行委員会から回答をえたとしている。それによれば、候補者は、「完全にふさわしい」、党細胞推薦の郷執行委員会メンバーの党員であり、逆に、訴えている農民が「あらゆる集会で党に反対する発言をしている」、また候補者に対しても個人的な恨みをもっていた。編集部は、不当なことがらに対する訴えはつねに開かれており、訴えに対する回答がなければ、訴えをつづ

けるよう勧告した。<sup>111)</sup>

農民のなかに渦巻く任命制への不満が秘密投票の広汎な要求にまで具体化されることは時間の問題であった。モスクワのこの動きは、1924年選挙を前にして、この不満に捌け口をあたえ、あらかじめ封じることが狙ったと理解できるであろう。

#### 4. 定足数

農民の要求と無関係に提示される候補者リストの「無理強い」(навязывание)が、農民の多数の訴願の主な内容であった。この語を彼らはしばしば使った。イヴァノヴォ・ヴォズネセンスク県の農民はそれが選挙を棄権する理由だと語った。「投票しようがしまいが、選ぼうが選ぶまいが、どちらにしてもわれわれの思い通りにはならない。だからわれわれは選挙に行くことはやめた」。<sup>112)</sup> 1922年の村ソヴェト選挙の状況に関するヤロスラヴリ県トゥルゲーネフ郷からの報道は、農民のアパシーのために、「大半の地域で選挙人はあらわれなかった。その結果、選挙は成立しなかった」と伝えた。<sup>113)</sup>

さらに、任命制の論理を突きつめると、農民の抵抗を最小にするために、選挙日時の告知をできるだけ遅らせることが必要となる\*。このこともまた農民の出席を妨害する原因となった。具体的にそれを示すことにしよう。

\* この論理を徹底させると、あらかじめ候補者が誰であるかを農民に知らせないことさえ必要となる。ウクライナの例であるが、それを見ることが出来る。オデッサ管区の1村の選挙集会でコムニストは、リストが採択されたあとで、リストの内容を集会に対して読み上げると主張した。農民はそれに対して、「まずリストを読み上げる、そのあとで誰に投票するかをわれわれが決めよう」と拒否した。<sup>114)</sup>

最初のロシア共和国の選挙訓令である1922年8月のそれ<sup>115)</sup>は、その通知を集会開始のわずか24時間前と定めた。1924年8月の訓令<sup>116)</sup>は、どのような計算から出たのか不明であるが、13時間前と、いっそう短かくした。

この短縮はその実態を暗示していた。1922年の農民向け党機関紙は次のように報じた。「農村のソヴェト選挙は、しばしば、いかなる準備もなしに、選挙の段取り、選挙人の権利を人々に全く知らせることもなく、しかるべき告知もなしにおこなわれているのである!」。<sup>117)</sup> 1924年選挙については、非常に多くの実例がある。その一部を紹介しよう。ヴラジーミル県からは、農民自身が、彼の郷(パプーリンスカヤ郷)全体で、選挙前の活動が「全くおこなわれなかった」と指摘した。郷選挙委員会は選挙の直前に組織されてただちに選挙に向かい、村選挙委員会は、集会で選挙が実施される何分か前に組織された。<sup>118)</sup> ハタエーヴィチは、1924年選挙について、こう指摘した。「多くの村で、適時の通知はなかった。選挙委員会が村に到着してはじめて、班長デシャーツキーが窓を叩きながら村を巡回し、そのあと、集まった人が何人であれ、選挙がはじめられた」。<sup>119)</sup>

もっと悪質な場合には、予定より早く集会がはじめられた。全権は、昼間の2時に選挙集会を予定したにもかかわらず12時に開始した。選挙人は5分の1しか集まっていなかった。「クズネツォフは何か大急ぎだった。この大急ぎは集会全体の過程で見え見えだった(сквозила)」。<sup>120)</sup> 当時、「選挙キャンペーンがなかった」、あるいは「選挙ではなく芝居だった」等々<sup>121)</sup>の多くの指摘があらわれたが、それらは、選挙が空虚であったことを伝えた本質的に同じものである。

1924年が村ソヴェト統合の絶頂の時期であったことを想起するならば、選挙通知の遅れが決して偶然の誤りではなかったことが理解できる。ザイツェフが伝えたノヴゴロド県の実例は次の通りである。同県デミヤノヴォ郡執行委員会がヴェリーリスカヤ郷に派遣した全権は、村ソヴェト選挙の2,3時間前に、郷執行委員会の建物に集まるよう全44村の農村に向けて指令を発表した。この44村はひとつの統合された村ソヴェトを構成していたのであり、広域化した村ソヴェトにおいて、かくも短時間に農

民を選挙集会に召集することは不可能であった(通知すら伝わらなかったであろう)。実際、集会にはわずかな選挙人しか集まらず、郡の訓令が規定した半数という定足数は全く考慮に入れられていなかった。<sup>122)</sup>

選挙制度の根幹をなす選挙人の選挙参加率はソヴェトへの選挙人の政治的積極性を測る指標であり、それはかわることのない当局の関心事であった(補論を参照)。ところが、前述した農民のアパシーに対する当局の表向きの不安にもかかわらず、実際には、それに対する抜け穴が用意されてあった。

1922年の選挙訓令にも、また1924年の選挙訓令でさえ、選挙集会の定足数に関する規定はなかった。定足数に関する全国的な規定が欠如しているなかで、たとえば、1922年のロシア共和国の訓令にもとづいてプスコフ郡執行委員会が採択した訓令は、「必要な人数が集まれば、選挙集会は成立したと見なされる」と、もっとも曖昧であり、誰の裁量でそう見なされるのかについても規定がなかった。それに対して、サラトフ県執行委員会が採択した訓令は、「定足数は全選挙人の半数である。定足数に達しない場合は、…2時間後(あるいは1時間、3時間、24時間後)に2度目の集会が指定され、それは、任意の参加者数で成立したと見なされる」と。<sup>123)</sup>

全く同様にして、1924年選挙キャンペーンのとき、北カフカーズ地方モローゾフ管区のヴォズネセンスキー村ソヴェトでは、選挙に5~10%というわずかな選挙人しか集まらなかった。しかし20-30分休憩とするという決定が採択され、そのあとでも数が集まらないと、選挙は成立したと宣告された。この地方では、30分休憩すれば、出席者の数はそのままでも集会は成立したと見なされていた。<sup>124)</sup> この記録は、同地方の管区、あるいは郷のレベルで、2回目の集会成立に関して定足数は問わないという通達や訓令が存在していたことを物語っている。

簡単にいえば、わずかな参加者の集会でも、

はじまって短時間待てば、どんな集会でも、完全な権利をもつ集会と認められた。しかし、短時間待つというのは明らかに形式的な手続きにすぎなかった。少数の参加しかえられなかった集会を最初から2度目であるとして開く方法もあった<sup>125)</sup>が、それも同様である。こうして現実には定足数は実質的な意味をもっていなかった。選挙集会の定足数を問わない、あるいは2度目の集会については問わないという制度は、選挙制度そのものを無視する風潮を助長する重要な要因を構成していた\*。

\* 農民の出席が十分でないという条件の下での、「2度目の集会の定足数」というテーマは、これ以降、ソ連政府の頭の痛い問題となった。1926-1927年における市民総会(スホード)規則の論議、1927-1928年における自己課税キャンペーンの遂行期の論議がそれである。<sup>126)</sup>

選挙は直前に通知されたばかりでなく、選挙そのものが著しく短期間に終わった。1925年秋、バシキリヤ共和国ダヴレカノヴォ郷の農民は、「昨年〔1924年〕も、その前年も、選挙はなんだか即座に(как-то сразу)おこなわれた」と回想し、今年もこれまで同様、次のようになるだろう、と予想した。「郷から人ひとり〔全権〕がやってきてスホードを集め、選挙では候補者は指名されるだろう。彼らを審議する時間もない。採決がおこなわれる。『誰が反対か?—手を上げろ!』。『反対はない』…『採択された』と。<sup>127)</sup> キセリョーフは、1924年までは、あらかじめキャンペーンもなく、選挙は「大急ぎで」(«наспех») おこなわれたと認めた。<sup>128)</sup>

## 5. 任命制への農民の抗議

不意打ちのようにはじめられ、短時間で切り上げられる選挙は、その閉鎖的、陰謀的な性格を物語っている。そのことは様々な側面について様々な表現で語られた。総じて、1925年6月に、スターリンがそれまでのソヴェト選挙に対してあたえた辛辣な特徴づけほどの的を射たものはない。彼は、それを、「本当の選挙ではな

第2表 村ソヴェト員中のコムニストとコムソモール員の割合\*

1922年	1923年	1924年	1925年	1924-25年平均
6.1%	7.8%	11.3%	5.9%	8.9%
1925/26年	1927年	1929年		
9.9%	12.9%	15.1%		

\*Избирательная кампания в Советы РСФСР в 1924-1925 гг. Предварительные итоги. Вып. 2. М., 1925. С. 26; Итоги выборов в советы РСФСР в 1927 году. Вып. 1. М., 1927. С. 15; Итоги выборов в советы РСФСР в 1929 году. Вып. 1. М., 1930. С. 27.

く、権力を失うことを怖れる支配者の狭いグループが、一連の奸計と庄力によって『代議員』をこり押しして通す空虚な事務手続きであったと評した。<sup>129)</sup> モロトフは、のちに、「農村のソヴェトで座り心地のいい椅子でズボンを通す長い間すり減らしてきたコムニスト」が、これまで議長として農民に押しつけられてきた、と酷評した。<sup>130)</sup>

前述のように、党細胞や上部機関が作成したリストを選挙人に押しつけたことは、後者のなかに失望とアパシーを引きおこした。モロトフは、後年、「ソヴェトにおけるコムニストの割合が増加するにつれて、貧中農という農民大衆自身が増えつつソヴェトには積極的に参加しなくなっていく」と振り返った。<sup>131)</sup> 1924年に向けて、村ソヴェト員に占めるコムニスト、コムソモール員の割合は第2表のように増加した。

任命制において、リストにふくまれていた「他所者」(чужаки; пришлые)の存在は非常に重要な意味をもっていた。都市や他の郷から来た(「一度も見たことがないのに、選挙にやってきた」)「他所者」が選挙の候補になり、議長に選出されることに対して、農民はとくに強い不満を表明した。しかし選挙に関する一般の資料や統計にはその分類がなく、その正確な量的観念はえられない。唯一、ドン管区2地区6村ソヴェト\*について、1924年の選挙による村ソヴェト員のうち、「他所者分子のかなり高いパーセント(18.3%)」という数字がある。<sup>132)</sup> 調査結果から算出すると、6村ソヴェトで計

82名の村ソヴェト員中24名がコムニスト、15名が「他所者」であった。議長は6名であるから、おそらく議長(および、もしあれば副議長)の非常に多くの部分が「他所者」であったと推定される。

\*なお、この調査となった6つの村ソヴェトのうち、3つがコサックの村で、1つは混合的、2つは他のロシア農民の村であった。コサックについて後述77-78頁を参照。ここでの「他所者」はпришлыеであり、のち77頁にあらわれる「他所者」(иногородные非コサック農民)という身分制的な概念とは全く異なる。

したがって、地域によっては、コムニストと「他所者」がほとんど同じ意味をもつことがあった。農民の抵抗でリストが破棄された場合に、「コムニストが村ソヴェトに選ばれなかったのは、大抵、彼が『他所者』で、派遣されてきたものだったからである」という声が上がったのがそれである。<sup>133)</sup>

しかし実は、1920年代には(あるいは集団化の時期もそうであるが)、コムニストにとっても、都市から農村に派遣されることは大きな災難であった。それは、罰せられて「流刑地」に送られることであるとさえいわれた。「懲罰兵」(штрафные)という言葉が彼らに使われた。<sup>134)</sup> 他方、農民は、別の地方から送られてくるコムニストを、そこで何か都合の悪いことを犯した人間ではないかと訝った。農村に派遣される都市のコムソモール員は、実際に何らかの罪を犯した若者であった。1925年2月、スターリンに宛てた手紙のなかで、或る農民は書いた。農村に送られてくるのは、「流刑囚」か、都市に不要な人物であり、「農村は彼らを『こづいていじめている』のである」、と。<sup>135)</sup> 「罰として」派遣されたものは、あらゆる手段で逃げ帰ろうとした。<sup>136)</sup> それは、1920年代前半の村ソヴェト員の質の悪さ、腐敗の重要な一因(後述64頁)をなしていたであろう。

リストに掲載されたのは、コムニスト、コムソモール員だけではなかった。農民が強い拒否

反応を示した「飾り」としての農婦がそれであり、さらに、権力に従属した農民がそれであった。最後のカテゴリーがいかなる人々であるか、のちにモロトフは明らかにした。それによれば、非党員農民の高い比重は、「非党員農民が選挙に参加しているという空虚な見せかけ(пустая видимость)」によって説明される。「農民のなかで十分な権威をもっていない、いつもの同じ人物、同じ非党員の常連を選挙ごとにごり押しで通すことが、コムニストのなかではしばしば習慣になっていた」のであり、彼らは、「婚礼のお呼ばれ将軍の役割(свадебные генералы 箔付のための飾り物)」を果たしたにすぎなかった。<sup>137)</sup> 特定の人物を議長につけ、周辺に多くの「常連の」非党員農民を配列したリストがこれまで作成され、農民に押しつけられてきたのである。

1920年代初頭の経済社会の崩壊と混乱の事実から、1920年代前半における政治に対する農民のアパシーと共産党政権への強い服従を想定することはたやすい。たとえば、当時、独自の情報網をロシア国内にもっていた在外メンシェヴィキによる現状分析は、農民が押し黙り、賛成も反対もしない集会をミサに喩え、エス・エル系のそれは、1923年の選挙を対象に、農民は、都市からくるコムニストが提案するリストにほんの小さな抵抗さえ示さなかったと指摘した。<sup>138)</sup>

しかし1924年選挙から農民の強い不満、抵抗が顕在化することを考慮するならば、それに先立つ情勢をより注意深く検討しなければならないであろう。当局は、選挙への農民の不参加がたんなるアパシーではなく、彼らの消極的抵抗であったことを早くから気づいていた。村ソヴェト選挙に農婦はもとより多数の農夫さえ参加しなかったことを危惧した『貧農』紙の記者は、次のように指摘した。これは早くも1922年選挙のことである。「われわれのソヴェトはひどい。だからソヴェトの選挙はしない、と考えるものもいる。或る農民がわれわれに書いてよこした。『ソヴェト権力に、よい人間はやら

ない』と」。<sup>139)</sup>

農民の抵抗は消極的、部分的なものから、ときには大規模なものに展開した。まず、外から押しつけられた村ソヴェト議長の横暴や腐敗に対して共同体が抗議し、「自分の」候補者を要求した。その事例は、1922年、1923年の選挙や村ソヴェトについてのいくつかの指摘がある。<sup>140)</sup> ところが以下の事実は、問題が個々の事例に決してとどまらなかったことを示している。

第1に、村ソヴェト員に占めるコムニストの割合はさきに第2表(62頁)として掲げておいたが、逆に、農村コムニストのどれだけの部分が村ソヴェト員、あるいは郷執行委員会メンバーであったかを調べると、1923年の選挙後にロシア共和国平均で29%という数字を見いだすことができる。<sup>141)</sup> 当時のコムニストが農民人口のなかで極端に低い割合しか占めなかった(1924年現在で、ごく大雑把に農村成人人口400人ないし600人に1人<sup>142)</sup>)こと、そして、ソヴェト選挙(1922年の村ソヴェト規則では代議員は200人に1人)への参加がコムニストの課題として設定されていたことを念頭におくならば、29%という数字は、むしろ著しく少ないといわなければならないであろう。当時の農村コムニストはいくつかの職を兼任していることがまれではなかったことも考慮に入れる必要がある。

1923年の選挙キャンペーン(9月~12月)を総括した党中央委員会組織局の文書は、「選挙キャンペーン時に、若干の地方において、職権濫用と職務の過失により、あるいは徴発や課税圧力への参加によって評判を落としたみずからの地元のコムニストを、農民は、全員一致で落選させた」と、まさに指摘した。<sup>143)</sup> これは、リストが農民によって拒否されたことを意味している。リストの全面的拒否がおこる「1925年」への序曲が早くもはじまっていたのである。

第2に、その実例と見なしうる郡レベルの史実が残されている。1923年冬のヴォロネジ県パヴロフ郡の村ソヴェト選挙に関するオ・

ゲ・ペ・ウの全権の報告(12月1日付)がそれである。<sup>144)</sup>

それは、1年後に全国的に顕在化する農民のすべての行動様式を伝えている。それによれば、ソヴェトを「コムニストのないソヴェト」——このスローガンは、もともと戦時共産主義期の農民反乱においてあらわれた——にしよとする要求が郡全体であらわれた。郡の全域において、選挙は騒然とした状況のなかでおこなわれた。選挙委員会が作成した候補者リストが市民総会に提案されると、「大衆は大きな騒ぎと憤激をもって全体としてのリストの投票を拒否した」。リスト全体としての賛否の投票が強制されると、農民は、「人々には好きなように選ぶ権利があたえられている」と主張し、何のために集会に呼んだのか、勝手にリストを承認して、ソヴェト員を選べばよい、と叫んだ。

このため、リストによってではなく、各個人別に採決がおこなわれ、候補者が落選するケースがいたるところであらわれた。党郡委員会が候補者として、他の村から送り込んできたもの(他所者)にはとくに農民は敵意をもって迎えた(「自分たちのなかから見つけられるというのに、なぜ他の村から送ってよこすのか)。しかしはじめて候補になったコムニストや、人柄の知られているコムニストは選挙を通った。個人別の投票が早くも1923年におこなわれたことは注目すべき事実である。

1923年秋の選挙キャンペーンは、農民に対して、「いかにコムニストが、身を暖められる自分のポストに執着しているか<sup>145)</sup>」、「自分たち自身を選出させる権利を確保しようとしているか」を示した。オ・ゲ・ペ・ウの選挙全権による報告の目的は、権力に対して強い警告を発することであった。「1924年向けの選挙はコムニストなしでなければならない、と農民は郡全体で文字通り取り決めた」、と。

選挙キャンペーンは1923年秋のことであったから、この動きの原因を、レーニンの死(1924年1月)にも、7月の「農村に面を向けよ」のスローガンや夏の大干魃にも、さらに

1924年10月総会にも求めることができないことは明らかである。ヴォローネジ県パヴロフ郡は、1920年の農民暴動の震源地のひとつであり(後述68頁)、この歴史的背景を無視することはできないであろう。

さらに、当時、農村には各地に腐敗した権力があつた。1920年代前半の経済的状况について若干補足しておく必要がある。当時、村ソヴェト議長は、貧困にあえぐ農民から税を徴収し、家畜、木材、土地などの取引を監視し、密造酒を取り締まる任務を課せられていた。しかし、1923~24年に関するオ・ゲ・ペ・ウの多数の報告は、村ソヴェト員や、ときには郷執行委員会メンバーもカネをえるために密造酒製造に関わり、同じく報酬の少ない警察もまたこれに関与していると伝えた。<sup>146)</sup> 破局的な国民経済を支える重圧のもつて、一方では、農民に対する横暴が発生し、他方では、収賄や職権濫用がおこった。とくに、1920年代前半の農村が、当時のもっとも印象的な事実、密造酒の最盛期であつたことを忘れてはならない。

村の外から任命された村ソヴェト議長の多くが、このような状況の中心にいたことは十分にありうることである。前述のドン管区の村ソヴェト調査は、1920年から1924年のあいだの村ソヴェト議長について、くりかえして職権濫用を非難されたにもかかわらず3回連続議長をつづけ、党から除名処分を受けた人物、やはり、連続議長を勤め汚職で裁判にかけられた人物、党員で、職権濫用で裁判にかけられながら、先天性白痴と認められた人物、郷執行委員会の金庫強盗で有罪を宣告された人物等を記録している。<sup>147)</sup> ペンザ農村の研究者ロスニツキーも、収賄や農民に対する職権濫用の多くの実例をあげた。<sup>148)</sup>

他所者に対する農民の不信感は、彼らが罪を犯して或るポストを解任されても、またまもなく別のところで行政的、経済的なポストに就いていることでいっそう深まった。<sup>149)</sup> 農民の意識のなかでは任命制は賄賂と緊密に結びついていた。賄賂を受けとり、他人の密造酒を飲むも

第3表 村ソヴェト選挙の参加率\*

1922年	1923年	1924年	1925年	1924-25年平均
22.3%	37.2%	26.6%	44.7%	40.1%

\*Киселев А. С. Что показали переборы советов. М.-Л., 1926. С. 21. 選挙集会への参加率については、本章補論を参照。

のを、農民は絶対に選ばないからである。<sup>150)</sup>

スターリンは1925年には事態を率直に語った。ソヴェトは「大衆に縁のない機関」になっていた。ことがらの本質は、「多くの郷や村で、農民よりも、いっそう郡や県と結びついた小さな人のグループが統治していた」<sup>151)</sup> ことにある。このために、統治者側に恣意と専横が生まれ、農民の側には不平、不満が生まれた。「ご存じの通り、このために多くの郷執行委員会議長と党細胞のメンバーが監獄行きとなった」<sup>152)</sup> とスターリンは明らかにした。

## 6. 1924年村ソヴェト選挙

任命制による農民への圧力が最高潮に達したのは1924年選挙であった。1924年選挙は、9月に辺境からはじまり12月なかばまでに終わった。途中、「ソヴェト活発化」を宣言した党中央委員会10月総会があった。この中央委員会総会が1920年代のソヴェト史に大きな政策転換をもたらしたことは争う余地がない。しかし農村の事態はそれ自体のロジックにもとづいて進行し、10月総会決議そのものはそれにいかなる影響もあたえなかった。下部の活動家は「昔通りに」行動した。<sup>153)</sup>

選挙集会への参加率は前年度よりも大幅な低下を示した。地域によっては、5~10%の農民しか選挙集会に集まらなかった。<sup>154)</sup> 農民の選挙不参加は、1924年秋からの選挙において、積極的な抗議<sup>プロテスト</sup>の様相をますます濃厚にしはじめた。ヤコヴレフは、それは、「はっきりとした政治的形態をとらなかったが、それでも、疑う余地なく農民の大きな層を捉えた抵抗の消極的な形態」であると把握した。<sup>155)</sup> カガノーヴィチにいたっては、「未曾有の棄権」であり、「本質的には選挙のボイコットと紙一重である」と

強調した。<sup>156)</sup>\*

\*農民の意図とは関係のない理由による不参加があったことはいうまでもない。たとえば、選挙日は、しばしば、すべての農民が労働に従事しているときに定められた。1924年選挙キャンペーン中にあつた10月は、大半の農民にとって、収穫、脱穀、薪の調達などの時期であり、個々の地方では、教会の祭日とぶつかった。その事実は処々で指摘された。<sup>157)</sup> このために選挙集会に出席できなかったとして、あらためて選挙を実施しよう農民が請願書さえ提出した地方があつた。<sup>158)</sup>

出席した農民も独特のやり方で抵抗した。「リストに賛成も反対もせず、独特の、沈黙による議事妨害(молчаливая обструкция)をする」と指摘された。<sup>159)</sup>あるいは、抗議する農民は、これみよがしに集会を退席した。政治への不参加はボイコットへ転換し、抵抗にかわつた。集会で沈黙していれば、「賛成」と見なされかねなかった。農民は、抗議の意図をもって選挙集会から退出することを「足で投票する」(голосовать ногами)<sup>160)</sup>と表現した(ドン地方)。この事実は1920年代を通して頻繁におこつた。

選挙集会でリストを通すためにコムニストが頻繁に採用した方法は、同意を要求して集会を引き延ばし、農民を根負けさせることであつた。サラートフ県ヴォーリスク郡の或る村のソヴェト選挙(1924年秋)では、集会で、郷執行委員会議長がコムニストの候補者ザイチキン<sup>ムジキー</sup>を5回推薦する演説をし、5回つづきさまに農民は沈黙した。ついに郷執行委員会議長は業を煮やし、「諸君、投票しよう、このままでは朝になってしまう」。農民は思う——「まず任命して、承認し、それからわれわれに対して必ず選出させる、どうやらこれがわれわれの郷のしきたりのようだ」。結局、ザイチキンが村ソヴェト議長となった。<sup>161)</sup>

ときにはそれは何日もつづいた。アルタイ県ビーイスク郡ヴォエヴォツコエ村では、選挙は

7日かかった。1日目はほぼ全員が出席し、農民はリストに投票することを拒否したため、集会は中止されて、翌日に延期とされた。翌日、出席者はより少なくなったが、同様の結果となった。同じことがくりかえされて、7日目には、誰も出席者がなくなった。あらわれたのは、選挙委員会の「仲間」だけであり、彼らが「選挙」をおこなった。<sup>162)</sup>

集会の引き延ばしは意図的なもので、農民が集会に興味を失って離れた時点で少数で採決をとっているという観察<sup>163)</sup>が生まれるのも無理はない。集会の定足数に対する曖昧な規定もまた乱暴な行為を可能にしていたことを想起しておこう(前述60-61頁を参照)。たった7名の賛成で議長が選ばれた、あるいは、300人選挙人がいるなかで、賛成4名、反対17名で党細胞書記の妻が選ばれた、挙げ句は、リストを承認しない農民が逮捕の脅迫を受け、全員が集会を離れたあと、「選挙人不在でリストが完全に採択された(誰によって?)」、その他等々がそれである。<sup>164)</sup>

しかし逆に、リストを受け入れるまで、部屋から出ることを禁じ、警官を出口に立たせた例があった。集会をくりかえしても農民が賛成しないときには、党細胞書記がリヴォルヴァーを引き抜いた例も報じられた。<sup>165)</sup>これらの例を紹介したハタエーヴィチは、それが決して例外的なものではなく、これほど粗野でない例ならいくらかでもあげることができると思う。

リストを一括して通す任命制に対抗しようとした農民は、リストに記載された候補者を個人別に、順にひとりずつ採択することを要求した。あるいは、さらに進んで、農民がみずからの候補者を立てようとした。一例だけ詳細に事態を引用して、現実の様子を知る助けとしよう。

1924年10月、スモレンスク県グジャツク郡パーチュシコフ郷<sup>ライ</sup>ゾムエフカ地域ソヴェトで村ソヴェト議長の改選があった。郡執行委員会の代表、郷執行委員会の代表、郷執行委員会警察

署長ツイプキンの3名が到着した。この3人は、これまでの議長(様々な過去が農民に知られているコジェーヴニコフ)の再選をどうしても勝ちとろうと躍起になっていた。選挙委員会の委員長もツイプキンであった。農民選挙人の大半はコジェーヴニコフの再選に反対であった。ツイプキンは投票後の票数に不正を加えたが、それは無効とされた。このあと、農民が推す候補者も加えて、それぞれが推す候補者について発言をすることになった。しかしコジェーヴニコフに反対する者は発言を許されなかった。これに抗議する者(多くの周辺の村からの農民もいた)は選挙に参加することを拒否した。彼らは抗議していった。「自分の気に入った者を、われわれなしで選んで任命できるのであれば、何のためにわれわれをここに召集したのか」。選挙委員会委員長で警察署長のツイプキンは、集会を離れる者を「左翼エス・エル」と呼び、農民の恐怖心を煽った。しかし彼らなしでは集会が成立しないため、彼らはふたたび呼び戻され、ついに投票がおこなわれた。コジェーヴニコフは60票、別の候補者が80票、2つの村からの候補者がそれぞれ83票、85票をえた。ところが、プロトコルでは、コジェーヴニコフが全員一致で選ばれたと記録された。或る警官が作成したこのプロトコルは、現在、行方不明であった(「多分、廃棄されたのであろう」)。選挙の3日後、3名が郷執行委員会に選挙の不正を訴えた。10日後、ツイプキンはこの3名を呼び出し、尋問したが、3名は申告した通りであると再度確認した。しかし事件後、音沙汰はなかった。<sup>166)</sup>

党権力によって提案されたリストに対抗して、農民が信をよせる候補者のリストを選挙集会において、その場で提案することは、「クラークの行動」と見なされ、採決の対象とさえならなかった。採決がおこなわれて、農民が提案したリストが大多数の賛成をえても、議長は、党細胞提案のリストが採択された、と書記にプロトコルをとらせた。<sup>167)</sup>農民が選挙集会に先立ってリストを郷に承認してもらうという

方法が手続きとしては残されていた。しかしそのような道は現実には閉ざされていた。アムール県では、農民からの候補者リストを郷選挙委員会が採用しないことに執拗に抗議した農村教師が全権によって逮捕された。<sup>168)</sup>

ソ連中央執行委員会のザイツェフは、のちに、1924年8月11日のロシア共和国選挙訓令がこの点で責任を負うと見なした。<sup>169)</sup> 同訓令は、候補者のリストを選挙人に対して集会で公示する義務を選挙委員会や選挙全権が負うと規定していたからである。ザイツェフによれば、この規定のために、地元では、「誰も他の候補者を提案することはできない」と理解した。しかし、リストの存在は1924年の訓令にはるかに先立っていた。逆に、この訓令の規定は、コムニストが選挙を通じて統治を実現しようとする意図を正当化したというべきであろう。

しかし権力者はいっそう狡猾であった。不慣れなうえ、読み書きもままならない農民にとって、自分たちの候補者リストを適時に作成し、提出することは、そもそも簡単なことではなかった。『貧農』紙1925年2月7日号の巻頭論文は、候補者リストという制度は農民のこの弱点を「しばしば利用して」といって指摘した。この論文は、実に、リストは「決して農民を騙す手段ではない」と現実の姿を非難したのである！

農民の同意を引き出すために何時間も、ときには何日もつづけられた集会の最後に用いられた方法は、農民が抗議の意図を秘めた沈黙を、無理矢理に賛成と見なして選挙集会を終えるやり方であった。その典型は次のように要約できる。村ソヴェトの候補者リストが作成され、選挙人に対してこう宣言される。「諸君は好きなものを選ぶことができる！」。ここに付け加えられる。「このリストに反対するものは、共産党とソヴェト権力に反対するものであり、反革命者である」。あるいはもっとも簡潔に、「誰が反対か？」。農民は沈黙した方がよいと考える。ただちに採決がおこなわれる。「反対者はいない、保留はいない、全員一致で採択された」。

この例は、非常に多く報告されており、<sup>170)</sup> 1924年頃に農村の工作活動において定着したものと見られる\*。

\*数年後の集団化において、スホードでコルホーズ加入の採決がとられ、そのときにも同じ方法がおこなわれた。それには、このようにして、前史があったことに注意しなければならない。また、1928年の穀物調達キャンペーンにおいても同様であった。<sup>171)</sup> この方法は、集団化に際してコムニストが集会で吐く一言として農村で広く知られていたがゆえに、コルホーズ加入を迫る活動家に対して、「群衆は、そのように採決してはいけない！トリックだ！、と唸った」のである。<sup>172)</sup>

選挙において権力者の意思を恣意的に通すもうひとつの方法は、選挙権の剥奪を多用することによって、集会に悪影響をあたえうると判断される人物を排除することであった。地方権力に対する批判的な言辞だけで選挙権を剥奪する事例が頻発した。まさにこのケースにおいて、後述する(69頁)「ブラック・リスト」が役立つのである(また、党员や村ソヴェト議長が悪質な人物であった場合には、犯罪の摘発を恐れて、あるいは個人的恨みから剥奪するケースが相次いだ)。

明らかにこの問題においては、「社会主義革命の利益に損失をあたえる」場合にもそれを剥奪すると漠然と規定したロシア共和国憲法の条項(第23条)にも責任があった。憲法のこの条項は、選挙権剥奪は「労働者階級全体の利益にしたがいつつ」おこなわれるとも規定していた。ザイツェフは、次のように書いた。「若干の村、郷の権力の代表者は、憲法第23条の意義を非常に『鋭く』習得した。農民の誰かが、村ソヴェトか郷執行委員会の無秩序を批判して発言するやいなや、彼はたちまち名簿入りし、こうして『無害化される』のである」。<sup>173)</sup>

選挙権剥奪において、地域的な観点から強い注目を引いたのは、かつて農民運動が勃発した地域であった。

南東のコサックの分布する地方では、内戦期

にソヴェト権力に対抗して蜂起したコサックの選挙権剥奪が大量におこった。地方の訓令は、ドンヤクバンのコサックから選挙権を剥奪することを可能にしていた。<sup>174)</sup> 中央黒土地方のタンボフ県では、1924年選挙における選挙権被剥奪者の割合は2.6%に達し\*、アントーフ運動に関与した人物はほとんど完全に選挙権を剥奪された。<sup>175)</sup> ヴォローネジ県でも同じ事態が発生した。注目すべきは、1923年選挙で候補者リストの無理強いに対して全郡で反意を表明したパヴロフ郡(前述64頁)では、その主な村が1924年の選挙において報復ともいべき攻撃対象となったことである。4年前、この地方では暴動があり、3つの大村(商工業村)、スターラヤ・カリートワ、ノーヴァヤ・カリートワ、テルノワとその他の村ではほとんどすべての農民が、過酷な穀物調達に抵抗して蜂起した。<sup>176)</sup> 鎮圧されたこの叛徒の全員がソヴェト権力から大赦をあたえられたにもかかわらず、1924年の選挙では87名が選挙権を剥奪された。この87名は全員が農民で、大多数は貧農であった。<sup>177)</sup>

\* 村ソヴェトの選挙権者中に占める選挙権被剥奪者の割合は、ロシア全国平均では1922年に1.4%、1923年に1.4%、1924年に1.5%であった。<sup>178)</sup>

郷執行委員会の選出についても簡単にふれておこう。ペンザ農村を詳細に調査したロスニツキーによれば、アチュリエヴォ郷では1923年中頃までの郷執行委員会議長のひとは収賄と農民への愚弄の罪で5年の刑をうけていた。郷執行委員会の選挙はナガン(連発短銃)を手にしておこなわれた場合があった。<sup>179)</sup>

さらに、トヴェーリ農村の研究者ポリシャコーフのソヴェト選挙に対する評価も見逃してはならない。ポリシャコーフは、なぜか、村ソヴェトについてはいかなる分析も残さなかった。ただし、郷執行委員会の選挙について、彼は、1927年の著作のなかで、このうえなく厳しい評価を残した。そこでは、勤労農民はみずからの意思でそのメンバーを選んでいるのごとく見えるが、「実際にはいかなる選挙も存在

しなかった」。選挙はただの「見せかけ」である。郷の党細胞がその采配で、あるいは郡の指示で、望んだものが選ばれた。農民はいった。「選挙に呼ばれるが、選ばせてもらえない。歩き回って、靴をぼろぼろにする必要はない」。大半の農民は選挙をボイコットした。

しかし、郷執行委員会の選挙に対する彼の評価——「細胞の候補がどのようにして選出されたかについては、立ち入るには値しない」——には小さな注が付けられている。郷執行委員会についていえることは、「農村の他の選出的な統治機関」にも妥当する、と。後者が村ソヴェトを含んでいることは説明するまでもない。<sup>180)</sup>

## 7. 農民の沈黙について

農民の沈黙について説明を加えておかなければならない。それは、積極的な行動をすることによって当局と厄介な関わりをもつことを避けようとする農民の保身の行動であり、農民が、日々の生活のなかで党と国家権力の癒着を実感していたことを物語っている。この密かな感情は、1920年代から集団化にかけての時期に、いかにえれば、ネップの時期にも、その後の時期にも、程度の差こそあれ共通して見られ、頻繁に記録された。要約的にその多くにふれてみよう。

選挙集会でリストに反対して発言するものは、座長の選挙全権によって発言を強く遮られ、全員の前で名前を訊かれ、これ見よがしに取り出したノートに名前をメモされた。それは「脅し」のためであった。<sup>181)</sup> しかし以下に見るように、それは必ずしもたんなる脅しではなく、結果をともなうことになる。カガノーヴィチは、1925年4月のソヴェト建設会議において、タンボフ県の1郷におけるソヴェト選挙の不正を党中央委員会宛に訴えた書状に名を連ねたものが警察に呼び出され、尋問を受けた事実について語った。<sup>182)</sup>

1925年に、多くの刊行物が、党は、批判を恐れてはいないし、それを歓迎すると主張した。カガノーヴィチは、1925年1月、「ソヴェ

ト権力の何らかの措置を何かの場合に実務的に批判するからというだけの理由で非党員の候補者を落選させること」があってはならないと、全国の地方委員会への中央委員会のアピールの形で訴えた。<sup>183)</sup>しかしその後のあらゆる状況からして、この約束が果たされたとは言い難かった。

たとえば2年後も全く同じことが農民のなかで語られていた。1927年初頭、休暇でリヤザン県の1村を訪れた赤軍兵士は、そのときの経験を詳細に『貧農』紙に書き送っている。その中心的な部分は、農民は選挙集会では語らないこと、一致した意見は「発言すれば、あとあと厄介だ」(«Выступишь, скажешь, а потом притянут»), 「尻尾を踏めば、咬まれる」ということに尽きた。<sup>184)</sup>

ことは選挙に限られなかった。チェルノーフは、農民のコムニストに対する態度を正しく伝えたいとして、農民はトップのコムニストに好意を抱いているが、自分の郷のコムニストを憎悪し、怖がっている、という老人の言葉がすべてを物語っている、と書いた。<sup>185)</sup>ボルドイレフもまた、或る農民代議員会議で農婦が密かに語りかけてきた経験について語り、彼女は最後に、「農民の一般的な意見は、党员というのはどうしようもない(безнадежно)ばかりでなく、不平をいうのも危険だということです」<sup>186)</sup>と語ったと記した。

当時、いかなる集会においても、目立った行動をとる農民はコムニストによって、「クラーク」や「エス・エル」の嫌疑をかけられた。それは全国から報道されている。「君の名前は?どここの村から来たんだね?」。「党员は、アクティヴな農民に反的の分子として接し、農民の批判をいちいちメモにとる」。<sup>187)</sup>1920年代前半のサラトフ農村をよく知るパンフェーロフは、コムニスト、ザイーチキン(前出65頁)が「特別な秘密の名簿」をもっていた、とその記録に残している。その名簿には「ゲ・ベ・ウ」と表書きがしてあり、そこには「反革命者」、「エス・エル」、「敵」という3つの項目が

あった。ザイーチキンは彼の気に入らないすべての農民の名前をそこに分類記入していた。<sup>188)</sup>これらは「ブラック・リスト」<sup>チョールヌイ スピーツク</sup>として機能した。

集会にはオ・ゲ・ベ・ウ員も紛れており、彼らもこの「メモ」をとった。1924年の極東州に関する州選挙委員会の文書(1925年6月)は次のように伝えた。選挙集会の報告後の討論において農民がほとんど発言しない理由は、(農民にあまり知識がないという事情の他に)「マークされることを恐れている」からである。「たとえば、沿海州オリギンスキー地区では、ゲ・ベ・ウ員が、農民のきつい発言であれば、どんなにささいなものであっても、彼らの名前を訊いてメモに書き留めた」。<sup>189)</sup>ロシア中央部の農村については直接的な証言を集めることができなかったが、今世紀に入って刊行された有名な資料集(『オ・ゲ・ベ・ウの目で見たソヴェト農村』や『極秘:わが国の状態についてルビャンカからスターリンに』)そのものが、オ・ゲ・ベ・ウ員が全国の農民、労働者の集会で周到に情報を収集していたことを証明している。

このような密かな情報はたんなる脅しではなかった。欠点を突かれた村ソヴェトや郷執行委員会の議長は、このような非党员農民を選挙に参加させ、ましてや選挙で通すことはほとんどソヴェト権力の崩壊に導くことだと考えた。選挙権被剥奪者は、郷執行委員会や村ソヴェト、その他司法機関の資料などにもとづいて選挙委員会が決定すると選挙訓令は規定していたが、実際には、地元の村ソヴェト議長やその他からの情報が大きな役割を演じていた。そのリストは、中央の訓令では「公表、あるいは見える場所に掲示する」と規定していた。地方では、たとえば1925年のタンボフ県訓令補足は、選挙権被剥奪者リストを「農村では**団体[村]ごとに貼り出す**」と明確化した。<sup>190)</sup>

これは、当時の「黒板」(черная доска)の制度そのものである。それは、内戦期に起源をもち、クラークやブルジョアなど敵と見なされた分子がそれに掲示された。優秀者を掲示するものを逆に「赤板」(красная доска)といった。黒

板は、揭示されたものに社会的に恥辱をあたえ、孤立させることを目的としたもので、ポリシェヴィキの「階級闘争」にふくまれる野蛮な性格を物語っている。社会的孤立を図るものでありながら、それは、あらかじめ農民スホードで討議の対象とされることはなかった。いいかえれば、「黒板」は、人為的な、外からの「階級闘争」の導入という顕著な特質をもっている。北カフカーズの或る農民は、これを「市民関係における極刑」と呼んだ。<sup>191)</sup>\*

\*「黒板」はその後穀物調達危機と集団化のなかで独自に「発展」をとげる。それは、今ではソ連史の常識に属するであろう。<sup>192)</sup>

## 8. 転換 1924-1925年

1924年選挙は、9月に辺境からはじまり12月なかばまでに終わった。途中、「ソヴェト活発化」を宣言した党中央委員会10月総会があった。この中央委員会総会が1920年代のソヴェト史に大きな政策転換をもたらしたことは争う余地がない。しかし、農村政策におけるこの総会の意義を論じた同時代の分析は、ソヴェト選挙は「昔通りに」おこなわれ、総会の決定は選挙の進行にいかなる影響も全くあたえなかったと印象深く論じた。<sup>193)</sup> この観点からすれば、後述する1924年12月29日付の、定足数不足の選挙を無効としたソ連中央執行委員会決定、あるいはそれを承けた翌年1月16日付決定が、時期区分として一義的な重要性をもつことになる。

この時論において、(農民のアパシーが「昔通り」なのではなく)ソヴェト選挙における農村コムニストの農民に対する態度が「昔通り」のものであると見なされていると解するならば、この時論の観点は、われわれのものと同じである。1924年選挙は、それ以前から醸成されていた農民の抗議——党細胞や上部機関が作成したリストを農民に押しつけるというソヴェト選挙に対する抗議——が、1924年を通して、農民同盟への要求など、高揚しつつあった現状批判と共振しつつ増幅していた底流の存在を示

していた。

非党員の農民をソヴェト建設に引きつけるという「ソヴェト活発化」に関する10月総会の決定は、1924年選挙の途中で、党系列の末端である農村の細胞まで届いていた。しかし農村のコムニストはそれに対して積極的な反応を示さなかった。ここには「農村に面を向けよ」という政策(「新コース」)全体に対する下部党員の不満や無理解があった。<sup>194)</sup>

1924年12月に選挙が終わりに近づき、農村の情勢が明白になるとともに、モスクワ中央は、ソヴェト選挙に対するはっきりとした態度の表明をする必要に迫られた。しかし、12月2日の、村ソヴェト新規則(10月)に関する『貧農』紙の特集号には、カガノーヴィチ、キセリョーフ、カリーニン、モロトフら最高指導者の論文が発表されたものの、それらには、村ソヴェト選挙の現状への言及がなかった。唯一、ハタエーヴィチの論文が、いまや明確になった村ソヴェト選挙の欠陥を意識した具体的な主張を含んでいた。彼は、非党員農民の活用についての10月総会決議が細胞にまで届いているにもかかわらず、それが実行に移されていないとして、進行中の選挙への貧中農の参加を完全に保障し、実際に信用と支持をえているコムニストが選出されなければならないと要求した。そのための具体的な措置として、彼は、党の候補をすべての農村の機関でいかにしても必ず通すという義務の廃止を要求した。それは、任命制の廃止の要求に等しかった。彼は、派遣地に着いたばかりで、農民にまだ知られていないコムニストを選挙に通すことをしてはならないと主張した。

12月を通して新聞各紙は重要な記事を出さなかった。それは、大きな決定が準備されていることを意味していた。オ・ゲ・ベ・ウは、12月の政治情勢の摘要報告のなかで、「すぐるソヴェト選挙期における12月の農村の政治情勢はきわめて鮮明となった」とし、選挙に対する貧中農の消極的な態度は著しく、場所によっては選挙への参加率は5~10%にまで低下した

と記した。それは、選挙不参加の最大の原因が、「あらかじめ作成された候補者リストを選挙委員会が執拗に通すこと」にあると断定した。それは、任命制への農民の抵抗の具体的な様相を描き出し、ソヴェトからコムニスト、コムソモール員を排除しようとする強い要求があると強調した。<sup>195)</sup>

内務人民委員ペロポロドフは、生々しい報告書(1924年12月24日)を中央委員会書記局のジノヴィエフ宛に送り、あらたな情勢を伝えていた。「選出職へのコムニストの選抜は、個人的な評価にもとづいておこなわれはじめた。リストによる投票が斥けられはじめた。若干の[党]細胞は完全に落選した。細胞が提起したリストを全体として拒否しながら、個々の個人が選出された」。<sup>196)</sup> さらに、報告書は、リストによる採決が「非常に歪曲された形態で」実施されていると指摘し、これを次のように評した。「いかなる国においても、選挙委員会が候補者のリストをもって登場する権利はもつことはないように見える。ところがわが国では、圧倒的大多数の場合、選挙委員会がそうしているのである。したがって、あらゆるこのような提案は、全く正當にも、選挙人に対する直接的な抑圧と見なされている」。<sup>197)</sup>

12月30日、『イズヴェスチャ』、『プラウダ』、『貧農』の中央各紙は、一斉に、前日29日付のソ連中央執行委員会幹部会決定を公表した。それは、選挙参加の不十分なソヴェト選挙を破棄して、そのやり直しを指示するというものであった。<sup>198)</sup> 翌年1月16日付同決定は、やり直すべき選挙を参加率35%を下回った選挙、あるいは農民の正当な訴えがあった選挙と具体化した。<sup>199)</sup>

この2つの決定を承けて全党組織に送られたのが、1925年1月27日付のカガノーヴィチのアピールであった。カガノーヴィチは、リストによる選挙を強要していることに「農民選挙人の極限的な不満が蓄積されている」と指摘した。<sup>200)</sup> 彼は、このとき、選挙委員会からリスト提示権を剥奪する主張において、急先鋒に

立っていた。<sup>201)</sup>

12月30日の『貧農』紙によれば、同編集部が中央執行委員会の決定を受けとったのは、前日の夜遅く、オシプ・チェルノフ論文の活字が組み上がったときであった。同じ30日に発表されたチェルノフの論文は、選挙では、党細胞からのあらゆる強制をなくし、「今年は選挙人の意思ができるだけ完全に表現される」ことを要求したものであった。農民オシプ・チェルノフの名は、1921年3月に割当徴発が現物税に替えられるのに先立って、2月の『貧農』紙に彼の同趣旨の論文が(もとよりレーニンの許可のもとに)公表されたことで、ソ連史上知られている。1924年12月30日のチェルノフ論文の発表が偶然だったかいなかを知ることにはできない。しかし実際、このときネップが本格的に(しかしわずかな期間で)はじまったのである。

## 9. 1925年再選挙

前述のように、1925年1月16日、ソ連中央執行委員会幹部会は、前選挙を無効にする条件を具体化した。実際に無効とされたのは、1924年におこなわれた選挙の約4割(郷の数で)であった。<sup>202)</sup>

同日、ソ連中央執行委員会は、新しい選挙訓令を発表した。<sup>203)</sup> 行論に係する限りで、変更点を簡単にまとめておこう。

村選挙委員会は、以前、全権以外は2名の村ソヴェト員からであったが、このとき、1名の村ソヴェト員と村(村ソヴェトのおかれていた村)のスホードの代表者からとなった。これによって農民共同体の意思が彼を通して選挙委員会に反映することになった。選挙権被剥奪者のリストは、不服申し立てが可能のように、選挙の20日前までには、見える場所に貼り出すものとした(それまでは1週間前までであった)。選挙集会の日時は、5日前までには知らせなければならなかった(以前は13時間前までであった)。新しい選挙訓令では、個人別の通知の制度が導入されたが、それについては後

述する(84頁)。採択の方法という重要な争点については、1924年の選挙訓令では、採決はリストによるか、個人別におこなうとだけ規定していたが、1925年の訓令は、それは集会そのものが決定すると明記した(リストによる採択そのものが禁止されたのではない)。

選挙権剥奪の指標は、従来よりも緩和された。1924年の選挙訓令以来\*、かつて利潤目的に労働者を雇用していたものや、非勤労所得(利子、企業収入、資産からの収入など)によって生活していたものであっても、ともに「現在していない」ことを証明する書類を提出すれば、彼らは選挙権をえた。それに加えて、1925年の訓令においては、農業に従事し、他の法律で規定された枠内で労働者を雇用している農民にも選挙権が認められた。地方レベルでは、いっそう緩和の規定が具体的であった。たとえば、タンボフ県選挙委員会が採択した訓令への補足は、雇用労働を適用していなければ、製粉所、黍脱穀所、搾油所、鍛冶場などの所有者を選挙権被剥奪者に含んではならないと定めた。<sup>204)</sup> \*\*

\* もともと、1922年の選挙訓令は、1918年7月のロシア共和国憲法第65条(СУ РСФСР. 1918. № 51. Ст. 582)に依拠して、利潤目的に労働者を雇用しているもの、非勤労所得(利子、企業収入、資産からの収入など)によって生活しているもの、商人、聖職者、旧体制関係者等々をその対象としていた。しかし1924年のそれは、「していた」ものと憲法の条文を明らかに修正した上で、「していた」ものは、「現在、していない」という証明書を、農民なら村団(сельское общество)——村ソヴェト、と解される——から入手して提出すれば、選挙権をあたえられると規定した。1925年1月のこの選挙訓令も同様である。これは明白な憲法解釈の変更であり、必ずどこかで大きな議論があったはずであるが、筆者は、残念ながらそれを知らない。1918年憲法をネップの精神に適合させたとの解釈がただちに思い浮かぶ。ところが、1925年5月の新しいロシア共和国憲法(第69条)も「雇用している」「生活している」と明記しており、1918年憲法の

規定を踏襲している。

\*\*1925年の村ソヴェト再選挙における選挙権被剥奪者の比率は1.1%であった。<sup>205)</sup> それ以前の数字は前述68頁を参照。

主要な争点を形づくっていた採択の方法については、新訓令は次のように規定した(秘密投票か公開投票かについては、以前と同様、県や州の選挙委員会が決定した)。採択を、リスト全体によっておこなうか、個人別に、すなわち候補者ごとにおこなうかは、集会自体がその都度決定するのであるが、リストや個々人の候補者は、特定期間以前に提出されたものに限られず、集会自体において提出してもよかった。この最後の点が、現実にはもっとも重要であった。特定期間以前に申請を出しておくというやり方は、農民には、きわめて難しかったからである。

この規定には、重要な注が付けられていた。それは、選挙委員会もその全権も、個々の候補者やそのリストを、選挙人に提案する権利をもたない、と強調した。候補者を出す権利は、社会組織(農民相互扶助委員会、党細胞など)、市民グループ、個々の市民にあたえられることになった。<sup>206)</sup> リストを提出する主体は大きく広げられた。選挙委員会による提案は禁止されたが、党細胞がリストを提出することはもとより廃止されなかったのであり、したがって、1924-25年に見られたのと同様の、採決をめぐる深刻な争いはその後の選挙においてもくりかえされた。

農村の党活動は、1924年の10月総会によってではなく、年末の1924年選挙無効の宣言と、それを具体化するための郷での活動とともに開始されたといわなければならない。たとえば、ヤロスラヴリ県では、昨年(1923年)の10月総会のあと党活動は不活発であったが、1925年の再選挙を純農民的な郡で実施するために県党委員会から郡へ多数の活動家が派遣されたことではじめて、党は農村の問題と直面することになった。<sup>207)</sup> いっそう生々しい証言は『貧農』紙の農民編集部員として著名なオシプ・チェルノーフ

によってもたらされた。

彼は、1925年再選挙の開始当時、ニジニ・ノヴゴロド県に滞在しており、そこから、「広い意味での農民自体と、郷執行委員会・コムニスト双方の真の相貌」を伝えようとした。これまで農民の利益を無視し、任命制を敷き、恣意的に選挙権を剥奪してきたところへ、突然、モスクワでソヴェト建設会議が開かれ、前選挙が無効になった。チェルノーフは、県執行委員会が村ソヴェト選挙と郷執行委員会選挙のやり直しを決定したために、「郷執行委員会は、いうならば、まさに茫然としている」のを見た。「ソヴェト建設会議は多くの活動員に強烈なショックをあたえた」。まばらな参加者の非党員農民会議において、郷執行委員会議長は「カリーニンのおかげで、ここでまた働く羽目になった。仕方があるまい！」と発言した。

郷執行委員会は(全員ではないとしても)この改革レフォルマに完全に反対である。或る郷細胞は——この細胞のメンバーの言葉を借りると——「農民にこのような自由をあたえるのは時期尚早である。どんな変化もあってはならない」と決議した。別の郷では、非党員農民の公開集会がおこなわれ、集会の最後の、ソヴェト建設に関する議題では、農民は集会から退出させられた。コムニストは次のように農民に説明するよう指示されていた。「選挙は農民の参加率が低かったから破棄されたのではない。ただ新しい規則が出たからだけだ」。この事実をチェルノーフに話したコムニストは、「農民は新聞を読んでいるのに、私は彼らに嘘をつかなければならない、これは何ですか」と不満を語った。<sup>208)</sup>

農民のなかでは、2度目の選挙の知らせは大きなセンセーションを巻き起こした。「新しい罍」であるとか、「戦争が近づいているから党は農民に取り入っている」、「差し迫った戦争による外国の圧迫」である、「コムニストは〔先の選挙で〕通らなかった。だから中央権力は選挙を無効にしているのだ」等々の懐疑的な反応もあったが、<sup>209)</sup> それは、党権力に対する農民の不信がそれまでいかに強かったかを物語ってい

た。彼らの多くはこのとき、自分で自分の代表を選べるという可能性を感じ取り、それを確信した。「完全な独立だ。好きな人物を選べる。以前のように推薦されたメンバーがいない」。「なぜ以前ソヴェト権力は農民にこの自由をあたえなかったのか」。「共産党はとうとう農民を信用しはじめた」。<sup>210)</sup> エレーツ郡の内務人民委員部宛報告は、「かつて農民のなかで見られた選挙に対する無関心な態度はない」と断定し、ウリヤノフスク県アルダートフ郡執行委員会の同報告は、農民の関心の高まりを「まるで夢から跳び起きたように」と表現した。<sup>211)</sup>

前回の選挙ほどではなくとも、以前のような党の圧力によって選挙が進む地方もあった。しかし印象的であったのは、やはり急激な変化の起こった地方であった。コムニストは党細胞名でリストを提出したが、それは拒否されるか、農民による新しい追加を受けて、各候補者別に採択がおこなわれた。当時、コムニストに対しては、非党員という「羊の皮を着た狼を暴け」としばしば警告が出された。しかし明らかに、情勢はコムニストに不利であった。コムニストの狼狽と自信喪失が出現した。コムニストはあまりにも支配者であることに慣れていて、<sup>212)</sup>

これは危険な兆候であった。「同志たちはあちこちで急激な変化を恐れ、陣地を放棄するのではないかと恐れている」。<sup>213)</sup> 「党の顔」を隠す(скрывание, прятанье «партийного лица»)という印象的なことがあった。細胞や党の郷委員会は、気がつくや、騒がしい農民集会のなかで孤立していた。彼らは、方向を見失って、集会の進行に影響を与えようとしなかった。党組織の名前で発言することを望まず、党指導の下で選挙集会を開くことを諦め、党組織から候補を立てることを諦め、さらには、党が立てた候補に投票することでさえ諦めた。このような情景は頻繁に見られた。<sup>214)</sup>

1925年2月、4年前に農民暴動があったタンボフ県キルサーノフ郡の2郷からもどったモロトフは、クルスク農村へ派遣されるコムニストに向かって、教訓となる事実をいくつか

語った。ひとつは、農民スホードで軽蔑的なメモ（「コムニストは出ていけ」）を受けとったことであったが、もうひとつは、「クラーク的な性向をもつ」大きな商業村での集会におけるコムニストの醜態であった。ふつうコムニストは、自分の決議を「機械的に」通すか、通すのが困難だとわかると集会を閉じるという方法をとってきたが、農民の支持のある提案が出された集会に対して、その地方のコムニストは全く準備がなく、無力であった。大きな転換を恐れ、後退するのではないかと恐れるコムニストに対して、モロトフは、「農村に面を向けよ」のスローガンは、非党員農民アクチーフをわれわれのまわりに組織し、彼らに対する党の影響を強化することである、と強調し、とくに選挙に先立つ準備活動の重要性を説いた。<sup>215)</sup>\*

\* モロトフは、ここで「ソヴェト活発化を語りながらわれわれはクラークとの闘争を止めることはしない」と、一見、陳腐な主張をした。しかしここには、「1925年」（「新しい時代」）の運命に影響をあたえる主張の大きな分岐点があったことがわかる。1925年初頭から、農業人民委員スミルノーフ、カリーニンを中心に、「勤勉な農民」をクラークと混同することへの警告が強く出ていた。中央委員会4月総会では、クラークの定義をめぐって、モロトフとカリーニンのあいだで争いが生じた。モロトフは、攻勢が柔軟でなければならないことを明らかに考慮に入れて、クラークの明確な定義を拒否し、富裕な農民という規定で十分だと主張した（1927年の選挙に関する両者の立場の相違について、後述81, 82頁を参照）。スターリンは、総会の席上モロトフの見解を支持し、カリーニンの主張に対して「理論でクラークは捕まえられる」と野次を入れた。<sup>216)</sup>

もうひとつの危険な兆候は、1924年選挙を無効にしたことが、農民によってソヴェト権力の弱体化の兆しと受けとめられたことである。「指導者を弱め、広汎な民主主義を許すことへ転換」した、「コムニストは労働者だけ統治しようとしたが、間違った」、「ソヴェト権力は、農民との関係で陣地を明け渡した」、「共産

党は弱体化した。農民は自分の党を組織する必要がある」、「コムニストは退場しつつある」等々。<sup>217)</sup>コムニストとコムソモール員と貧農を孤立させようとする動きが全国で見られた。

さらに、農村での一部の動向は、モスクワ中央にとって統御可能な限界をこえるのではないかと不安を感じさせる側面を見せはじめた。ソヴェト選挙における秘密投票、労働者と農民の代表権の平等<sup>218)</sup>に対する要求が提起された。その他、言論の自由や政治犯の釈放などを要求するもの、プガチョフの反乱を想起せよ、というもの、「ニコライの三色旗は貴族、小ブルジョアジー、農民をあらわしていた。いまや赤色は、農民に寄食する居候の支配を意味している」等々多様な状況が全国においてオ・ゲ・ペ・ウによって記録された。<sup>219)</sup>

最後に、知られるように、農民同盟の問題があった。その普及は、1925年再選挙にはるかに先立っていたが、このとき急速に広がりを見せた。農民同盟の要求は、都市、労働者と比較した農村、農民の地位の全般的な低さという差別意識から発生し、その克服のための団体の組織を要求したもので、その特性から、都市近郊や、出稼ぎの盛んな農村において発生し、広がった考え方である。それは、都市から失望をもって帰村した農民や、都市の工業に出稼ぎ労働者として就業している農民のなかにも均しく存在した。<sup>220)</sup>

1920年代の農民同盟の思想は、権力に守られた労働者が労働組合をもっていることを強く意識しながら、何よりもまず、農民も「農民組合」、「農民労働組合」（крестьянский профсоюз）をもって農民の生活を保護するべきだという観点から打ち出された、それ自体は体制内的な考え方であった。<sup>221)</sup>しかし、それは、同じ矛盾をもつ土壌から生育する政治的な動きを発生させる可能性をもっていた。たとえば、各地で開催された非党員の郷農民会議がそれである。非党員郷会議は、本来、官製のもので、地方党委員会の強い規制の下にあった。会議の日程や議題もあらかじめ県委員会によって決定さ

れ、決議も大半が紋切り型のものであった。農民のイニシアチヴは、紛糾した会議で議題を変更、拡大し、決議に追加をくわえるという形であられた。<sup>222)</sup>

たとえば、サラートフ県セルドプスク郡からの1925年2月の報道によれば、郷農民会議でもっとも活発であったのは文化的に高い富裕農であった。彼らは、ソヴェト権力を助けたいと熱烈に希望を表明しているが、その発言を特徴づけるのは「富裕農と貧農に分けるわれわれの政策への不満」、「農民同盟という形態での『自分の』農民的組織をつくりたいという願い、農民会議に立法的な権利をあたえる要求である。このすべての願いは、『自分の秩序』、ただ非ソヴェト的な秩序を打ち立てることに帰着する」。<sup>223)</sup>

こうしたいくつかの危険な兆候が広がるのを予防することがただちに党の課題となった。この考察は本節12の課題である。

## 10. 世代間対立

村ソヴェト選挙をめぐる対立は、村とその外、すなわち他所者(コムニスト)と農民とのあいだの対立であり、村のなかでは、一部のコムニストは農民のなかで信頼さええていた。しかし、別のコムニストが前述のような醜態を演じていたために、総じていえばコムニストは影響力をもっていなかった。村内部での対立に特徴的なことは、世代間(象徴的には「父と子」)の対立、すなわち農民、とくに伝統的な価値観を体現する老人とコムソモール員との対立であった。これもまた、1920年代農村の一貫した傾向であり、以下では1924-1925年という枠を離れて考察しよう。

19世紀の古い時期には、労働能力を保持し、知恵を有する60歳以上の老人は、非公式の、真のリーダーであった。彼らは、慣習、伝統を口承によって受け継いだものとして、しばしば「老人会議」をもち、共同体のなかでもっとも大きな権威をもっていた。村の重要な問題は彼らによって審議され、その意見はスホードの決定に大きな影響を及ぼした。<sup>224)</sup> この伝統は

1920年代にも維持されていた。

1925年再選挙においてタンボフ県ポリソグレプスク郡で記録された農民の発言はもっとも象徴的である。「もっともよいのは『コムニストのいないソヴェト』である。コムニストは自分の党の利益だけを守っているからである。改選に際しては、できるだけ年寄りを選ぶ必要がある。『青二才МОЛОКОСОСЫ』(コムソモール員)やコムニストは駄目だ」。<sup>225)</sup>コムニストとコムソモール員を「まだ早い」、「みんなまだ若い。彼らはいらない」とする農民の発言は、地域、年を問わず多数記録されている。<sup>226)</sup>

農村のコムソモール細胞の基本的な部分は17-18歳の若者であった。彼らは、農村社会では独立の働き手とは見なされておらず、たとえ独立して農業を営んでいても、農村ではしばしば「青二才」、「父なし子」(безотцовщина)、「髭なし(若僧)」(безбородые)と呼ばれた。彼らの失業した状況に着目した場合には、「雄猫」、「怠け者」として軽んじられた。

それは、貧農やバトラークに対する農民の態度に通じるものがある。1925/26年選挙キャンペーン(1925年11月)では、貧農、バトラーク、コムソモールに投票させなかった極端なケース(サラートフ郷)も確認される。選挙を指導したのは「中農」、すなわち農民大衆であった。<sup>227)</sup>

貧農に対する態度はこの時期に限られない。これは、ポリシェヴィキ体制の評価に関わる原則的な問題である。

ロシア農民がコムニストの政治体制と一貫して和解できなかったのは、マルクス主義のロシア的適用であるその「貧農崇拜」においてであった。農民がつねに恐れ、全力で逃れる対象であった貧困と飢餓の状態にある者のなかに共産党が正義と真理を見いだし、彼らを擁護し、しかも権力をあたえようとするのはなぜか、農民には皆目理解できなかった。このテーマは、ポリシェヴィキ権力が出現したとき以来のものであった。1920年にレーニン宛に書かれた陳情書が残されている。それは、「働きものの中

農と貧農」を自認するヴォログダ県カドニコフ郡クルバングスカヤ郷の数村の代表者たちが書いたもので、それは、怠惰ゆえに土地を捨て経営を捨てた怠け者に権力をあたえたポリシェヴィキを非難していた。<sup>228)</sup> 1920年代には貧農のすべてが怠け者ではないという様々な議論や実証があらわれた。農民は、寡婦や身体障害者や孤児が怠け者でないことを理解していた。それでも「貧農は怠け者である」という命題が何度も何度も口をついてあらわれたのは、飢餓や貧困から逃れるために彼らが多大の努力を強いられてきたからである。ポリシェヴィキの「貧農崇拜」に対する強い不満は1920年代を通して農村に渦巻いていた。

コムソモールに戻ろう。どの農村のコムソモール細胞も歴史が非常に浅く、農民に信頼されていなかっただけでなく、農村生活と不可分の宗教や密造酒の製造などに対する彼らの極端な暴力的な行動は、農民のなかに強い不満を引きおこしていた。いいかえれば、農村における世代間の対立は、農業や宗教などの農民的価値をめぐる対立をも集約していた。

1920年代の農村では、都市工業が未発達なもどで、都市での労働や教育、生活をもとめる若者が過剰人口を形成していた。識字率の高い彼らは変革の動きにも敏感であった。彼らが共同体のスホードから疎外されていたことは、この傾向を逆に促したに相違ない。<sup>229)</sup> 1926年のヴォルガ下流ホピョール管区の報告は、「選挙の瞬間には、老人(より保守的な性向をもつ)と、ソヴェト権力の課題をよく理解する若者とのあいだの闘争が強くあらわれた」と記した。<sup>230)</sup>

1925年再選挙の結果、コムニストとともにコムソモールの割合が実際に大きく下がった(第2表)。オ・ゲ・ベ・ウによる1925年3月の農村の政治状況の摘要報告は、「多くの場合、コムニストとコムソモールの員は騒ぎ声と口笛とともに落とされた。コムニストとコムソモールの員が集会に入れない場合さえあった。同時に、かつて選挙権を奪われていたものが多数通っ

た」と、印象的に記した。<sup>231)</sup>

1924年選挙の結果と1925年再選挙の結果を比較すると、村ソヴェト員に占めるコムソモールの割合は4.2%から2.3%へ減少した。逆に村ソヴェト員の平均年齢が上がった。村ソヴェト員に占める「25歳未満」が減少し(22.4%から16.6%へ)、「41歳から60歳まで」が増加した(17.4%から24.5%へ)。<sup>232)</sup> 個々の地方では、その変化はいっそう劇的であった。ヴォローネジ県ロヴェニキ村の調査では、1924年秋に、30歳未満の村ソヴェト員が61%を占めたのに対して、1年後にはわずか25%となった。逆に、40歳以上の村ソヴェト員は3%から40%にまで増加した。<sup>233)</sup> ブグルスラン郡ノヴォ・スパスク村では、一群の農民がコムソモールの員を殴打しようとし、ソヴェトには「60~70歳の老人」を通した。<sup>234)</sup> 「より年配の農民」への移動は、農業、農村の経験を豊かにもつものへの移行を意味していた。それは、伝統的な農村における若者の地位の低さ、年配の農民の地位の高さを意味していた。コムソモールの中央委員会のチャプリンは、1925年再選挙でコムソモールの員がいたところで落選したのは、宗教を冒瀆した彼らに対する農民の報復であるとさえ述べた。<sup>235)</sup>

カリーニンは、この変化のさなかにあって、かつての大家族のなかに、勤労と安定という価値をもつ家族のイメージを見いだし、小家族化の原因となる家族分割に反対した。これは、ソ連指導者としては異例の発言であった。<sup>236)</sup>

村ソヴェトにおいて年配の農民の割合が高まった1925年再選挙の最中に、老人からの選挙権剥奪の事実が伝えられはじめた。たとえば、ペンザ県アチュレヴォ郷では、1925年2月18日郷執行委員会の村ソヴェト宛の命令(предписание)によって、1925年春の再選挙に向けて60歳以上のすべての農民が市民権を奪われた。この「アチュレヴォ憲法」によれば、人民陪審員への被選挙権をもつのは男性50歳以下、女性40歳以下となった。<sup>237)</sup>

通常「もっとも民主的である」とされる、次

の1925/26年選挙キャンペーンではその報道が一挙に増えた。この選挙キャンペーンは、1925年再選挙で大幅な後退を強いられた党権力が陣地の回復に精力を傾けたときである。イヴァノヴォ・ヴォズネセンスク県とヤロスラヴリ県では、曖昧な「クラーク」規定による選挙権剥奪とならんで、55歳ないし60歳以上の老人を機械的に選挙者の名簿から除外することがおこった。<sup>238)</sup> 同じ1925/26年選挙ではトムスク管区、クズネツク管区で55歳以上の男子、50歳以上の女子から選挙権が奪われた。地方、管区選挙委員会は選挙準備の過程でそれを正さなければならなかった。<sup>239)</sup>

同じ1925/26年選挙キャンペーンのとき、ニジニ・ノヴゴロド県検事が農民の陳情や農民との対話を通して県の一郷を詳細に調査したことがあった。このとき彼は、或る村のスホードで、ソヴェト権力は55歳以上の農民から選挙権を剥奪するのか、という質問を受けた。調査すると、実際に郷執行委員会の代表が、55歳以上の農民に選挙権がないと言明し、選挙集会から立ち去るよう指示していた、と判明した。<sup>240)</sup> これらの事実から、老人からの選挙権剥奪は、おそらく郷のレベルで決定が出され、管区以上の行政単位レベルはそれに関与していなかったことがわかる。

この事実は1927年以降にも見られたのであるが、この事実にはこれ以上われわれは立ち入ることをしない。<sup>241)</sup> 上からの非難にもかかわらずこの試みが頻繁にくりかえされたことを考えると、この現象は、老人を毫碌した選挙人に見なして選挙権を剥奪したと説明するよりも、ソヴェト選挙において共同体的伝統の影響を食い止め、権力に有利に選挙を運ぼうとする秘かな意図を郷、地区がもっていたと見なした方が説得的であろうと思われる。しかし残念ながら、資料のなかでそのような説明に出会うことはない。

## 11. コサック

内戦期に大量弾圧を受けて以来、政治的に強

く抑圧されてきたコサックは、1925年のソヴェト選挙によって政治的な権利を復活させた。しかし、帝政期に辺境の防衛と開拓の任務を負った特権身分であったコサックは、これによって、同時にかつての特権を復活させることを願望した。かつてコサックは土地の独占的な所有にもとづいて、地域の非コサック・ロシア人農民に対して土地を貸し出していたが、革命期の土地分配によってこの関係は消滅していた。コサックの分布する地域では、コムニストは、革命の恩恵を受けたこの非コサック農民から形成されていた。後者が「他所者」(иногородние)——これまでの「他所者」とは概念が相違することに注意——と称された。いいかえれば、ソヴェト権力の勝利を、コサックは「他所者」の勝利とみなしていた。

このことから理解されるように、これまで考察したコムニストと農民との関係は、コサックの分布する地方では帝政期の身分制的な過去を背負った複雑な敵対関係を形づくっていた。

クバン管区を例にとると、1925年再選挙で「左」と呼ばれたのは、コムニスト、コムソモール員、動員解除された赤軍兵士、労働組合員、貧農、バトラークであり、「身分制的な指標では、圧倒的の大多数が他所者である」。「右」を構成したのが、コサック(他所者の富裕層をふくむ)であり、彼らは、団結力、政治的活発さ、文化水準の高さによって特徴づけられた。管区委員会全権は、コサック村のいくつかの農家には、地方、中央の新聞がそろえられ、ソ連指導者の演説などが綿密に検討されているのを見て驚きを隠せなかった。<sup>242)</sup> 党の文書は、彼らが前記のあらゆる点において「左」を凌駕していることを認めた。

ここでの1924-25年の選挙は、われわれが考察したロシア農村の特徴と完全に相似的であった。管区18地区中16地区の総括によれば、1924年11月の選挙と1925年3月の選挙を比較すると、集会参加率は16%から36%へ2倍以上に増加し、選出された村ソヴェト員は、コサックが32%から58%へ、40歳以上が

22%から40%へ増加し、コムニストは21%から9%へ、コムソモール員は8%から2%へ減少した。<sup>243)</sup>

コサック村での選挙がロシア農村の特徴を凝縮していたことは、コムニストが提出するリストに対する「右」の次の言葉にあらわれている。「これまで実施されてきたリストによる選挙のシステムは、ペテンの主な方法であり、コムニストの手にある切り札である」、と。この主張はコサック村に限らず、同地方の「他所者」の村でも同じであった。ドン管区の6つの村ソヴェトにおける前1924年選挙がその方法による結果に終わったことをここで想起しておこう。そのときそこでは、すべての村ソヴェト選挙は地区執行委員会によって指導され、村ソヴェトの候補者は選挙委員会と党細胞の名前でリストが提出され、「提出されたリストは大部分が丸ごと通った」。<sup>244)</sup>

一方、1925年の再選挙におけるリストに対する否定的態度は著しく一貫しており、リストが自分たちの提出したもので、それをリストごと採択した方が、有利であるところでさえ、彼らはそれを斥けて、個人別に採択した。そのため、呼ばれた候補者名を記載する手続きをはじめとして、選挙には多大の時間がかかった(翌日までもちこされることもあった)。<sup>245)</sup> 1925年再選挙の次の選挙である1925/26年選挙に際して、テーレク管区のコサック農民の代表的な言葉が記録されている。「去年、村ソヴェト員であることは義務(повинность)と見なされていたが、今や村ソヴェトという肩書きは名誉あるものと見なされている」。<sup>246)</sup>

しかし、コムニストが支配する郷執行委員会は彼らの関心の外にあった。「われわれには村スタニューツが必要なのであり、ヴォル・イスボル・コム(郷執行委員会)はいらない。ヴォル(牡牛)とは、荷物を運び、鞭で打つ畜生のことだからである」(オレンブルグ県)。<sup>247)</sup> したがって村ソヴェトは、コサックにとって自治権の確立という観点からとくに重要な意味をもっていた。1925/26年選挙において、1925年の村ソヴェ

ト細分化の対象から外されていると知ったコサック農民は、次のような反応を示した。「コサックは、自分のソヴェトをつくり、自分の行政的な権利を拡大しようとしている。たとえば、オレンブルグ県では、現在の村ソヴェト細分化の過程に該当していない村においてソヴェトをつくりたいという要望をもって農民訴願者があらわれた」。<sup>248)</sup> 前節に考察した、村ソヴェトの統合から一村型村ソヴェトへの回帰が、共同体農民の、権力からの遠心的傾向と強く関連していたことを、コサックのこの要求は極端なケースとして(すなわち凝縮的に)示している。

しかし、前述のように、彼らの主張は身分制的な枠にしばしば縛られていた。それは、革命前の身分制的な反目(сословная рознь)の再燃をともなっていた。かつて他所者の非コサック農民に対して特権的な土地所有権をもっていたコサック農民は、革命によってそれを失ったが、このときこの特権をふたたび要求した。「みずからの」村ソヴェトをもとうとする要求は、非コサック農民の追放への要求をともなっていた。<sup>249)</sup> 「コサック身分の復活」はその後も彼らの要求の重要な一部を構成した。<sup>250)</sup>

敗北の強い衝撃のなかにあった多くの「左」のなかには、根強い反撃の気分も醸成されていた。管区委員会の文書は、選挙におけるコムニストの敗北を「晴天の霹靂」と形容した。彼らは「行政職」を失った。彼らは、「かつての人々」、「失業者党员」であり、管区にあらわれ、職を求め、貧困をかこった。彼らは、村細胞の平のコムニストになかに陰鬱とパニックを普及させていた。<sup>251)</sup>

その欲求不満は攻撃の気分にも転じることができた。旧赤軍兵士の集会でひとりの旧兵士が発言に立ち、「ひとりの赤軍兵士に対して20人のコサックのクラークを殺せと指示をくれ、一晩でこの反革命者を全員殺してみせる」と管区委員会全権に真剣に提案した。<sup>252)</sup> こうして、コサック村でのソヴェト選挙をめぐる「右」と「左」の敵対関係は、その後も深刻さを減じることなくつづいた。上の言葉が、スターリンに

よるコムニストの特徴づけ(後述82頁)に酷似していることにも着目しておこう。コサックの問題は、過渡期のロシアの特殊性と一般性の双方におよんでいた。

## 12. 「1925年」の終わり

1925年初頭の再選挙の結果(再選挙がおこなわれたところでは)、村ソヴェト員に占めるコムニストとコムソモール員の比率(前選挙では11.3%であった)は5.9%にまで半減した。同議長に占めるコムニストとコムソモール員の比率も、26.2%から14.8%へ急落した(1924-25年の2度の選挙の結果を全体として見ると、その比率はそれぞれ8.9%, 20.1%であった)。<sup>253)</sup>

村ソヴェトの高齢化とともに、これらの指標は、全体として共同体的な価値(労働、家族、宗教)の勝利を物語っていた。レズーノフの指摘、「1925年にはスホードによる村ソヴェトのほとんど完全な吸収が認められた」(«В 1925 году отмечалось почти полное поглощение сельсовета сходом») <sup>254)</sup> は、土地団体が村ソヴェトに対して決定的な優位に立ったことを直接には意味しているが、これもまた、より広義には、共同体的な価値の勝利を語ったと解することができる。

レズーノフは、この結果を「政治的に危険なジャンプ」と特徴づけた。<sup>255)</sup> 1925年再選挙に先立つペロポロードフやカガノーヴィチらの発言(前述71頁)から明らかなように、選挙のやり直しを決定した中央権力は、或る程度のコムニストの後退を予期していたであろう。しかし下部のコムニストにとってはこれは「全く予期しなかったこと」であり、その狼狽と意気消沈はモスクワ中央に強い警戒感を与えた。ブハーリンはそれを、1921年の新経済政策への移行の時期と同様の「党の危機」、党細胞の解体状況と特徴づけ、<sup>256)</sup> ルィコフは、のち9月に、4月の第14回党協議会が正しく問題を解決しなければ、それを「農民自身が党とソヴェト権力に対して議事日程にのせたであろう」と

述べた。<sup>257)</sup> 1925年におけるコムニストの「呆然自失」は、とくにそれが「いまや」克服されたという文脈でのちにいたるところで回顧された。

1925年のコムニストの動揺は、1930年3月はじめに、集団化のいきすぎを下部の活動家の責任に帰したスターリン論文が引きおこした動揺とも似ていた。「1925年」が権力者にとっても、農民にとっても、実際に非常に象徴的な意味をもっていたことを示すことができる。1930年3月、集団化のいきすぎに抵抗して蜂起した農民のスローガンには、「暴力反対、コルホーズ反対」のほかに「1925年のソヴェト権力万歳」というものがあった(タンボフ地方)。<sup>258)</sup> 全く同じ頃、ヴォルガ中流地方モルドヴィア州書記ペリネンは、集団化の誤りをスターリンが非難したために、地方権力が権威を喪失したと指摘し、そのために逆に、農民共同体の権威が著しく高まったと述べた。「多くの場合、土地団体は、それに対して想定されている権利ではなく、ソヴェトのアパレートが強化される以前の1924-1925年にあった権利を、略奪的に横取りした」。ペリネンによれば、1930年春の農村は、「1924-1925年にあった」共同体的な権力のもとにあったのである。<sup>259)</sup>

スターリン本人も「1925年」の新しい情勢のなかにあった。1925年1月27日、第13回モスクワ県党会議において、彼は、グルジアの反乱、タンボフの反乱、クロンシュタットの反乱のすべてが党に対する有益な批判であったと認めた。しかしブハーリンやカリーニン<sup>260)</sup>らが新しい農民政策のなかに積極的な意義を認めていたのに対して、スターリンやモロトフにとっては、「新コース」は農民の不満の捌け口を一定程度容認することであり、農民の要求への譲歩には限度があることを仄めかしていた。たとえばスターリンは、「新しい時代、農民の時代が来た」という人々、「話がすぎて政治的ネツプにまで議論が及ぶ」人々からきっぱりとみずからを区別した。<sup>261)</sup> 後者の「政治的ネツプ」への言及が決して偶然のものではなかったこと

は、まもなくスターリン自身が明らかにすることになる。彼は、同年12月の第14回党大会においても、「ネップの拡大」に反対であることを公言した。<sup>262)</sup>

スターリンは1925年の改選の結果を深刻に受けとめた。彼は、5月、第14回党協議会を総括する際に、改選が「**中農が貧農に対抗してクラークの側に立っている**という疑う余地のない事実」を明らかにしたと強調した。モロトフは、これをうけて、中央委員会農村活動部での「3カ月の活動」<sup>263)</sup>のあと、「貧農グループの組織化」という新しい課題を提起し、10月総会の決議においてスローガンとして打ちだした。<sup>264)</sup>

1925年冬春の再選挙の次に実施された定例の選挙が、これまで何度も言及した1925/26年秋冬の選挙であった。このキャンペーンにおいては、前回の選挙キャンペーンで見られた農村コムニストの狼狽が克服されて党指導が著しく強化されたと総括された。<sup>265)</sup>

1924-25年におこった後退をその後党が取り返す過程において、1926年3月15日の中央委員会組織局におけるスターリンの発言は重要な意義をもっていた。スターリンがそこで批判の俎上に乗せたのは、1925年10月13日に全ロシア中央執行委員会によって承認された村ソヴェト選挙訓令(ロシア共和国)であった。この訓令は、1924-25年の全般的な情勢を反映して、農村の市場関係の積極的な担い手に対して選挙権を広汎に認めていた。補助的な農業労働者を雇用しているもの(現行の雇用規則を守っていることを条件とする)、製粉所、脱穀機、搾油所、鍛冶場などを所有あるいは賃借しているもの、1名の労働者あるいは2名の徒弟をこえない従業者をもつすべてのクスターリ、手工業者一般、第1種パテントを交付されているもの(行商)は、選挙権を奪われないというのがそれであった。<sup>266)</sup>それは、1925年1月の村ソヴェト選挙訓令(ソ連)よりも広い範囲の人々に選挙権をあたえた。

スターリンは、この規定が、利潤をえる目的

で労働者を雇用するもの、私的商人と商業的仲介者に選挙権、被選挙権をあたえないとした憲法に違反していると指摘した。——「全ロシア中央執行委員会と司法人民委員部のユリスト」は、憲法ではなく、人民委員会議の雇用労働に関する臨時規則\*を利用し、全ロシア中央執行委員会の許可をえて、「こそこそ『自らの』活動をおこない」、「『自由主義的な』歩を進める決心をしている」。われわれは、「農民に対する経済的性格の若干の譲歩をした」が、彼ら司法のエキスパートは、それにもとづいて「搾取者階級の政治的権利」を拡大しなければならない、と主張している。これは、「**経済的ネップが政治的ネップを必ずともなわなければならない**」と考えているメンシェヴィキのものである。<sup>267)</sup>スターリンは、このように激しく非難した。このスターリンの発言は、「1925年」の終わりを象徴していた。

\*1925年4月18日付。農業経営における他人労働力の雇用を条件付きで認めたもの。しかしこの臨時規則は同年5月20日に第3回ソ連ソヴェト大会で承認されて、立法となっていた。

1926年7月の中央委員会・中央統制委員会合同総会は、それまでの農民への譲歩からきっぱりと攻勢に転じることを宣言した。それは「党路線に矛盾する後退」を非難した。「選挙権被剥奪者の数を減らしたことが誤りであることを、より決定的に強調する必要がある」と厳しく方針を設定し、力点が選挙権剥奪の分野に移されることを明言した。<sup>268)</sup>

それだけではなかった。1926年11月4日の選挙訓令<sup>269)</sup>には、新しい憲法解釈が示された。1918年憲法も、1925年憲法も、利潤目的に労働者を雇用しているもの、非勤労所得によって生活しているもの、商人、聖職者らを選挙権被剥奪者と規定していたが、この新しい選挙訓令(第14条)によれば、憲法は、利潤目的に労働者を「雇用していたか、あるいは現在雇用している」もの、非勤労所得によって「生活していたか、あるいは現在生活している」もの、商業に「従事していたか、あるいは現在従

事している」もの、「選挙時までの階級の状態からして、あるいは過去の活動からして」憲法の規定によって選挙権被剥奪者と認められていたその他のもの、がそれであると規定しているとされた。これは明らかに憲法の拡大解釈であった。

厄介なことに、新しい訓令(第15条)は、この憲法の規定を具体化する際には、以下すべて「している」ものと現在形でその該当条件を規定しており、第14条との関係は明白ではなかった。しかもその具体例は、規定が煩雑で(本稿では詳細を省かざるをえない)、現実的な適用には恣意的な判断が混入することが避けられなかった。それによれば、労働者を雇用している経営、農業に従事する以外に、労働者を使って農産物加工工場(製粉所、挽き割り所、搾油所など)を賃借あるいは所有している経営、農業に従事する以外に家畜や農産物等の買い占め、転売に従事するもの、恒常的に労働者を雇用するクスターリ、工業企業の所有者と賃貸者、私的商人等々が選挙権被剥奪者となった。この変化を反映して、1926年11月4日の選挙訓令においては、前年10月の訓令で選挙権剥奪の対象とされなかった人々の多くの部分が、今度は、選挙被剥奪者となった。それは、実に、1929年5月の有名な「クラークの指標」<sup>270)</sup>の先駆けとなった。

この新しい選挙訓令の精神を直接につくりだした1926年7月の中央委員会・中央統制委員会合同総会において、モロトフは、この間、村ソヴェト員のなかのバトラーク(共同体にとっては他所者であることに注意)、馬なし農(貧農)の割合が減少しつつあること、選挙権被剥奪者の数がわずかであるが減少していることに警鐘を鳴らした。<sup>271)</sup> 総会決議は、モロトフ報告にもとづいて、都市でも農村でも「ブルジョア分子が若干増加している」にもかかわらず、選挙権剥奪を縮小し、選挙権を拡大したことを誤りであったと強調しなければならないと認めた。<sup>272)</sup> さらにモロトフは、1927年1月27日の報告のなかで、これまでの選挙(複数)で

は、「憲法の拡大解釈という意味で」多くの誤りを犯し、連邦平均で3~4%のクラークがいるのに、農村では1%しか選挙権を剥奪しなかった。「選挙権剥奪は今年の改選キャンペーンでは多くなるだろう」。その割合は最大で6~7%に達するだろう、しかしその数字は例外的なケースだろう、として限界の数字を示した。<sup>273)</sup> モロトフの最後の報告は、ソヴェト選挙の進行中になされたものであったが、選挙権剥奪の現状に対する批判をふくんでいなかった。

1926年の政策転換の結果、1927年選挙キャンペーンにおける農村の選挙権被剥奪者の数は、1926年の1.1%から1927年の3.3%へ3倍に急増した。<sup>274)</sup> しかし、1927年2月はじめのキシリョーフの報告によれば、選挙の準備キャンペーンにおいて、地方都市や都市型集落では、選挙権被剥奪者の割合は選挙人の20%ないし50%に達するという出来事が発生した。<sup>275)</sup> この非難には、事実を擁護するような論文がつづいた。そのような村では以前から選挙権被剥奪者の割合が高かったという趣旨である。<sup>276)</sup> しかし、状況は明らかに異常であった。3月にも、ペンザ県モクシャン郷ケラ村では、非合法集会を開いたとして村の半数の選挙人が選挙権を剥奪された。ヤロスラヴリ県ノルスカヤ郷のひとつの村の選挙委員会は全村に選挙権剥奪の措置を適用した。<sup>277)</sup>

この極端な実例の周辺には、それに類した多数の剥奪のケースがあった。その多くは、農業やクスターリ工業での雇用が常雇か臨時雇かを問わなかったこと、剥奪の該当者の家族がふくまれたこと、政治的な過去の履歴に関するものなど、規定の拡大解釈によるものが主なものであった。選挙権被剥奪者のなかには「トロキズム」に言及したものがいた。選挙委員会が、「新しい訓令を理解できなかった、あるいは、何としてでも、『選挙権被剥奪者』の数を昨年より増加させようとした」という指摘はこの年の選挙の特質を物語っている。<sup>278)</sup>

この「いきすぎ」が党の主導でおこったこと

は明らかである。ドン管区アゾフ地区の農民は『貧農』紙に次のように書き送った。彼が、選挙集会で不法な選挙権の剥奪がおこなわれていると指摘しようとする、集会の議長は発言を禁じ、「集会でそれを語ってはならない。それは『秘密』事項である。それを語るのは私だけであり、しかも党のラインでの報告においてだけである」と後日語った。<sup>279)</sup>

この1927年選挙キャンペーンの出来事は、1928年に非常措置が適用される以前の社会においても、党の系列では、指示が末端で一挙に、大規模に展開される構造が存在することを示した。下部のこうした突然の跳ね上がりは、スターリンの次の指摘の実例とするにふさわしい。彼は、1925年12月の第14回党大会において語った。「党はどちらをより多くやろうとしているか、クラークを裸にすることか、それともそうしないで、中農との同盟に進むことか、という質問をコムニストに出してみたら、私は100人のコムニストのうち99人までが、党は、クラークをうてというスローガンに対して、最も多く準備ができていると答えるだろうと思う。ちょっとやらせてみたまえ、そうすれば、一瞬にしてクラークを丸裸にするだろう」。<sup>280)</sup>

実際、村ソヴェト選挙では70%もの村ソヴェト員を貧農がしめる村ソヴェトが生まれる、という「1925年」への急激な反動が生じた。キセリョーフは、「農民の基本的大衆」としての「中農はどこへ消えてしまったのか」と、強い表現を用いた。<sup>281)</sup> ほとんどすべての中農から選挙権を剥奪するという村(サマーラ県)があらわれた。「中農に活動を許さない」ためにそれがおこなわれているとリャザン県の1郷の農民が解釈しているとオ・ゲ・ペ・ウの報告は伝えた。<sup>282)</sup> ポリシャコーフは、村選挙委員会が計1000人の選挙権を剥奪したが、うち700人については根拠がなかったという1地区に注目した。<sup>283)</sup>

オ・ゲ・ペ・ウの資料は、選挙権の剥奪を担当する選挙委員会に貧農(訓令がよく理解でき

ないものがふくまれた)が登用されたことを示唆しており、<sup>284)</sup> 全体として貧農が意図的に動員されたことを示している。たとえば「排他的に貧農の村ソヴェト」をつくるという「多くの村」での問題提起(サマーラ県<sup>285)</sup>)は、決して農村から出てくるものではない。それは、「1925年」への反動を意図的に狙ったモロトフらの中央の意図が末端で拡大されて反映したものである。それは、オ・ゲ・ペ・ウの表現によれば、「貧農委員会的偏向」であった。中央委員会書記のコシオールは、1927年2月、選挙で「強制的に、あるいは様々な『手品』を使って、提案や候補者を無理強いする」ことを非難し、農民の批判を恐れてはならないと書いたが、それは、1924-1925年と同様の状況が生まれていることを示していた。<sup>286)</sup>

1927年2月の中央委員会総会でこの問題を指導したのはカーニンであった。ソヴェト選挙に関する党中央の主役がこの段階ではモロトフからカーニンに移ったことが示された。カーニンは、「中農が選挙権被剥奪者のカテゴリーに入るという訓令の拡大解釈」を非難して、中農をソヴェトから斥けることは最大の政治的誤りであると述べた。<sup>287)</sup> 彼がここで使った「拡大解釈」の語がモロトフと同じで、しかも逆の文脈で用いられていることに注目しなければならない。

2月総会決議の公表をうけて、『貧農』紙2月16日号は、ソヴェト選挙における選挙権剥奪に焦点をあてた。それは、様々な不当な選挙権剥奪の実例を紹介しながら、われわれが着目した訓令の選挙権剥奪の規定に論及した。「革命前」、「12年前」等に商業に従事していたという理由で選挙権を剥奪したのは訓令第14条によるものだとして正当にも指摘したが、これは、訓令の解釈の誤りであり、訓令が「クラーク、商人、搾取者」を対象にしているという根本的な目的を忘れており、憲法解釈にまで問題が広がることを明らかに避けた。農民が『貧農』紙に寄せた多数の手紙によれば、選挙委員会は選挙権被剥奪者のリストを「秘密裏に」作

成し、地方党組織は、選挙委員会の活動に対するいかなる批判も許さなかった。それは農民の眼前で党の信用を貶めた。2月14日の全ロシア中央執行委員会の通達によれば、誤った選挙権剥奪の対象となったのは、勤労農民、クスターリと農村教師であった。<sup>288)</sup>

1928年のソヴェト選挙は実施されなかった。多数の他のキャンペーンが時期的に重複したからであるが、<sup>288-a)</sup>(次節を参照)それは、ソヴェト選挙が二義的な地位をあたえられていたことを物語るものであろう。

1929年の村ソヴェト選挙は、貧農、パトラク的構成の強化がつづけられた。そのなかで、村ソヴェト員の文化的水準の低下が危惧されたこと、女性の進出が急激に高まったこと、それらが1929年選挙の人為的な性格を物語っていたことはすでに論じた(本稿(1)9頁)。しかし1928年の穀物調達をはじめとする一連のキャンペーンは、村ソヴェトの変質過程に新しい特徴をあたえた。それは村ソヴェトの歴史にとっても新しい段階であった。

### 補論 選挙参加率について

一般的にいえば、1920年代のソヴェト選挙の参加人数や参加率の公表されたデータは、あまりにも頼りない。第3表(65頁)にそれを掲げたのも論述上の便宜のためであり、数字には本質的に不安がつきまどっている。簡単に説明を加えておく。

第1に、この分野では数字の捏造がもっともおこりやすかった。その原因は様々であった。1923年選挙に関するチュグノーフの指摘によれば、選挙の現場では、プロトコルには正確な数字は記されず、「100人」、「200人」などという曖昧な数字が記載されていた。<sup>289)</sup>彼のこの主張は一貫しており、集会を軽んじる公的態度の根の深さを、明らかに印象づけようとしている。<sup>290)</sup>それにくわえて、1924年選挙については、大きな法的根拠をあたえるために、そして2度目の集会を開く必要がないように、投票者の数字がプロトコルで水増しされたと頻

繁に報告された。<sup>291)</sup>

本節で考察されるすべての状況を念頭におくならば、オシプ・チュルノーフ——彼は、ニジニ・ノヴゴロド県での滞在の途中、1月5-7日に、モスクワの中央執行委員会幹部会のソヴェト建設会議を傍聴した——の観察が、1920年代前半のソヴェト選挙の実態の多くを語っていると思われる。彼は、ソヴェト建設会議の全体の印象を記した貴重な文章のなかで、多くの地方で70-80%の参加率があったといわれたが、それを再調査すると実際には20-30%であった、それは、下部機関が上部機関に対して「万事良好」と報告した結果であった、と指摘した。<sup>292)</sup>ニジニ・ノヴゴロドに戻った彼は、セミョーノフ郡の平均出席率98%という数字を見せられた。しかし関係者全員が「10-20%で、それ以上ではない」と口をそろえた。チュルノーフは、「すぐるソヴェト選挙はどこでも終了した。それは、ただ選挙の体裁プロフォルムだったのであり選挙ではなかった」と記した。<sup>293)</sup>

その後も不安な事実が語られた。モロトフは、1926年3月15日の党中央委員会組織局会議において、「実際よりも事態をよく見せる」「わが地方組織の一般的傾向」と、これを概括した。それは、「決議でこう語られているから、こうなっている」とする「公式的なオプティミズム」プロフォルムとも指摘されている。<sup>294)</sup>1926年のウクライナ共産党中央委員会で、或る発言者は「私が個人的に話した地方の同志は、50%と書かれているところは10%と読め、とっている」と述べた。<sup>295)</sup>

そればかりでなく、1925/26年度の選挙については出席への強制が加えられたことが確認できる。選挙への参加には高い「義務的ミニマム」の数字が課せられた。1925/26年度には、クリミアでは75%、スモレンスク県では50%、ブリャンスク県では100%、トヴェーリ県では50%など。選挙集会には村執行人が村を駆け回って人を召集し、参加しないと監獄に放り込まれるとか、罰金が科せられるといった脅迫がおこなわれた(スモレンスク県)。<sup>296)</sup>こ

の年の選挙は「もっとも民主的」と呼ばれた選挙であったことに注意しなければならない。

第2に、集会の出席者は必ずしも投票者を意味しなかった。選挙集会の最初に出席していた選挙人が途中、次々と退席することがまれではなかった。参加者を増やすために、鐘楼の鐘を鳴らし、村執行人が家を巡回し、通りにいる農夫をつかまえて(家には農婦がいるのに)参加者を確保しても、退屈な報告や、あらかじめ立てられた立候補者に失望、あるいは立腹して退席するものは後を絶たなかった。1926-27年選挙を厳しく見つめたヴァトカ県ヤランスク郡からの報告は、各村ソヴェトによって、「選挙に参加した選挙人の割合」が、下は39%、上は58%といているが、「この39%という数字も、58%という数字も、決定的に、いかなることをも語っていない」と批判した。<sup>297)</sup>

第3に、それに関連して、出席率の定義がしばしば明確ではなかった。第1章補論で触れたように、農村では1農家をひとりの男性戸主(大黒柱、髭男)が代表する(「1人が全員の代わりに」«один за всех»)という伝統が著しく強固であった。これは当時「農戸代表制」(дворовое представительство)と称された。女性は、寡婦や、出稼ぎなどにより夫不在の農婦以外、集会に出席することはまれであった。しかも、1農家から複数人が出席することはきわめてまれであった。<sup>298)</sup>もとより、選挙集会の参加率は、選挙人に対する割合であるから、参加者を農戸代表者とみなして戸数に対する割合をとると、その割合は当然にして高くなった。<sup>299)</sup>ヴォローネジ県ウスマニ郡ヴェルフニャヤ・ハーヴァ郷ではその概数が報告されている。選挙集会参加率は選挙人全員に対する割合では30%であったが、戸主として数えると80%となった。<sup>300)</sup>

1925年2月にヴォローネジ県執行委員会が中央執行委員会に送った文書によれば、個人別の通知制度が採用されるまでは、農家からの代表者が選挙に参加していた。<sup>301)</sup>したがって、1925年以前の選挙参加率は、一様に過大評価

されていたと考えてよいであろう。

ソ連当局は、1925年度再選挙では、通知方法を改良し、選挙権を有する各個人に前もって「名前入りの」通知を送るシステムを導入した。このとき農戸代表制と対抗することが意図されていたのは事実である。<sup>302)</sup>しかしはじめて導入された1925年には、個人通知のシステムに大きな政策的力点が置かれておらず、実際にどの程度普及したかも疑わしい。その手渡しには多くの技術的不備が認められ、配布の労働には、ピオネールや信頼のないコムソモール員が利用された。<sup>303)</sup>

しかし、通知を実際に受けとった農民は、これを何か義務的な性格をもった呼び出しだと理解し、「コムニストが何か新しいことを思いついて、通知を送っている。何が何でも集会にいかないと、罰金をとられるか、責任を問われることになる」と考えるケースがまれではなかった。それが集会出席を促す要因として作用した。これはイルクーツク県執行委員会の報告であるが、この状況は他の地方でも十分にありうるといってよいであろう。<sup>304)</sup>

この制度に強い注目が集められたのは2年後の1927年初頭のことであり、このとき個人通知のシステムは農戸代表制の克服の手段と明確に規定された。<sup>305)</sup>それとともに興味深い事態が起こった。伝統を克服しようとする手段が伝統と混じり合った。農夫が、妻と息子に選挙権があると知ると、彼は3通の通知をもってあらわれ、3人分の選挙権を要求したのである。そればかりではなかった。そこへさらに権力側の利益が重なった。「ところがときにわが選挙委員会は、この通知カードを肯定的に考慮し、統計は、これこれの女性が選挙に『いた』と指摘している」。<sup>306)</sup>

クセノフロントフは、男性戸主が家族の複数人分の選挙権を要求するという事実を「村ソヴェト選挙にいったことのあるものは全員が知っている」と書いた。<sup>307)</sup>同様の、重要な事実が、1929年選挙キャンペーン向けの全連邦会議(1928年10月10日)のなかで語られた。発

言者は、党中央委員会女性労働者部アルチューヒナ(Артюхина)である。「昨年、多くの地方で、生身の農婦が選挙に出席していなくても、彼らに代わって通知を『家長』がもってくれば、選挙委員会は集会を合法的だと見なしたことをわれわれは知っている」。<sup>308)</sup>

いいかえれば、1920年代の村ソヴェト選挙において、第1に、女性の投票は、現実的にはおこなわれていなくても、家長によって代理の投票がおこなわれていれば、女性の投票と見なされていたこと、したがって第2には、たとえ女性票が形式的に存在していても、それは、女性の意見を反映していなかったことが示されているのである。

以上のすべての要因が、同じ方向のベクトルをもつ上方バイアスとして作用した。なお、採決の仕方の技術的な問題(挙手された手の数を数えられない、あるいは保留をどう扱うか等々)も重要な問題であったが、それらについては省略する。

## 八 調達キャンペーン下の村ソヴェト

### 1. 1928年キャンペーンと全権システム

1927年秋から穀物調達危機が発生すると、その克服のために、同年末から穀物供出を促すキャンペーンが開始された。同時に、農村には余剰購買力が存在するという現状認識にもとづいて、それを奪えば、貨幣をもとめて農民は穀物売るだろうと考えられた。そのために、穀物調達キャンペーンと並行して、自己課税、農民公債割当、未納金の支払いなどのキャンペーンが実行に移された。いいかえれば、農村は穀物とカネの両方における収奪の対象となった。問題は緊急の解決を要したため(たとえば穀物輸出は1927年12月にはほとんどゼロとなった)、キャンペーンは党の全面的な主導のもとに開始された。1927年末から翌年初頭にかけての重要な指示は、党中央委員会や政治局、あるいはスターリンの名前で内密に電報で直接に地方委員会に伝えられた。地方の党员が、「指

令は『ソヴェトのライン』ではなく、スターリンの署名入りで『党のライン』で来ている」と、<sup>309)</sup>と語ったことは全体を象徴している。

1928-29年の短い期間を分析すると、このとき1930年代初頭の基本的な特徴がほとんどすべて出現したことがわかる。村ソヴェトは、穀物調達などのキャンペーンの遂行に、そして1929年末からは集団化のキャンペーンに従属した。諸種のキャンペーンの遂行を任務とする全権も上級機関から下部機関に派遣され、まもなくそれはシステムとなった\*。「システム」とは、すべての地方のすべての村ソヴェトに対して、あらゆる機会をとらえて、全権を派遣することを意味する。

\*全権のシステムは、いうまでもなく、溪谷謙氏の研究におけるひとつの中核を占めるテーマである。同氏は、4巻で完結した大作をあらわす当初、1928年については、全権のシステムを全く念頭においていなかった(私は、その後、自分の著作やいくつかの論文で簡単にその点を指摘したので、ここではくりかえさない)。氏自身は、2000年頃からはじまった新資料の公表におそらく触発されて、遺著『上からの革命』(2002年)で、上述のキャンペーン向けの全権の出現時期を1928年初頭と明確に設定した。本稿では、この問題は、村ソヴェトについて、しかも1928年を中心に必要と見なされる限りで考察される。1929-30年以降、この問題に関する資料は、公表されたものをふくめて急激に膨大な量にふくれあがる。全国画一に、しかも全面的にそのシステムが適用されたからである。しかし、本稿では後者の時期は基本的には対象の外におかれている。

1928年1月-3月、まさに穀物調達、自己課税、農民公債割当等のキャンペーンの時期と重なって、全国(ロシア共和国)規模での部会の「コントロール」(大量点検)が実施された。5月23日の『イズヴェスチヤ』には、その結果に関する全ロシア中央執行委員会幹部会の決定が公表された。それは、部会が各種の最も重要なキャンペーンの参加へと動員されることはなかった、と全面的に認めた。

この決定が公表された頃、5月22日から28日にかけて、大衆活動の大量点検の結果を討議する地方執行委員会組織部長会議が同じく全ロシア中央執行委員会で開催された。会議全体の指導者キセリョーフの発言は、その時期の全般的な情勢を要約していた。「何よりもまず、多くの地方機関——県ばかりでなく、地方と州の機関でさえ——が大衆活動に関心をもっていないとわかった」。<sup>310)</sup> それは、情勢の全般的な変化を背景としていた。

席上、サマール州執行委員会議長は、大衆活動がなかった原因を次のように強調した。——第1は、党中央委員会が、たとえば穀物調達キャンペーンにおいて、最短期間に転換を要求したことである。そのため、部会から村ソヴェト会議へ、村ソヴェトからスホードへという審議の順序を踏むことはできなかった。「したがって地方へ来る全権は、穀物調達やその他の方策の問題を直接にスホードで、村ソヴェトで提起した」。最近半年の間に部会の活動は、以前との変化は全くなく（それは、農民が存在を知らないというほどひどい状況にあった）、他方、スホードと村ソヴェトの会議とその参加者は2倍になった。<sup>311)</sup> シベリア代表のポチカリョーフは、集会の形態変化を指摘した。それまで想定されていた部会を中心とする村ソヴェトの大衆活動にかわって、その拡大会議や諸種の会議（貧農集会、女性集会、代議員会議など、周辺の諸力を召集した会議）と村の総会（スホード）が、キャンペーンへの農民の動員のために組織された<sup>312)</sup>（本稿(1)12頁をも参照）。

第2に、農民公債の割当、自己課税の実施の本質は、「農民からカネを取りあげること（изъятие денешек）」にある。カネを取りあげられる当の農民の中で大衆活動を展開することがたやすいことであろうか、とサマール州執行委員会議長は単刀直入に疑問を提起した。<sup>313)</sup> 農民的組織は、自分たちの利益に反するキャンペーンには行動を起こさなかった、したがって村ソヴェトより上部の組織からコムニストが全

権の形で投入された、と彼は主張した。

第2の点に関連して、同会議でモスクワ市ソヴェトを代表して報告したゴルヂューエフの指摘を第3の要因としてあげることができる。彼は、モスクワ県では「農村のアクチーフの50%は、『書類上の』アクチーフである」と断定した。この場合のアクチーフとは、村ソヴェトとその周辺に集まったそのことであり、キャンペーンへの対処能力が念頭におかれていた。つづけて彼は、モスクワ県では大衆活動がないからであって、他の県では事情は異なるという人がいれば、「申し訳ないが、それは非常に疑わしく、信じられない」と述べた。<sup>314)</sup> こうして、権力を末端で積極的に支える層自体が非常に薄いことが第3の要因であった。ゴルヂューエフは、キャンペーンの遂行が不首尾な村ソヴェトでは、大衆活動がなく、農民アクチーフが動員されておらず、議長一人だけが働いているとくりかえして述べた。<sup>315)</sup>

最後の点は、1928年4月25日に、共産主義アカデミー・ソヴェト建設研究所における全ロシア中央執行委員会のエム・ボルドイレフ報告の主要な論点のひとつであった。ボルドイレフは、穀物調達を含む多数のキャンペーンにおいて、議長以外のすべての村ソヴェト員はキャンペーンに対して責任を感じておらず、村ソヴェトが機能していなかったことを強調した。<sup>316)</sup> われわれがすでに冒頭から強調したように、それは、村ソヴェトそのものの構造的な問題であった。

キセリョーフは、村ソヴェトをはじめとする下級ソヴェト機関が穀物調達、公債割当、自己課税などのキャンペーンを処理する力をもっていなかったゆえに、全権、トロイカという名称の、外部からの派遣者の介入が必然化された、と最初の転換の時期を総括した。<sup>317)</sup> 「トロイカ」とは、この会議における北カフカーズの代表によれば、地区から来た「同志」と党細胞書記、および、この2人に従属する村ソヴェト議長の3名であり、彼らはソヴェトの大衆活動を無視して、各種の集会を組織した。<sup>318)</sup> 同

様にして、会議では、「特別全権の派遣とトロイカの創出」によってはじめて下部組織に「発破をかける」ことができた、とタタール共和国の代表者が指摘した。<sup>319)</sup>

シベリアの代表レシチコフは、他の発言者と全く同じ方法で「全権システム」の発生を理由を説明したあと、それが「シベリアで地方執行委員会から村ソヴェトにいたるまで、活動したのはこの全権であった」と述べた。彼は、「他の州で全権のシステムがあったかどうか、知らない」とも発言しており、<sup>320)</sup> それは各地方に緊急に組織されたものと見られる。西シベリア地方執行委員会の機関誌『ソヴェトの歩哨に立って』は、1930年6月の号で「2年前に」、全権を通じた地区執行委員会の活動が総括されたと回顧した\*。村ソヴェトにあらわれた全権は、地区執行委員会(あるいはそれより上級の執行委員会)の全権という名前のもとで行動していたが、前述のように、彼らは各地方の党組織の指示のもとで派遣されたものである。

\* 同誌は、1931年8月の号でも、全権のシステムが下部ソヴェトの装置を指導するほとんど唯一の形態になって「ほとんど3年経った」と回顧した。<sup>321)</sup> なお、全ロシア中央執行委員会機関誌『ソヴェト権力』は、1931年4月の号で、その「システム」が1928年に発生したとするイ・ハマルメル(西シベリア地方執行委員会)の論文を掲載した。<sup>322)</sup>

シベリア地方執行委員会は、1928年前半の全ロシア中央執行委員会への報告のなかで、全権のシステムは、「ソヴェトの活動を戦闘的なルールに切り替える必要性」によって引き起こされたものであったとして、その肯定面と否定面を指摘した。肯定面は、地区執行委員会は、全権を派遣することによって、「指導、教示(инструктаж)、統制」を実行しており、また村ソヴェトの活動を活発化したことである。否定面は、村ソヴェトに出向いた全権が、しばしば、指導員、相談相手、情報提供者の役割だけでなく、直接的な「執行者」の役割をも引き受けたことであった。したがって彼は、村ソヴェ

トを指導、強化せずに、それを弱体化させ、それにとってかわった。<sup>323)</sup> 「執行者」とは、文字通りの意味であった。全権の活動の基本は、村ソヴェト員や貧農・パトラークを村ソヴェトの会議を召集し、目的の遂行に動員することであったが、ときには、直接に農家を巡回して穀物を探索した。

全権システムを非難した1931年の論文は(いかえれば、全権は、3年後には、いっそう農民に対する直接的な弾圧の主体として登場していた)、それが必然化された重要な一因として、村ソヴェトの上級単位としての、かつての郷がその後の地区よりも小規模であったことをあげた。1927年に新しい行政単位である管区が導入されるまでは、郷執行委員会は郷内の村に近く位置し、郷の職員は、一日の仕事のあとに村へ往復することによって、労働体系を維持したままで村ソヴェトとの生きた関係を維持することができた。さらに、村ソヴェトの報告を郷執行委員会で頻繁に聴取することができた。ところが郷の大規模化はそれを妨げた、という主旨である。<sup>324)</sup>

しかし、すでに論じたように(本稿(1)、20-21頁)、この主張は、現実を批判するための過去の美化であり、正しくない。1920年代の分析は、郷執行委員会と村ソヴェトとの関係が「郷執行委員会ではなく、主として村ソヴェトの努力のおかげで」成立していたことを示していた。<sup>325)</sup> 論文の筆者が賞賛した、村へ郷執行委員会が出かける出張会議(выездные заседания)にいたっては、「困難で、カネがかかるために」1村ソヴェトあたり何年かに1度も期待できないだろうと見なされていた。<sup>326)</sup>

実際には、郷から進んで村ソヴェトを調査し、指導するという関係がそもそも著しく希薄であるか、欠如していたために、郷が、上から下りてきた重大な、急を要するキャンペーンを村ソヴェトに対して遂行を指示しなければならないときに、その遂行能力のない村ソヴェトに直接に代表者を派遣しなければならなかったのである。

『ソヴェトの歩哨に立って』誌の1928年10月号は、全権の興味深い行動を伝えている。クラスノヤルスク管区カンスク地区執行委員会全権は、村ソヴェトに着くと「義務的決定」(обязательное постановление)を採択するよう議長に指示した。<sup>327)</sup> 義務的決定とは、1928年3月5日の全ロシア中央執行委員会幹部会の決定によって、村ソヴェトに新しく与えられた権利である。このとき、それまで郷(地区)執行委員会に認められていた義務的決定を出す権利が、「経済的に強く、人口の多い村の村ソヴェト」にも与えられた。それは、衛生、防火、採草地や播種地、農作物の保護の分野を対象としており、その違反に対しては、1ルーブリ以内の罰金を科す権利が認められていた。<sup>328)</sup>

この権利は、県以上の執行委員会によって各村ソヴェトに対して認められたのであるが、この規定が全権によって拡大解釈されて、キャンペーン遂行のための彼の行為が正当化された。農村にあらわれた全権は、その活動の正当性を主張するために、その活動の期間中、農村の大衆的権力機関と位置づけられていた村ソヴェトにとってかわったのである。

最後に、農村へ派遣された全権の活動は有給であった。1928年の段階では、全権の派遣の規模がのちの時期に比べてまだ小さかったために、具体的な資料を見出すことができなかったが、1930年春のヴォルガ中流の例では、その活動地では、月100ルーブリの給料に加えて、月75ルーブリの出張費を支給されていた。<sup>329)</sup> この問題は1929年末以降、派遣される全権の数が急増し、その滞在期間が長くなるにつれて(しかしそれはたかだか数ヵ月であり、長期にわたることは決してなかった)深刻となり、その費用が高価にすぎるといふ有力な主張を生むことになる。いいかえれば、村ソヴェト員の待遇の改善、常任の指導員の派遣など、下級ソヴェト機関そのものの改革が必要なときに、それに必要な費用と、全権という臨時のシステムが要求する費用とが比較されるにいたる。

この議論は、農村に派遣された全権が、その

恣意と権力的行為によって既存のソヴェト体制を揺るがせ、それにとっかわることがあってはならないという原則論とともに、まもなくそれへの批判の論拠とされることになるであろう。

1928年のキャンペーンの強行とともに構造的に揺るいだのは村ソヴェトだけではなく、村ソヴェトの上部組織である郷(地区)執行委員会もそうであった。上から下ろされた課題を遂行する能力を十分にもたない郷執行委員会へは、その上部組織である郡執行委員会から多くのカードルが投入された。上から下への指令体制を早急に確立するためには、まずカードルがその下部の組織に下りて、指示の遂行を直接に徹底させることが最も手取り早い方法であった。旧スターリングラード県では穀物調達キャンペーン時に、各郡執行委員会から20人ずつ郷に活動家が投入された。派遣された活動家は「特定の、目に見える結果がえられるまで」、「仕事が動きはじまるまで」郷にとどまり、郡執行委員会の特別な許可がえられなければ戻る権利をもたなかった。<sup>330)</sup> (農業集団化において地区へ派遣された全権の場合には、キャンペーン遂行の能力のない地区執行委員会の廃絶でさえ辞さなかった。)<sup>331)</sup>

大きな注目を集めたボルドイレフの報告(前述86頁参照)の重要な部分を引用しよう。「下部のソヴェトの装置は、穏やかにいえば、やや保守的であった。道を一度踏みならしただけで、この道から外れないようにして、そこをゆっくり進んでいる…。われわれがおこなったすべての転換は、下部ソヴェト装置から最も強い抵抗を受けている。…いたるところで、無為、受動性等々が見られる。臆病、恐れのようなものがすべての装置を支配している。下部の装置は、人生のあらゆる場合の助言となるような指示を待っている」。<sup>332)</sup> ボルドイレフはスターリングラード県の郷執行委員会を念頭においていたが、それは、他の県のそれにも、さらに村ソヴェトが統合によって官僚的組織に転化した場合にはその村ソヴェトにも、あてはまる

ものであった。

## 2. 村ソヴェト議長の辞任

穀物調達や自己課税、国債の割当という、「上から」のキャンペーンがはじまった1928年以降、多くの村ソヴェトは大きな試練のときを迎えた。彼らの或るものは、命令を文字通りに遂行し、穀物の摘発（農家の家宅搜索、バザールでの摘発など）に従事し、村の農民の反発を招いた。しかし別のものは上位機関の要求の前で狼狽し、また別のものは、党・ソヴェトの方策に抵抗さえした。そもそも村ソヴェト員自身が農民であり、彼らも供出義務を負わなければならないのであった。村ソヴェトは、その基本的な形態ばかりでなく、統合された形態においてさえ、議長がその村の農民であるという事実によって、あるいは場合によっては、周辺の農民との関係によって、「農民的」要因を含んでいた。キャンペーンを遂行する過程で、村ソヴェト議長の動揺が顕著になった。これは、集団化の時代に直接に接続する状況のはじまりであった。

1928年5月の全ロシア会議に登場した、前述のモスクワ市ソヴェトのゴルデーエフは、自己課税や国債の割当における「党の階級路線」を村ソヴェト議長一人で遂行する困難について詳しく語った。大衆活動がないために、貧農・バトラークのアクチーフが村ソヴェトに組織されていない。「議長がたった一人で働いている」村ソヴェトは、モスクワ県だけではなく、多分、ソ連全体にある。このような議長は、非常に頻繁に郷執行委員会や郡執行委員会にあらわれてこういつている。「働くのはとても難しい。辞めなければならない。給料25ルーブリを払ってくれ。私の仕事のせいで、イヴァン・イワーノヴィチも敵になるだろう。イヴァン・ニキーフォロヴィチもそうなるだろう」、「働くのが怖い。こんなに敵をもちたくない」。ゴルデーエフは、このような現象はモスクワ県だけではなく、他の地方でもあるだろう、と述べた。<sup>333)</sup>

『イズヴェスチヤ』1928年9月20日号には、その結末を書いたモスクワ県の村ソヴェト議長の論文が掲載されている。階級路線の遂行が要求された自己課税のキャンペーンにおいて抵抗があり、県の100以上の村において、議長や村ソヴェト員が活発に敵対した。「様々な口実で村ソヴェト議長が仕事を捨てつつある」。県全体の2640の村ソヴェトにおいて、1740人の議長および村ソヴェト員が離れ、エゴリエフスキー郡では、30%の議長が去って、10.6%は選挙人によってリコールされた\*。ヴォロコラムスク郡では、「逃亡」は大量的な性格をもった。ドミートロフ郡ロガチェフスカヤ郷では26人の議長のうち、19人が去り、残りのものはその申請を出していた。「エゴリエフスキー郡では16の村ソヴェトが、紛うかたなく、どこかへ消えてしまった」。「職を捨てたものが申し出た理由が言い訳にすぎないことは明らかである。実際には、その理由は、最近のキャンペーンの関係で農村の富裕層、クラーク層との争いを恐れたことにある」。

\*「ソヴェト民主主義の最も重要な形態のひとつ」とされたリコールについて、後述90-91頁の本文注を参照。

階級原則にもとづく自己課税のキャンペーンに対する抵抗（均等的配分への志向）は、農村の共同体的な関係の存在を前提としている。「クラーク」と争いたくないという動機は、当時、その他にも数多く記録されているが、<sup>334)</sup>「クラーク」の語は権力者の言葉である。モスクワ県2郷の調査結果の報告者は、「大半の」村ソヴェトで、「罰金を科すことはできない、とても多くの敵をつくってしまう」と主張する農民の言葉を、「善隣関係(добрососедские отношения)を壊したくない」と、正しくいいかえた。<sup>335)</sup>

1929年5月の第14回全ロシア・ソヴェト大会で下部ソヴェト機関の強化について報告したキセリョーフは、村ソヴェト議長の流動性の数字を全国の主要な地方について紹介した。それによれば、非常措置の適用以来の1年間にお

いてそれは28%から100%の幅で議長の交代があり、リャザン県やヤロスラヴリ県の個々の地方では、1年間に、同じ村ソヴェトで3、4人の議長が交代した。<sup>336)</sup> ここには次に述べる議長の解任もふくまれていた。

### 3. 村ソヴェト議長の解任

村ソヴェト議長の解任は、選挙人からの選挙権の剥奪などの措置のような間接的な措置ではなく、直接的に上から村ソヴェトの組織を権力者に有利に変えようとするものである。それは形だけでももっていた自治としての性格を形式的にも消滅させることを意味した。

1928年5月の地方執行委員会組織部長全ロシア会議において、シベリア代表のボチカリョーフは、解任の措置をみずからのイニシアチヴによるものだと、誇らしげに語った。——村ソヴェト議長は給料が少なく、バトラークや貧農はそれにならなかった。議長の大半は家族員数の多い中農であり、彼らは農業に従事し、大衆活動に関心をもたなかった。彼らはキャンペーンに反対した。「諸君、私は、これらの議長の解任をやったのけた (отличился снятием таких председателей)。解任した22人のうち、12人を、穀物調達キャンペーン、農業税支払期限の短縮と、国債割当に反対した廉で裁判にかけた」。<sup>337)</sup> 彼らは被告席に座ることになったのである。

同じくシベリア代表のレシチコフは、地方のアチンスク管区とタラ管区で地区と地方の執行委員会の力を使って村ソヴェト議長の調査を実施し、その17%が「部分的にクラークの影響下に落ちた」と結論づけた(これはキセリョーフの理解では「解任」を意味した)。これは、他の管区にも及び、キャンペーン中に、クラスノヤルスク管区では50%の地区執行委員会議長が、カンスク管区では13%の村ソヴェト議長が、ピーイスク管区では30%の村ソヴェト議長が解任された(同管区ノヴィコフ地区で同期間に書記は300%かわった)。レシチコフの表現では、これは、アパラートに引きおこされた

「きわめて巨大な変化」であった。<sup>338)</sup>

シベリアについては、さらに9つの管区を捉えたデータが残されている。1927年10月から1928年4月までに、32.7%の村ソヴェト議長が解任され、12.2%が裁判にかけられた。1928年末にカルプが公表したデータ(「数地区」)によれば、この年、無傷で残った村ソヴェト議長は半数(49%)であり、残りの半数が解任され、あるいはさらに裁判にかけられた。<sup>339)</sup> こうしてシベリアの多くの地方では、議長も書記もいなかったために、数カ月のあいだ全く活動しない村ソヴェトがあらわれた。<sup>340)</sup> 村ソヴェトの空白が発生したのである。

1928年初頭にスターリンが訪れたシベリアは、同地方党委員会のイニシアチヴによって特別に強くキャンペーンに反応したといえるであろう。しかし他の地方でも、他の原因と入り交じってではあるが、解任が末端のイニシアチヴで進行したことを示している。

ロシアの重要な穀物地帯、北カフカーズでは、1929年4月の報告によれば、過去2年間に村ソヴェト議長は160%以上交替し、若干の村ソヴェトでは8回ないし10回交替した。交替の大半(74%)は行政的におこなわれた。すなわち、解任の事実は選挙人に知らされてはいなかった。選挙人は、任期中のリコール(досрочный отзыв)の権利を行使していなかった。書記の更迭はもっとひどく、年間に2回ないし4回更迭された。選挙外の時期に議長が不在になったところでは、議長の経験のない農民が新たに指名された。<sup>341)</sup>

北カフカーズ地方の1927/28年度の村ソヴェト員の任期中のリコールについては、資料がある。後述の理由により詳細は省くが、年間1677件のリコールのうち、115件(7%)が選挙人自身によるそれであった(その他は、村ソヴェト、執行委員会、部会、社会組織によるもの)。<sup>342)</sup> しかしリコールは1928年7月23日に手続き化されたばかりで、<sup>343)</sup> この7%の実態がいかなるものであったか、はなはだ疑わしい。1カ月後、『貧農』紙は、村ソヴェト員に対す

る数多くの不満、訴えにもかかわらず、「農村では任期中リコールの権利はほとんど全く利用されていない」と報じ、<sup>344)</sup> 1929年12月の『ソヴェト建設』誌は、「選挙人のイニシアチヴにもとづく代議員のリコールはほとんど実行されていない」と指摘した。<sup>345)</sup> ごくわずかりコールがあったのは、村ソヴェト員が刑事犯罪を犯した場合であった。

前記の穀物調達キャンペーン下のタンポフ農村を調査した労農監督人民委員部の文書にも、その調査結果が残されている。それによれば、村ソヴェトの周辺に組織されたアクチーフの多くが対処能力の欠如を理由に責任を問われ、現場から外された。「穀物調達キャンペーンにおいて、著しい部分の農村ソヴェトのアクチーフは淘汰された(ときには4割から5割に達する)」。そこには、大半が貧農からなる新しいカードルが補給された。<sup>346)</sup>

資料は、非穀物地帯でも、その度合いはより小さいとはいえ、同様の過程がはじまっていたことを示している。ヤロスラヴリ県では、1927年村ソヴェト選挙から1928年10月1日までに、村ソヴェト議長の42%、モスクワ県で65%、トヴェーリ県で67%が交替した(сменилось)。個々の郡や地区では90%に達した。流動性の原因は、給料の低さ、議長の労働の困難さ、階級路線の歪曲によるリコール、解任、「クラーク層と争いたくない」という理由での辞任であった。<sup>347)</sup>

村ソヴェト議長は、職務遂行の不首尾によって職を解任されたばかりではなかった。1920年代末には、彼らのなかには、村ソヴェトの職から解放されたいという一念から、意図的に醜態した姿で公衆の面前にあらわれ、解任の口実をつくりだすものがあらわれた。<sup>348)</sup> 1928-29年は多くの点で、1930年代の多くの特徴をすでに備えている。この事実もまた、1932-33年の飢饉の農村で伝えられている。その当時、議長は、穀物調達義務を遂行する義務を負っていた。農村に穀物がすでに残されていない、あるいは調達義務を遂行しても計画遂行には穀物が

不足すると知っていた議長は、義務から逃れ、議長職からの解任の原因をつくるために、村を酔いしれて歩いた。ヴォルガ中流地方では、1933年の秋、スターリン、カガノーヴィチらに宛てて、彼らの行動の動機について説明が党中央委員会に送付された。<sup>349)</sup>

1929年の後半から村ソヴェト議長の解任は高い水準を示しはじめ、集団化とともに、1930年初頭にはその取り組みに消極的な、あるいは抵抗する村ソヴェトの村ソヴェトの改選<sup>350)</sup> という形態にいたることになる。それは村ソヴェト議長の個々の解任ではなく、村ソヴェトの丸ごとの解散を意味し、全体として集団化を戦えるカードルを村ソヴェトにつくりだそうとする意図と結びついていた。穀物調達や自己課税などのキャンペーンとともに始まった村ソヴェト議長に解任は、1920年代前半の「任命制」の事実上の、形を変えた復活であった。

同時に、1930年選挙キャンペーンにおける選挙権の剥奪、選挙権被剥奪者としての認定は、集団化の時期には、直接に「クラーク清算」と結びついた。「全権と村ソヴェトは、厳格に秘密陰謀的な会議を召集し、そこでクラーク清算を予定される人物を審議し、その場で彼らの選挙権を剥奪した」。<sup>351)</sup> それは、クラークとしての運命の決定をソヴェトの名において、いわば公認する意味をもった(「むすび」を参照)。

## むすび 集団化と村ソヴェト

1929年6月、党中央統制委員会とソ連・ロシア共和国労農監督人民委員部のそれぞれの幹部が下級ソヴェト機関について合同会議をもった。ここには、ヴェ・グロスマンの資料が提出された。それは、ソ連全国の主要地域の現状分析に当たった5つのグループが到達した共通の結論を反映させていた。それは、われわれのこれまでの叙述にあらわれた特徴、すなわち、村予算の欠如、部会の不成功、徴税者としての

役割のほとんど排他的な大きさ、土地団体の支配的役割、貧農グループの組織の欠如ないしは不活動、村ソヴェト員（議長と書記）の質の低さを簡潔に列挙した。<sup>352)</sup>

それは、集団化前夜の村ソヴェトの状況を要約したものとして注目されるが、しかし全体としてその結論は驚くほど陳腐である。それに先立って、1928年秋、チュグノーフは、下部ソヴェトの改良に関するすべての方策（部会の活動、土地スホードの機能の限定、監査委員会の新規定、下部ソヴェトの権利拡大など）は発表されたが、それらは書類だけのもの、法律だけのものにとどまりかねない、したがって強固な指導がなければ、「農村では以前の慣習法が農村を事実上支配するだろう」と、意味深長な主張を残した。<sup>353)</sup> それは、読み方によっては、1920年代のソヴェトに対する施策が有効な効果を、ついにもたらさなかったとも解釈できる。「大転換」はもはや間近に迫っていたからである。

村ソヴェトの自治組織としての性格は、多くの地方で、1920年代の早い時期からその統合とともに失われていた。それは農民共同体と一体化しているあいだは、自治の機能をもっていたが、後者と分離するとともに、その特質を失っていった。その過程では共同体農民の広汎な抵抗があった。ただし、いまや多くは以前の郷村に位置する村ソヴェトは、その位置する村とは従来との関係を維持していた。

農民の下からの動き（象徴的な意味での「1925年」）はそれより遅れて本格化した。その後、1920年代後半の村ソヴェト選挙をめぐって農民と党権力の対立はつづき、農民の動きは、コムニスト、とりわけ「他所者」のそれ、貧農、共同体外的なパトラークを選挙に通そうとする党権力の対抗力によって封じられていった。1928年以降は、キャンペーンに能力のない、あるいは抵抗する村ソヴェト議長などを直接に解任するという方法によって、以後の村ソヴェト選挙の意義は極小化した。<sup>354)</sup>

農村、農業を改良する農民の運動は、もしそ

れがおこったところでは、村ソヴェトを通してではなく、スホードを通してであった。たしかにスホードは旧態依然たる保守の砦であった。しかし他方、要求、不満を上部に発信し、あるいは村内部で新しい経営方法や社会的なルールを決めるのもスホードであった。ただしそれは、進歩的な勢力が共同体から分離せず、村に残って影響力を発揮するという特定の条件の下でだけであった。そこでは、スホードにおいて多数者が少数者を強制するという共同体的な方法によって改良がおこなわれた。こうして新しい積極的な活動は共同体を前提しておこなわれた（共同体を解体する勢力は、当時多くの困難によって条件づけられており、重要な例外はあるが、大きな発展を遂げることができなかった<sup>355)</sup>）。共同体の改良は、1920年代において権力者の関心を引き、村ソヴェトはつねにそれとの比較のなかで観察されていた。

1927年に全ロシア中央執行委員会組織部長サプノーフ（А. Сапунов）によって書かれた、「いくつかの県の調査の総括から」と題された小文は、ここでのわれわれの総括にも適当である。

農民の増大する活発さは、村ソヴェトのなかに十分に強い指導者を見つけることができず、実際の活動のなかで、村ソヴェトの活動のなかで、発揮することができない。その活発さは、スホード——歴史的に形成され、かつ農村のための広汎な社会的な知識をもっている——のなかに形づくられている。…農村の社会的、経済的生活におけるスホードの影響力の増大は村ソヴェトの影響力の増大を追い越している。スホードは、村ソヴェトをみずからに従属させるか…あるいは、みずからの執行機関である「スホードの特別代表」（«особоуполномоченные сходов»）を選出しながら、村ソヴェトと並んで第2権力となっている。<sup>356)</sup>

したがって、1920年代末からの農民共同体の否定は、伝統性の否定と、その制約を独自に乗り越えようとする力の否定の双方を意味して

いた。このために、共同体を廃棄しようとしたロシアの農業集団化は、その変革の全面性によって特徴づけられることになった。

村ソヴェト議長や村ソヴェト代表を村<sup>スターロス</sup>長と見なして、彼だけを村と上部権力との関係をつなぐ人物と見る態度は1920年代を通して一貫して維持されていた。議長を当番として引き受けるという慣行が、「1925年」にも指摘されていたことを想起しておこう(本稿(1), 14頁)。1927年、ヴァトカ県の農民は生々しく伝えた。「村ソヴェトの議長については、真剣にじっくり考えており、『誰がそれになるべきか』すでにあらかじめ思いを巡らしている」(決めることが困難な場合にかつて彼らは順番にしていたことはすでに論じた)。しかし、選挙で村ソヴェト員に選ばれることを彼らは「罰」と考えていた。「集會に出歩く。総會に、會議に出席する。私に何か罪でもあるのか——選ばれた村ソヴェト員はこのようにしばしば問題を立てている」。だから選挙には全く関心がなく、班長は何度も選挙集會へ呼ぶのである、と。<sup>357)</sup>

1926年12月に党中央委員会の組織配員部員がコストロマ県を調査して中央委員会に送った秘密報告は、「ソヴェト活発化」が成功していないと指摘していた。コストロマ県同郡では1925年11月の選挙以来、村ソヴェトの活動は何の変化も見せておらず、村ソヴェトは、農民大衆の権力機関ではなく、そこにいるのは議長と書記だけであった。大半の村ソヴェトでは集會は定足数が足りず、若干の郷では7割の村ソヴェトが集まることもしなかった。ソヴェトの部會は大半が書類上の存在であった。<sup>358)</sup>

「1925年」によって党の勢力を排除することに成功した村ソヴェトでさえ、その多くは、その後の党勢力の再攻勢のために、村の代表としての新しい本質の獲得には成功しなかったであろう。しかし、村ソヴェトが農村を変革する代表をもった場合をたとえ仮定しても、それはその運動を具体化する力はなかったか、あるいは具体化する間に合わなかったであろう。何よりもまず、それは、施策を実現する物質的な力を

農民共同体によって奪われていたからである。

集団化の前夜とその過程で調査員や農村に訪れた活動家の目をまず引いたのは、ソヴェト権力が設定した高邁な目的とは懸け離れた議長の農民イズバーや全く役に立たない建物に、数多くの村ソヴェトがあるという現実であった。本稿で指摘した「放浪する村ソヴェト」(本稿(1), 16-17頁)というのは一例にすぎない。村ソヴェトが、せいぜい、あらわれた全権の摘要報告用のデータと荷馬車を提供する助手程度にしか映らないこともまれでなかった。1929年選挙後に、村ソヴェト議長の7割が非党員農民であった。そのカードルについても彼らには否定的な側面ばかりが目についた。1930年、全ロシア中央執行委員会のカルプ(A. Kapri)は、ヴォルガ下流地方の有名な全面的集団化管区ホピョールのチェルケソフスキー村ソヴェトの議長から次のような言葉を直接に聞き取った。

私は書類を読みます。ときには祭日にも手にとって読みます。読んでも、読んでも、何にもわかりません。書類はみんな長ったらしく、結局、最初に分かったことも忘れていきます。ときには日の当たるところに出て日に透かします。色のついた紙に印刷されていてひどいからです。<sup>359)</sup>

『イズヴェスチヤ』にこの文章を引用した筆者は付け加えた。「この議長の口で語られていることは100%真実である」。<sup>360)</sup> 都市権力の役人が書く文章と農民議長の懸隔はあまりに大きく、この懸隔は、農村に派遣された活動家の大声の命令と暴力的措置だけが埋めることができた。

集団化の革命的な特質のゆえに、村ソヴェトでは、上からの指令を、農民に対して情け容赦なく執行できるタイプの下部活動家の創出が要求された。しかし下部カードルの解任のくりかえしはその創出の困難、課せられるキャンペーン遂行の義務の困難を物語っていた。ヴォルガ中流の例は全体の情勢を象徴している。1931年初頭の改選時から6月15日までのおよそ半

年間に、全村ソヴェト議長の24%が解任され(一部の地区では7割をこえた)、後者のなかの60%が裁判にかけられた。ところが、解任された村ソヴェト議長の9割もの部分が、農村で「権力の支柱」と見なされていたバトラーク、労働者、コルホーズ員であった(おまけに、解任された村ソヴェト議長の6割はコムニストであった!)。資料は率直にそれを「弾圧」であると認めた。<sup>361)</sup> それに、これが「ソヴェト」の実質的な解消であると思つてくわえれば、必要十分な命題となる。

当時の条件の下では、解任のくりかえしは、命令体制を下部で支えるカードルを農村内部でつくりだすほとんど唯一の秘訣であった。さらにその限界を補ったのが都市からの活動家の投入であった。

それは、たとえば「2万5000人」の労働者の派遣であり、さらに1930年春の都市ソヴェトからのカードルの派遣、ほとんど強制的な「動員」であった。彼らの多くは、農民共同体の特徴を色濃く残すコルホーズ農村のなかで多くは孤立して、さらに不遇をかこちながら活動しなければならなかった。逃走するものもあった。時がくれば、彼らはまた都市へ帰っていった。このため都市からの派遣はくりかえしておこなわれた。一例をあげるならば、1933年に1月から4月までにレニングラード州では、村ソヴェトの活動に102名の都市と地区の活動家が村ソヴェトに送り込まれた。うち93名が村ソヴェト議長、3名が副議長、6名が書記であった。同州には227の村ソヴェトがあったから、それは、全村ソヴェトの40%以上の議長が都市と地区の活動家によって占められたことを意味した。<sup>362)</sup>

1932年初頭にヴォルガ農村に滞在した或る労働者の次のような観察は、その現実の率直な告発であった。「わが国では人民自身が決定している」と大声で叫ばれているが、「村ソヴェトとは都市権力が握っている手袋にすぎない」、「すべての命令は見せかけだけ総会にかけられる」、「決議はあらかじめ作成されている」、「都

市の代表者は大袈裟なプロトコルを口述して、書き取らせるのである」、と。<sup>363)</sup>

1920年代における党とソヴェトの「正しい分業」という前提(前述58頁)も、デ・ファクトに取り払われた。

大衆の権力機関というソヴェトの理念的規定からして、党への従属はソヴェトの本質的属性であってはならなかった。1930年12月中央委員会・中央統制委員会合同総会において、カリーニンは、課題となっている「ソヴェトの共産主義化」(окоммунизирования советов)とは、コムニストをソヴェトに多く送り込むことではなく、「ソヴェトを、共産党の課題の最も信頼のできる普及者(проводники)にすること」である、となおも強調した。<sup>364)</sup> この総会直後の1931年選挙の結果によれば、ロシア共和国で村ソヴェト議長に占めるコムニストの割合は56.6%、コムソモール員を加えると62.4%にまで増加していた(1929年選挙ではそれぞれ30.7%、38.0%)。<sup>365)</sup>

しかしソヴェトの「共産主義化」が「コムニスト化」であることは、その後の現実が示した。3年後の1934年選挙の結果、その割合は、同じくロシア共和国でコムニストの割合は75.8%、コムソモール員をくわえると82.9%に達した。中央の主要な農業県では、すでにほぼ全員がコムニストであった。コムソモール員を除いたコムニストだけの割合でさえ、村ソヴェト議長中のそれは、ヴォローネジ州で94.7%、クルスク州で92.9%を占めた。<sup>366)</sup> やや以前(1933年1月)のヴォルガ中流でも村ソヴェト議長のほとんど全員(90.6%)がコムニストであった。<sup>367)</sup>

弱体な村ソヴェトが集団化と各種のキャンペーン遂行のための道具となったため、それを不必要な環とみなして、農村の生産的な機能はすべてコルホーズ管理部へ移行するという考え方があらわれた。それは、村ソヴェト不要論、消滅論を生み、さらにはときには国家死滅論とも結びついた。「全面的集団化地区ではソヴェ

トにはするべきことが何もない」,「ソヴェトはここに死滅しつつある」.<sup>368)</sup> 村ソヴェト廃絶論は1929年の後半から唱えられはじめ,1930年代初頭にもときおり息を吹き返した。

しかしそれは,集団化に抵抗するクラーク層の増大という階級闘争の観点から強く否定された。社会主義への前進は,国家の消滅どころか階級闘争の尖鋭化をとまなうという全体的な命題が存在していた。ソヴェトが地域の勤労者の権力機関という実体をもっていなかったにもかかわらず,それでも集団化の過程において,ソヴェトの形式が取り除かれることはなかった。村ソヴェトは「大衆的権力機関」であり,「階級闘争の尖鋭化」はまさに進行中であり,ソヴェトは,それにともなう農民の抵抗を弾圧する最高位の正当性の根拠を与えるからである。「階級闘争」の最高の形態は,「クラークの階級としての絶滅」という自国の農民に対するソヴェト国家の暴力行為であった。ソヴェトの名の下であれば,階級敵と規定されたものは弾圧することができた。

1930年1月31日,ヴォルガ中流地方党書記ハタエーヴィチはサマーラ市における党アクチーフ集会において「クラークの階級としての絶滅に関する活動は,ソヴェトの名において,ソヴェトを通して,農村のソヴェト権力機関を通しておこなわなければならない」と述べた。<sup>369)</sup> 「クラーク」の収奪と追放を実行したのは,実際には,オ・ゲ・ペ・ウ員,コムニスト,コムソモール員らであった。しかし,「形式的にはわれわれはソヴェトの名前で活動すると決めた。すべての特別全権に対して地区執行委員会の署名入りの命令書を交付し,まさかのときのために,これこれの市民が追放されると記された執行委員会幹部会の決定の謄本を準備した。しかし本質的には,われわれはこの問題にソヴェトを引きつけてはいない」.<sup>370)</sup> ソヴェトの名前がなければ,国家の暴力は実行できなかったのである。

## 注

- 1) 先行研究として, 集団化前夜の部会(セクツイヤ)について, 溪谷謙『スターリン政治体制の成立』第2部(1972年), 523-534頁がある。なお, そこには, 1920年代における部会と農民共同体との関係如何という問題視角はない。
- 2) Яковлев Я. Практические вопросы работы советов. М.-Л., 1925. С. 38.
- 3) Советское строительство. 1928. № 12. С. 50.
- 4) Советская волость. 1925. № 3. С. 12-13 (А. Чернышев).
- 5) Власть советов. 1927. № 24-25. С. 38-40.
- 6) Советский активист. 1930. № 2. С. 21.
- 7) Советское строительство. 1928. № 9. С. 39.
- 8) ГАРФ. Ф. 1235. Оп. 106. Д. 290. Л. 181.
- 9) Беднота. 2 сентября 1926 г.
- 10) См.: ВЦИК РСФСР. Массовая работа советов. С. 20, 38, 47.
- 11) Известия Северо-Кавказского крайисполкома. 1928. № 6. С. 13.
- 12) Власть советов. 1928. № 10-11. С. 26.
- 13) См.: Лужин А. Организация сельских советов. М., 1930. С. 55.
- 14) Известия Северо-Кавказского крайисполкома. 1928. № 6. С. 14.
- 15) ГАРФ. Ф. А-406. Оп. 11. Д. 1088. Л. 63 об.
- 16) Советское строительство. 1928. № 8. С. 42.
- 17) Известия. 16 августа 1928 г.
- 18) Сельсоветы и волисполкомы (1925). С. 111.
- 19) Известия. 22 мая 1929 г.
- 20) Лужин А., Резунов М. Низовой советский аппарат: сельсовет и волисполком. М., 1929. С. 121.
- 21) Власть советов. 1930. № 11 (16 марта). С. 21.
- 22) См.: там же. С. 124; Никонов Д., Симонов Н. Две волости. М.-Л., 1926. С. 101.
- 23) ГАРФ. Ф. 1235. Оп. 106. Д. 289. Л. 25.
- 24) Советское строительство. 1929. № 6. С. 80.
- 25) ВЦИК РСФСР. Массовая работа советов. С. 47.
- 26) Лужин А. Организация сельских советов. С. 57.
- 27) Бюллетень Тамбовского губисполкома. 4 нояб-

- 1925 г. Цит. по: Сафонов А. А. Организационно-правовые основы крестьянского самоуправления в советской деревне, 1917–1928 гг. Тамбов, 2006. С. 133.
- 28) Лужин А., Резунов М. Низовой советский аппарат. С. 195.
- 29) ГАРФ. Ф. А-406. Оп. 11. Д. 1007. Л. 138.
- 30) Финансы и народное хозяйство. 1930. № 6. С. 14; ГАРФ. Ф. А-406. Оп. 10. Д. 1574. Л. 77–77 об.
- 31) Беднота. 26 августа 1927 г.
- 32) Известия. 2 марта 1929 г.
- 33) Власть советов. 1929. № 50. С. 9. 村予算については、不十分ながら、拙稿「ロシア農村の自己課税」(本誌、第77巻第4号、2012年)、37–40頁を参照。
- 34) Леонтьев С. М. Для чего нужен сельский бюджет и как его строить. М., 1929. С. 26. См.: ГАРФ. Ф. 1235. Оп. 106. Д. 288. Л. 140–141.
- 35) Сельсовет и коллективизация. М., 1930. С. 80.
- 36) Беднота. 26 августа 1928 г. (Н. Сокольский)
- 37) См.: Советский путь. 1926. № 4. С. 6–8; Сборник документов по земельному законодательству. С. 650–651.
- 38) Власть советов. 1928. № 23–24. С. 37.
- 39) Беднота. 17 июня 1927 г.; Известия. 5 апреля 1929 г.
- 40) Советское строительство. 1928. № 11. С. 117.
- 41) Власть советов. 1929. № 50. С. 9; № 52. С. 20.
- 42) Лужин А., Резунов М. Указ. соч. С. 145–146.
- 43) 発言内容が中央に対して非常に批判的であり、著名な初期ソヴェトの研究者、エム・エフ・ヴラヂер-ミルスキーとは別人であろう。この人物はウクライナの代表として出席している。
- 44) ЦИК СССР. Совещание по вопросам советского строительства (январь, 1925 г.). С. 91–92.
- 45) Власть советов. 1928. № 10–11. С. 27.
- 46) Большаков А. М. Деревня 1917–1927. М., 1927. С. 181.
- 47) ГАРФ. Ф. А-406. Оп. 11. Д. 1007. Л. 139.
- 48) ГАРФ. Ф. А-406. Оп. 11. Д. 1088. Л. 64.
- 49) ГАРФ. Ф. 1235. Оп. 106. Д. 289. Л. 136, 138.
- 50) Лужин А., Резунов М. Указ соч. С. 138.
- 51) Гуцин Н., Чижов В. Деревня сегодня по Алексинскому району Тульской губернии. М., 1925. С. 105.
- 52) Известия Северо-Кавказского крайисполкома. 1928. № 6. С. 14.
- 53) Сельсоветы и волисполкомы (1925). С. 57. См. также: Кретов Ф. Деревня после революции. М., 1925. С. 77; Советское строительство. 1928. № 12. С. 90; Лицо донской деревни. По материалам обследования ДКК и ДоноРКИ. Ростов н/Д., 1925. С. 82–83; Власть советов. 1928. № 23–24. С. 37; и ряд др.
- 54) これは、奥田央『コルホーズの成立過程』(1990年)、第2章第3節で論じられた。さらに崔在東『近代ロシアの社会経済史』(2007年)、第1章を参照。
- なお筆者は、1920年代を俯瞰した場合、農民共同体の「改良」は、「解体」(オートルプ、フートルへの移行)の前段階として把握できる、という立場に立っている。詳細は、前掲拙著、第3章第五節、とくに413–420頁を参照。なお、本稿は「むすび」の章においてふたたびこの問題に立ち返ることになる。
- さらに、農村通信員運動を通して農村アクチーフの問題を考察したのが、浅岡善治「ネツプ農村における社会的活動性の諸類型」(野部公一、崔在東編『20世紀ロシアの農民世界』、2012年、所収)である。
- 55) ЦИК СССР. Совещание по вопросам советского строительства (январь, 1925 г.). М., 1925. С. 27.
- 56) Власть советов. 1928. № 23–24. С. 37.
- 57) Массовая советская работа. 1929. № 21. С. 25.
- 58) XIV Всероссийский съезд Советов. Бюллетень 15. С. 33.
- 59) 詳細は、См.: Власть советов. 1927. № 21. С. 21; 1928. № 15. С. 2–3; 1929. № 26. С. 11; Советское строительство. 1928. № 12. С. 76; 1929. № 5. С. 117.
- 60) СУ РСФСР. 1922. № 68. Ст. 901; Сборник документов по земельному законодательству. С. 160. 邦訳として、保田孝一、前掲書、333頁を参照。
- 61) ГАРФ. Ф. Р-374. Оп. 6. Д. 281. Л. 14.
- 62) ГАРФ. Ф. А-406. Оп. 11. Д. 1007. Л. 167.

- 63) ГАРФ. Ф. Р-374. Оп. 6. Д. 281. Л. 14.
- 64) Советская деревня глазами ВЧК-ОГПУ-НКВД. Т. 2. М., 2000. С. 18.
- 65) «Совершенно секретно». Т. 2 (1924 г.). М., 2001. С. 343–347.
- 66) Там же. С. 347.
- 67) Власть советов. 1927. № 32. С. 14.
- 68) Власть советов. 1927. № 39. С. 14; Советское строительство. 1928. № 12. С. 59. См.: Власть советов. 1927. № 49. С. 26; 1928. № 7. С. 16
- 69) Резунов М. Сельские советы и земельные общества. М., 1928. С. 49. См. также: Лужин А., Резунов М. Указ соч. С. 98.
- 70) Правда. 20 мая 1928 г.; Известия. 23 мая, 6 июня 1928 г. и др.
- 71) Власть советов. 1928. № 15. С. 20–21.
- 72) ВЦИК РСФСР. Массовая работа советов. С. 33–34.
- 73) ГАРФ. Ф. Р-374. Оп. 6. Д. 281. Л. 11–12.
- 74) Советское строительство. 1928. № 12. С. 75, 88.
- 75) ГАРФ. Ф. Р-374. Оп. 6. Д. 281. Л. 11–12.
- 76) Партийный спутник. Сталинград, 1926. № 9. С. 17–18. 前掲拙稿「犁から鞆へ」(前掲『20世紀ロシアの農民世界』, 所収), 207頁.
- 77) Советское строительство. 1928. № 12. С. 88.
- 78) Рыскулов Т. О низовом аппарате власти в деревне // Известия. 26, 27 января 1929 г.
- 79) Районирование и низовая сеть советов. С. 24.
- 80) См.: Советское строительство. 1929. № 5. С. 107.
- 81) ГАРФ. Ф. Р-374. Оп. 6. Д. 281. Л. 13.
- 82) См.: Окуда Хирочи. О понятии «кулак» в советской деревне 1920-х годов // История в подробностях. 2015. № 6.
- 83) «Совершенно секретно». Т. 6 (1928 г.). М., 2002. С. 331.
- 84) ГАРФ. Ф. Р-374. Оп. 6. Д. 281. Л. 13.
- 85) ГАРФ. Ф. 1235. Оп. 106. Д. 289. Л. 47. 奥田央『コルホーズの成立過程』, 194–195頁.
- 86) ГАРФ. Ф. 1235. Оп. 106. Д. 289. Л. 58.
- 87) СЗ СССР. 1928. № 69. Ст. 642.
- 88) 拙稿「犁から鞆へ」, 205, 206頁参照。「中農恐怖症」の語について, См.: КПСС в резолюци-
- ях. Изд. 9-ое. Т. 3. 1984. С. 469.
- 89) ГАРФ. Ф. Р-374. Оп. 6. Д. 281. Л. 18.
- 90) Там же. Л. 15, 19. これはタンボフ県委員会の決定でもあった(ГАРФ. Ф. 1235. Оп. 106. Д. 289. Л. 116).
- 91) Партия в цифровом освещении. Вып. 1. М.-Л., 1926. С. 29.
- 92) Сельское хозяйство на путях восстановления. М., 1925. С. 771.
- 93) На аграрном фронте. 1925. № 2. С. 107.
- 94) См.: Партия в цифровом освещении. Вып. 1. С. 26. 村ソヴェトの数は第1表から.
- 95) Избирательная кампания в советы РСФСР в 1924–25 г. Предварительные итоги. Вып. 2. М., 1925. С. 26.
- 96) Беднота. 28 октября 1924 г.
- 97) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 155. Л. 205 об.
- 98) 詳細は, 注95)の他, Итоги выборов в советы РСФСР в 1927 году. Вып. 1. М., 1927. С. 15; Итоги выборов в советы РСФСР в 1929 году. Вып. 1. М., 1930. С. 27. Комсомольцевを加えた数字は第2表.
- 99) 奥田央「1920年代ロシアの農村コムニスト」, 本誌, 2007年, 第73巻第1号, 2–3頁.
- 100) Кузбца О. А. Избирательная кампания и общественно-политическая активность крестьянства тверской губернии в 1921–1925 годах // Тверская земля в прошлом и настоящем. Тверь, 1994. С. 81; Селиванов А. М. Социально-политическое развитие советского деревни в первые годы новой экономической политики (1921–1925 гг.). Саратов, 1987. С. 80–81.
- 101) См.: КПСС в резолюциях. Изд. 9-ое. Т. 1984. С. 55, 52.
- 102) ГАРФ. Ф. А-406. Оп. 3. Д. 278. Л. 16; Д. 279. Л. 6; Д. 281. Л. 7; Д. 282. Л. 21 об.
- 103) Кузбца О. А. Указ. соч. С. 81; Чернышева А. В. Механизм государственного управления деревней в условиях НЭПа. М., 2005. С. 137.
- 104) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 157. Л. 62. См.: Сельсоветы и волисполкомы (1925). С. 15.
- 105) Власть советов. 1924. № 2. С. 167; Селиванов А. М. Указ. соч. С. 96; Гиммельсон Е. Г. Советы в период октябрьской революции и гражданской во-

- йны. М., 1968. С. 53.
- 106) Чузунов С. И. Вопросы организаций и деятельности сельских советов. Л., 1925. С. 50.
- 107) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 156. Л. 102, 103, 183; Трагедия советской деревни. Т. 1. С. 576-; «Совершенно секретно». Т. 3 (1925 г.). Ч. 1. М., 2002. С. 125, 152, 182, 201. ふつうこれらの要求には, エス・エル, または「クラーク層」のそれであるという「解説」が付せられる。秘密投票 (тайная баллотировка) ができるかという農民の質問はКрестьянские истории. С. 202 にある。
- 108) Лебедев Г. Московская деревня на выборах советов в 1927. М., 1927. С. 60.
- 109) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 155. Л. 120.
- 110) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 157. Л. 64 об.
- 111) Беднота. 22 июля, 3, 13 сентября, 11 октября 1924 г.
- 112) Калинин М. И. Статьи и речи. 1919–1935. М., 1936. С. 184–185; Рязанцев Н. П. Перевыборы советов в общественно-политической жизни советской деревни в середине 20-х годов. Ярославль, 1992. С. 20; и ряд др.
- 113) Беднота. 21 ноября 1922 г.
- 114) Беднота. 6 февраля 1925 г.
- 115) СУ РСФСР. 1922. № 56. Ст. 706.
- 116) СУ РСФСР. 1924. № 71. Ст. 695.
- 117) Беднота. 21 февраля 1922 г.
- 118) Беднота. 30 ноября 1924 г.
- 119) Сельсоветы и волисполкомы (1925). С. 15.
- 120) Беднота. 16 декабря 1924 г.
- 121) Советское строительство. Сборник II–III. 1925. С. 298; Беднота. 9 января 1925 г. (О. Чернов) и др.
- 122) Беднота. 29 ноября 1924 г.
- 123) Власть советов. 1924. № 2. С. 167.
- 124) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 157. Л. 45 об.–46.
- 125) См.: ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 95. Л. 90.
- 126) 奥田央「ロシア農村の自己課税」, 20–22 頁を参照。
- 127) Беднота. 25 сентября 1925 г.
- 128) Советское строительство. Сборник II–III. 1925. С. 298.
- 129) Сталин И. Сочинения. Т. 7. М., 1947. С. 184.
- 協同組合の管理部にも選出制が欠如していたことについて, 前掲拙稿「犁から鞆へ」, 203–204 頁を参照。
- 130) Молотов В. М. Выборы в советы и задачи рабочего класса. Л., 1927. С. 10–11. 要約は, Беднота. 5 февраля 1927 г.
- 131) Молотов В. М. Выборы в советы и задачи рабочего класса. Л., 1927. С. 10–11.
- 132) Лицо донской деревни. С. 27.
- 133) Сельсоветы и волисполкомы (1925). С. 38.
- 134) 詳細は, См.: Власть советов. 1925. № 1. С. 6–7; 1929. № 18–19. С. 24; Спутник большевика. Курск, 1925. № 7 (окт.). С. 11–14.
- 135) Крестьянские истории. Российская деревня 1920-х годов в письмах и документах. М., 2001. С. 121. ただし, 筆者はオデッサ県 (ウクライナ) の農民である。
- 136) Власть советов. 1929. № 18–19. С. 24.
- 137) Молотов В. М. Указ. соч. С. 10–11.
- 138) Социалистический вестник. Берлин, 1924. № 24. С. 3; Вестник крестьянской России. Прага, 1927. № 10. С. 24.
- 139) Беднота. 21 февраля 1922 г.
- 140) Третьяк Л. В. Крестьянская поземельная община и сельские советы в Рязанской губернии (первая половина 20-х годов) // Из прошлого и настоящего Рязанского края. Сб. научных трудов. Рязань, 1995. С. 108.
- 141) Селиванов А. М. Указ. соч. С. 97.
- 142) См.: Сельское хозяйство на путях восстановления. М., 1925. С. 771.
- 143) РГАСПИ. Ф. 17. Оп. 11. Д. 256. Л. 3–4. Цит. по: Селиванов А. М. Указ. соч. С. 97.
- 144) Хрестоматия по отечественной истории (1914–1945 гг.). Под ред. А. Ф. Киселева, Э. М. Щагина. М., 1996. С. 289–290. ヴォローネジ州アルヒーフ資料。
- 145) 前掲拙稿「犁から鞆へ」の意図のひとつは, 1920 年代の, 工業化の未発達ゆえに職のチャンスが限られていた条件のもとで, コムニストであることがしばしば職の独占を意味したということにあった。
- 146) «Совершенно секретно»: Лубянка-Сталину о положении в стране. Т. 1 (1922–1923 гг.). Ч. 2.

- М., 2001. С. 895; Т. 2 (1924 г.). М., 2001. С. 150–151, 189, 206, 280–281.
- 147) Лицо донской деревни. С. 30–31.
- 148) *Росницкий Н.* Полгода в деревне. Пенза, 1925. С. 50–52.
- 149) Лицо донской деревни. С. 30.
- 150) Социалистический вестник. Берлин, 1924. № 20. С. 6.
- 151) *Сталин И.* Сочинения. Т. 7. М., 1947. С. 184.
- 152) この文章は、公刊された『スターリン全集』では削除されている。私がかぎりで、この削除がソ連、ロシアの研究史で指摘されたことはない。Правда. 25 июня 1925 г. から復原した。
- 153) См.: На аграрном фронте. 1925. № 5–6. С. 208.
- 154) Советская деревня глазами ВЧК-ОГПУ-НКВД. Т. 2. С. 263.
- 155) *Яковлев Я.* Практические вопросы работы советов. С. 31.
- 156) *Каганович Л. М.* Партия и советы. М. - Л., 1928. С. 68.
- 157) Материалы комиссии по укреплению работы сельсоветов и волисполкомов. М., 1925. С. 47; Беднота. 5 февраля 1925 г.; Сельсоветы и волисполкомы (1925). С. 15.
- 158) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 157. Л. 62.
- 159) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 95. Л. 91.
- 160) Лицо донской деревни. С. 29–30.
- 161) *Панферов Ф.* От деревенских полей. Очерки современной деревни. М.-Л., 1926. С. 22. См.: ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 157. Л. 64 об.
- 162) Сельсоветы и волисполкомы (1925). С. 17.
- 163) Социалистический вестник. Берлин, 1925. № 4. С. 4.
- 164) Сельсоветы и волисполкомы (1925). С. 17; Беднота. 11 января 1925 г.
- 165) Сельсоветы и волисполкомы (1925). С. 16–17.
- 166) Беднота. 27 января 1925 г.
- 167) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 95. Л. 88; *Каганович Л. М.* Партия и советы. М.-Л., 1928. С. 69; Беднота. 11 февраля 1925 г.
- 168) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 95. Л. 96.
- 169) Беднота. 1 января 1925 г.
- 170) Советское строительство. Сборник (1925). № 1. С. 12. (Киселев); *Чугунов С. И.* Вопросы организаций и деятельности сельских советов. Л., 1925. С. 47; *Яковлев Я.* Коммунисты на перевыборах советов в деревне. Л., 1927. С. 17; Деревенский коммунист. 1927. № 1. С. 11; Беднота. 25 сентября 1925 г. и ряд др. 郷執行委員会のメンバーの選出も基本的に同じである (См.: Советское строительство. Сборник (1925). № 1. С. 12).
- 171) См.: *Есиков С.* Российская деревня в годы НЭ-Па. М., 2010. С. 191.
- 172) За сплошную коллективизацию. Самара, 1930. № 1. С. 43.
- 173) Беднота. 12 февраля 1925 г. См. также: Беднота. 4 февраля 1925 г.
- 174) *Яковлев Я.* Практические вопросы работы советов. С. 24–25.
- 175) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 94. Л. 204 об.
- 176) 1920年11月にこの地方で起こった農民蜂起については、Советская деревня глазами ВЧК-ОГПУ-НКВД. Т. 1. М., 1998. С. 352. に記録されている。
- 177) Беднота. 24 января 1925 г.
- 178) Избирательная кампания в советы РСФСР в 1924–25 г. Предварительные итоги. Вып. 2. С. 11.
- 179) *Росницкий Н.* Полгода в деревне. Пенза, 1925. С. 76.
- 180) *Большаков А. М.* Деревня 1917–1927. М., 1927. С. 178.
- 181) Лицо донской деревни. С. 30.
- 182) ЦИК СССР. Совещание по вопросам советского строительства (апрель, 1925 г.). М., 1925. С. 7.
- 183) Известия ЦК РКП (б). 1925. № 6. С. 2. Калерининについて、См.: *Калинин М. И.* Статьи и речи. 1919–1935. М., 1936. С. 184–185.
- 184) Беднота. 19 января 1927 г. (П. Кузьмин)
- 185) Беднота. 12 февраля 1925 г.
- 186) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 160. Л. 404.
- 187) *Буров Я.* Деревня на переломе. М.-Л., 1926. С. 40; Большевицкая мысль. Архангельск, 1925. № 2 (декабрь). С. 110; Беднота. 1 марта 1925 г.
- 188) *Панферов Ф.* Указ. соч. С. 23.

- 189) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 95. Л. 87.
- 190) Там же. Л. 45 об.
- 191) Беднота. 4 февраля 1925 г.
- 192) いまでは内外の多くの研究, 論及があるが, 前掲奥田『ヴォルガの革命』, 21, 41, 273, 397, 526, 541 頁などを参照(そこでは, 意図を汲んで「怠惰者告知板」と訳されている).
- 193) На аграрном фронте. 1925. № 5-6. С. 208. 著者はМ. Х. おそらくはハタエーヴィチ.
- 194) 前掲拙稿「犁から鞆へ」, 201-203 頁を参照. いまでは, いっそう詳しく論じる必要がある.
- 195) Советская деревня глазами ВЧК-ОГПУ-НКВД. Т. 2. С. 263-264.
- 196) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 94. Л. 205.
- 197) Там же.
- 198) СЗ СССР. 1925. № 1. Ст. 3.
- 199) СЗ СССР. 1925. № 6. Ст. 54.
- 200) Известия ЦК РКП (б). 1925. № 6. С. 2.
- 201) См.: Беднота. 14 января 1925 г.
- 202) Избирательная кампания в советы РСФСР в 1924-25 г. Предварительные итоги. Вып. 2. С. 9.
- 203) СЗ СССР. 1925. № 6. Ст. 55.
- 204) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 95. Л. 46.
- 205) Избирательная кампания в советы РСФСР в 1924-25 г. Предварительные итоги. Вып. 2. С. 12.
- 206) СЗ СССР. 1925. № 6. Ст. 55; Советское строительство. Сборник II-III. 1925. С. 295-296.
- 207) Известия ЦК РКП (б). 1925. № 17-18. С. 10. Цит. по: *Рязанцев Н. П.* Перевыборы... С. 19.
- 208) Беднота. 31 января, 12 февраля 1925 г.
- 209) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 156. Л. 213-215; Беднота. 17 января 1925 г.
- 210) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 95. Л. 132; Д. 156. Л. 212.
- 211) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 155. Л. 205, 217 об.
- 212) См.: Сельсоветы и волисполкомы (1925). С. 27.
- 213) *Молотов В.* Политика партии в деревне. Изд. 3-е дополненное. М.-Л., 1927. С. 219.
- 214) Сельсоветы и волисполкомы (1925). С. 33; *Молотов В.* Политика партии в деревне. С. 172-173.
- 215) *Молотов В.* Политика партии в деревне. Изд. 3-е дополненное. М.-Л., 1927. С. 214-216, 236.
- 216) 詳細は, См.: *Хириси Ожуда.* О понятии «кулак» в советской деревне 1920-х годов // История в подробностях. 2015. № 6.
- 217) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 156. Л. 213-214; «Совершенно секретно». Т. 3. Ч. 1. С. 125.
- 218) 奥田「ソハーから鞆へ」, 216-217, 229 頁.
- 219) 詳細は, См.: «Совершенно секретно». Т. 3. Ч. 1. С. 125, 128-129 и др.
- 220) РГАСПИ. Ф. 17. Оп. 84. Д. 916. Л. 3-16; ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 175. Л. 3-3 об.; «Совершенно секретно». Т. 3. Ч. 1. С. 363.
- 221) См.: «Совершенно секретно». Т. 3 (1925 г.). Ч. 1. С. 127, 209, 214.
- 222) Общественно-политическая жизнь Российской провинции. XX век. Вып. II. Тамбов, 1996. С. 71.
- 223) Власть советов. 1925. № 12. С. 18.
- 224) *Миронов Б. Н.* Социальная история России. Т. 1. СПб., 1999. С. 444.
- 225) «Совершенно секретно». Т. 3. Ч. 2. С. 687.
- 226) Беднота. 22 февраля 1927 г.; «Совершенно секретно». Т. 3. Ч. 2. С. 689.
- 227) Советская деревня глазами ВЧК-ОГПУ-НКВД. Т. 2. С. 383.
- 228) Источник. 1993. № 0. С. 26-27.
- 229) 前掲拙稿「犁から鞆へ」, 210 頁.
- 230) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 154. Л. 441.
- 231) «Совершенно секретно». Т. 3. Ч. 1. С. 183.
- 232) Избирательная кампания в советы РСФСР в 1924-25 г. Предварительные итоги. Вып. 2. С. 21, 26.
- 233) Воронежская деревня. Вып. 1. *Тарадин И.* Слобода Ровеньки. Воронеж, 1926. С. 143.
- 234) Комсомол в деревне. Сборник по основным вопросам работы РЛКСМ в деревне. М.-Л., 1925. С. 32.
- 235) *Чаплин А.* Комсомол в полосе социалистического строительства. Харьков, 1926. С. 40-41.
- 236) 前掲拙稿「犁から鞆へ」, 211-212 頁.
- 237) *Росницкий Н.* Полгода в деревне. Пенза, 1925. С. 76. 1925 年再選挙イルクーツク県の実情について. См.: ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 155. Л.

- 135.
- 238) *Рязанцев Н. П.* Указ. соч. С. 41, 53.
- 239) *Гагарин А. В.* Перевыборы советов в Западной Сибири в 1925–1926 г. // *Сибирь и Дальний Восток* в период восстановления народного хозяйства. Вып. 3. Томск, 1964. С. 136.
- 240) Беднота. 6 января 1926 г. (Н. Наумов)
- 241) たとえば, Беднота. 19 февраля 1926 г.; *Кужба О. А.* Местные органы власти в 1925–1927 годах // *НЭП: завершающая стадия*. М., 1998. С. 168; *Правда*. 5, 6 февраля 1927 г.
- 242) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 95. Л. 213 об., 217 об.-218.
- 243) Там же. Л. 227–227 об.
- 244) Лицо донской деревни. С. 27.
- 245) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 95. Л. 212 об.
- 246) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 156. Л. 205.
- 247) Там же. Л. 206.
- 248) Там же. Л. 152–153.
- 249) Там же. Л. 206.
- 250) См.: «Совершенно секретно». Т. 5 (1927 г.). М., 2003. С. 210.
- 251) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 95. Л. 223 об.-224.
- 252) Там же. Л. 223.
- 253) Избирательная кампания в советы РСФСР в 1924–25 г. Предварительные итоги. Вып. 2. С. 25, 26.
- 254) *Резунов М.* Сельские общества и земельные общины. М., 1928. С. 49.
- 255) *Лужин А., Резунов М.* Указ соч. С. 94.
- 256) 典拠は第2表(62頁)に同じ.
- 257) На аграрном фронте. 1925. № 10. С. 8.
- 258) Общественно-политическая жизнь Российской провинции. XX век. Тамбов, 1993. С. 77.
- 259) 奥田央『ヴォルガの革命』, 240頁.
- 260) 中央委員会4月(1925年)総会における「クラーク」の定義をめぐるカリーニンの考え方の詳細について, См.: *Хирози Окуда*. О понятии «кулак» в советской деревне 1920-х годов // *История в подробностях*. 2015. № 6.
- 261) *Сталин И.* Сочинения. Т. 7. М., 1947. С. 25.
- 262) Там же. С. 357.
- 263) См.: там же. С. 332–333. 詳細は不明.
- 264) 詳細は, 前掲拙稿「犁から鞆へ」, 194頁.
- 265) РГАСПИ. Ф. 17. Оп. 113. Д. 175. Л. 105.
- 266) СУ РСФСР. 1925. № 79. Ст. 603.
- 267) РГАСПИ. Ф. 17. Оп. 113. Д. 175. Л. 155–157.
- 268) КПСС в резолюциях. 9-ое изд. Т. 4. М., 1984. С. 43–44.
- 269) СУ РСФСР. 1926. № 75. Ст. 577. このロシア共和国の訓令に先立って, ソ連のそれが1926年9月に採択された(СЗ СССР. 1926. № 66. Ст. 501.). 後者のほぼ全体は, 溪谷謙『スターリン政治体制の成立』第1部(1972年), 325–333頁で知ることができる. なお, ロシア共和国の訓令について, ここでは, 本文で論じた以外, 細かな規定の内容には立ち入らない.
- 270) СЗ СССР. 1929. № 34. Ст. 301.
- 271) РГАСПИ. Ф. 17. Оп. 2. Д. 246. Л. 4 об.
- 272) КПСС в резолюциях. 9-ое изд. Т. 4. С.
- 273) *Молотов В. М.* Выборы в советы и задачи рабочего класса. Л., 1927. С. 14.
- 274) Итоги выборов в советы РСФСР в 1927 году. Вып. 1. М., 1927. С. 7.
- 275) *Правда*. 5 февраля 1927 г. См.: «Совершенно секретно». Т. 5. С. 32, 33.
- 276) *Правда*. 10 февраля 1927 г. (А. Жданов)
- 277) Советская деревня глазами ВЧК-ОГПУ-НКВД. Т. 2. С. 542; Власть и общественные организации в России в первой трети XX столетия. М., 1993. С. 136. 村の半数が選挙権を剥奪されたサラートフ県クンチェロヴォ村の例はБеднота. 16 февраля 1927 г.
- 278) «Совершенно секретно». Т. 5. С. 32–34, 68–72.
- 279) Беднота. 16 февраля 1927 г.
- 280) *Сталин И.* Сочинения. Т. 7. С. 337.
- 281) *Правда*. 5 февраля 1927 г.
- 282) «Совершенно секретно». Т. 5. С. 34, 71.
- 283) *Правда*. 8 февраля 1927 г.; *Большаков А. М.* Указ. соч. С. 429.
- 284) «Совершенно секретно». Т. 5. С. 72.
- 285) Там же. С. 184.
- 286) Беднота. 4 февраля 1927 г.
- 287) Беднота. 13 февраля 1927 г.
- 288) Беднота. 19 февраля 1927 г. См. также: Беднота. 25 января (А. А. Стеблев 教師について), 28 января (С. Курочкин Кустарьについて) 1927

- г.
- 288-a) Известия. 6 января 1928 г.
- 289) Советская волость. 1924. № 5. С. 16.
- 290) Чугунов С. И. Вопросы организации и деятельности сельских советов. Л., 1925. С. 45–46. *Он же*. Что показали последние перевыборы советов. М.-Л., 1926. С. 45–46. 本稿の冒頭を再度参照せよ.
- 291) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 157. Л. 64 об.; Материалы комиссии по укреплению работы сельсоветов и волисполкомов. С. 17; Сельсоветы и волисполкомы (1925). С. 13.
- 292) Беднота. 9 января 1925 г.
- 293) Беднота. 12 февраля 1925 г. См.: *Сталин И.* Сочинения. Т. 7. С. 31.
- 294) РГАСПИ. Ф. 17. Оп. 2. Д. 246. Л. 52 об.
- 295) Там же. なお, これは, 中央委員会 7 月総会 (1926 年) におけるジノヴィエフ, カーメネフ, トロツキー (合同反対派) のテーゼのなかで利用されたもの.
- 296) ГАРФ. Ф. 1235. Оп. 103. Д. 83. Л. 16.
- 297) Беднота. 22 февраля 1927 г.
- 298) См.: Советское строительство. Сборник II–III. 1925. С. 296; Известия. 17 декабря 1927 г. (А. Карп); На аграрном фронте. 1928. № 5. С. 68. Лицо деревни в выборах советов. Новосибирск, 1926. С. 42; ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 157. Л. 128 и ряд др.
- 299) На аграрном фронте. 1925. № 5–6. С. 59. и ряд др.
- 300) ЦИК СССР. Совещание по вопросам советского строительства (январь, 1925 г.). С. 32.
- 301) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 155. Л. 87.
- 302) Советское строительство. Сборник 2–3. 1925. С. 296; *Стопани А. М.* Очерки новой деревни и партработы в ней. М.-Л., 1926. С. 70. 女性の出席を助けたとした 1925 選挙時の簡単な記述は, Беднота. 12 февраля 1925 г.
- 303) Сельсоветы и волисполкомы (1925). С. 23.
- 304) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 155. Л. 134 об.
- 305) Беднота. 7 января 1927 г.
- 306) *Ксенофонтов Ф.* Классовая борьба и перевыборы сельсоветов. М.-Л., 1928. С. 42.
- 307) 他の例として, См.: Беднота. 4 января 1927 г.
- 「ときに農夫は農婦を選挙集会にいかせず, 代わりに 2 票分を要求した」.
- 308) Всесоюзное совещание по вопросам перевыборной кампании Советов 1929 года. Стен. отчет. М., 1928. С. 80.
- 309) *Валентинов Н.* Новая экономическая политика и кризис партии после смерти Ленина. Hoover Institution Press, 1971. С. 250–251.
- 310) ВЦИК РСФСР. Массовая работа советов. С. 20.
- 311) Там же. С. 92.
- 312) ГАРФ. Ф. 1235. Оп. 106. Д. 288. Л. 105–106.
- 313) ВЦИК РСФСР. Массовая работа советов. С. 90.
- 314) ГАРФ. Ф. 1235. Оп. 106. Д. 291. Л. 58–59.
- 315) ВЦИК РСФСР. Массовая работа советов. С. 79, 80.
- 316) *Лужин А., Резунов М.* Указ. соч. С. 71–72.
- 317) Там же. С. 54–55, 58.
- 318) ГАРФ. Ф. 1235. Оп. 106. Д. 289. Л. 134.
- 319) ВЦИК РСФСР. Массовая работа советов. С. 101.
- 320) ГАРФ. Ф. 1235. Оп. 106. Д. 288. Л. 138–139.
- 321) На советском посту. Новосибирск, 1931. № 22. С. 5. См. также: Власть советов. № 10. С. 7; № 18. С. 8.
- 322) Власть советов. 1931. № 10. С. 7–9.
- 323) На советском посту. 1930. № 11. С. 4.
- 324) Власть советов. 1931. № 18. С. 8.
- 325) *Муругов И., Колесников А.* Аппарат низовых советских органов по материалам обследования НКРКИ РСФСР 1925 г. М.-Л., 1925. С. 56.
- 326) Советское строительство. 1928. № 9. С. 41.
- 327) На советском посту. 1928. № 10. С. 15.
- 328) Известия. 14 октября 1928 г.
- 329) Власть советов. 1930. № 14–15. С. 4.
- 330) *Лужин А., Резунов М.* Указ. соч. С. 187.
- 331) 奥田央『ヴォルガの革命』, 88 頁.
- 332) *Лужин А., Резунов М.* Указ. соч. С. 187–188.
- 333) ВЦИК РСФСР. Массовая работа советов. С. 79–80.
- 334) Всесоюзное совещание по вопросам перевыборной кампании Советов 1929 года. Стен. отчет. М., 1928. С. 72; Власть советов. 1929. № 18–19.

- С. 17–18.
- 335) Советская работа. М., 1928. № 22. С. 14.
- 336) XIV Всероссийский съезд советов. Бюллетень 15. С. 27–28.
- 337) ГАРФ. Ф. 1235. Оп. 106. Д. 288. Л. 103–105.
- 338) Там же. Л. 139. См.: Известия. 6 июня 1928 г. (А. Киселев); На советском посту. Новосибирск, 1928. № 6. С. 5.
- 339) Всесоюзное совещание переыборной кампании Советов 1929 года. Стен. отчет. М., 1928. С. 69; Известия. 20 октября 1928 г.
- 340) XIV Всероссийский съезд Советов. Бюллетень 15. С. 32–33.
- 341) Известия Северо-Кавказского крайисполкома. 1929. № 6. С. 39–40; Власть советов. 1929. № 16. С. 17.
- 342) Известия Северо-Кавказского крайисполкома. 1929. № 6. С. 25–26.
- 343) СУ РСФСР. 1928. № 101. Ст. 657.
- 344) Беднота. 28 августа 1928 г.
- 345) Советское строительство. 1929. № 12. С. 96–97.
- 346) ГАРФ. Ф. Р-374. Оп. 6. Д. 281. Л. 18.
- 347) Лужин А. Организация сельских советов. С. 33.その他,同様の資料として, Вилов А. Низовой советский аппарат накануне реорганизации. М., 1930. С. 79–80.
- 348) Советское строительство. 1929. № 5. С. 110.
- 349) 奥田央『ヴォルガの革命——スターリン統治下の農村』(1996年), 539頁.
- 350) 1930年の村ソヴェト選挙について, 溪内謙『スターリン政治体制の成立』第4部(1986年), 540頁以下を参照.
- 351) Коммунист. Самара, 1930. № 3. С. 54–55.
- 352) ГАРФ. Ф. Р-374. Оп. 6. Д. 287. Л. 169.
- 353) Советское строительство. 1928. № 9. С. 39–40.
- 354) ちなみに, 1930年12月(34号)の『クロコザール』には, ソヴェト選挙(都市であろう)の風刺画が掲載されている. タイトルは「静寂」.
- 355) ロシアにおける1920年代のフートル形成の特殊性については, 奥田央『コルホーズの成立過程』, 296–306頁に詳しい.
- 356) Власть советов. 1927. № 21. С. 21. (А. Сапунов)
- 357) Беднота. 22 февраля 1927 г.
- 358) Гимпельсон Е. Г. НЭП и советская политическая система. 20-е годы. М., 2000. С. 227.
- 359) Карп А. Сельсовет боевой штаб коллективизации. 2-ое дополненное изд. М., 1931. С. 41.
- 360) Гричманов А. Сельсовет после ликвидации округов // Известия. 24 августа 1930 г.
- 361) Власть советов. 1931. № 21–22. С. 6–7. 1930年代初頭の村ソヴェトの弾圧については, 奥田『ヴォルガの革命』, 239–241, 336–339頁なども参照. 新しい資料も見いだされており, 以下の論点も含めて再論を期したい.
- 362) Власть советов. 1933. № 17. С. 28.
- 363) 奥田央『ヴォルガの革命』, 339頁.
- 364) РГАСПИ. Ф. 17. Оп. 2. Д. 460. Л. 81 об.
- 365) Выборы в советы и состав органов власти в СССР в 1929 г. М., 1929. С. 69; Итоги выборов в советы РСФСР в 1930–31 г. Стат. сб. М., 1931. С. 13.
- 366) Советское строительство. 1935. № 2. С. 9.
- 367) ГАРФ. Ф. 1235. Оп. 108. Д. 83. Л. 133.
- 368) Путь советов. 1930. Ростов н/Д., № 21–22 (ноябрь). С. 15.
- 369) Хатаевич М. М. О ликвидации кулачества как класса. Самара, 1930. С. 26–27.
- 370) 奥田, 前掲書, 160頁.

(完)

〔東京大学名誉教授〕